

なんで他の転生者は家  
があるの？

クレナイハルハ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

病死しFate/Kaleid linerプリズマイリヤのクロエの体を押し付  
けられ、転生させられた転生者

戦闘？出来るけど体力は使いたくない  
投影？出きるけど、それじゃご飯は食べられない

チート？そんなのあっても住む場所がないと生きられない  
何もない彼女は、毎日を必死で生きる

「今度は空腹で死ぬのかしら…………」

この度、「ちいさな魔女」さんと「リューオ」さんの作品とコラボさせて頂きました！  
そのコラボ話のあるちいさな魔女さんの作品

『東方怪獣娘－怪獣を宿す幻想少女達－』の

リンクはこちらです！←←←

https://syosetu.org/novel/248657/  
同じくリューオさんの作品「小説家とドラゴン」のリンクは此方です←←←  
https://syosetu.org/novel/258548/

是非、読んでみてくださいね

# 目次

番外編ストーリー『バレンタインデー』	1	少女は眠り、残された者達は思い出す
私の居場所	117	戦場に舞う死の妖精
始めてのお出かけ	101	鮮血の妖精
お腹がすきました	139	傷付いた硝子（ココロ）
彼方の呼び声	159	夢、終わりへの前奏曲（プレリユード）
いい加減に報酬寄越せ下さいアラヤ様	179	最終章～私の真実とバースデイ
帰らせて貰えませんでした、ここ何処	202	壊れ行くモノ
?	210	運命の日
幸せな時間は続かない、本当ね	224	234
あれから一年	242	224
62	50	80
救われた者	117	101

剣の丘	無限の剣製	決着／天へと昇る光	【最終話】HAPPY BIRTHDAY	Y	真実	無限の剣製	決戦、人類の裁定者VS天使
暖かい場所	幕間の物語『イリヤスフイールの受難』	少女の涙と英雄の追憶	再開、英雄の帰還	種族共闘戦線 駒王／鮮血の妖精	423	427	429
412	382	441	427	423	412	382	412
461	456	451	451	451	451	451	451
ht (前編)』	末』	E p i s o d e : i , 5『もう1つの結	E p i s o d e : i 『特異点』	E p i s o d e : i , 5『もう1つの結	E p i s o d e : i 『特異点』	E p i s o d e : i , 5『もう1つの結	E p i s o d e : i 『特異点』
おうどん美味しい byクロエ (C.)	鮮血の妖精、カルデアヘ 膺作者の貴方と偽物の私	番外編『F a t e / G r a n d O r d e r』	315	315	315	315	315
370	353 336	370	353 336	370	353 336	370	353 336

h  
t  
』  
番外編『F  
a  
t  
e/  
s  
t  
a  
y  
n  
i  
g  
後編

# 番外編ストーリー『バレンタインデー』

クロエ side

お父さんの元に再転生し、少しの時間が過ぎた

旅館や動物園、映画館に言つたりゴールデンウイーク等の長期休みには温泉のある宿に泊まつたりと楽しい日々を過ごしていた

お父さんは私に沢山の物を見せたいらしく、色々な所に連れていくてくれる

それが凄く嬉しいけど、私は何も返せてない

だから今日、2月14日

バレンタインデー

前世では少し悲しい思いをしたことがあつたが、今世では少し今日を嬉しく思つてい

る

バレンタインデー、私がお父さんに感謝を込めてチョコをあげようと思つてゐるのだ  
私がお父さんに返すことが出来る日

「お父さん、 いつてらっしゃい」  
「おう！」

お父さんが出ていったのを確認して、私は自分の財布をもつて近くのスーパーに駆け込む

ついでにお金だが、一応この世界を救つたからとマイロードから多額のお金が振り込まれた私の口座が出来ていたので正真正銘私からのプレゼントになる

板チョコとチョコペン、チョコスプレー、あとは牛乳とイチゴを購入する  
イチゴはチョコに付けてチョコスプレーを掛けて冷やせば良い

次に100円ショップに向かってチョコの型とラッピングするための物とメツセージ帳、入れ物や袋も購入し家に戻る

ここまで知り合いと会つてないので、バレてないと言うか前世でも良くあつたのだが  
今日は学校のある普通の日で祝日じやない

そのため会わるのは当たり前なのだ

そしてその分私は料理に時間を費やし準備できるのだ

まあ、学校に行つてる子達は昨日に準備してたんだろうけどね

まず、買ってきたイチゴのヘタをとりヘタのあつた場所に爪楊枝を刺す

次に金属製のボウルに沸騰したお湯をいれ水を少し入れて冷やす

「たしか熱すぎると焦げるんだっけ?」

別の金属製のボウルの上に板チョコを2、3枚なげる  
「特殊、鶴翼千切り!」

次の瞬間、投影した新品の干将莫邪でチョコを切り刻み細く薄くなつたのを金属製の  
お湯の入つてない方のボウルで全てを残さず受け止める

注意! 鶴翼千切りは1000回切るのではなくチョコを千切りにするだけです。  
アニメでやつてたのつてリアルでも出来るのか試してみたくなるよね

そんなわけで次にチョコの入つたボウルをお湯の入つたボウルに入れて溶かす  
ゴムベラで出来るだけ丁寧に溶かし、チョコが全体的に溶けてきたら少しだけ牛乳を  
加えてまた混ぜる

2、3分ほど混ぜたら先程のイチゴの爪楊枝の部分をもつてチョコに潜らせてチョコ  
スプレーを掛ける

全部のイチゴを同じようにしたあと、一旦冷蔵庫で冷やして置く

そして次に残つたチョコを100円ショッピングで買ったハート型の容器に入れる  
「さて、再び鶴翼千切り!」

注意! 鶴翼千切りは1000回切るのではなくチョコを千切りにするだけです。

## (二回目)

ホワイトチョコの板チョコを三枚放り投げ再び投影した干将莫邪で千切りにしボウルで受け先程と同様に溶かす

そして先程と冷蔵庫に入れたイチゴを取り出してホワイトチョコを潜らせて再びチョコスプレーを掛け、冷蔵庫に入れて冷やす

先程冷蔵庫に入れた普通のチョコを型に半分ほど入れた物に余ったホワイトチョコを流す

すると白と茶色のハート型チョコレートになるのでそのまま冷蔵庫に入れて冷やす  
そして冷やしている間に使った調理器具達を洗う

冷やした白と茶色のハート型チョコにそれぞれの名前をチョコペンで書いておく  
一人はお父さん、もう一人はあの人

そうして出来上がったチョコを再び冷蔵庫に入れて冷やす

「よし、次は……」

100円ショッピングで買ったメツセージ帳にそれぞれメツセージを書いてと

そして冷やしているチョコ達を取り出してイチゴのチョコを2人分に分けラップイン  
グし先程のメツセージを入れてそのまま片方を冷蔵庫に入れる  
もう片方を保冷剤を入れたバックに入れる

## 5 番外編ストーリー『バレンタインデー』

現在時間は午後3時

まだお父さんが帰つてくるのにはしばらくかかる  
なので今からこのチョコを届けてくる

「よし、いってきま～す！」

そういうつて私は家を出た

「帰つたぞ～」

その声が聞こえ、私は玄関にいるお父さんの元に走つた  
「お帰りなさい！」

「おう！」

向かうと何故か少し疲れたようすのお父さんが帰ってきた

「疲れてるね、どうかしたの？」

「いや、今日はバレンタインデーだろ？ イッセーの奴の愚痴を聞いてたんだよ」

「あ、まあ家に帰ってきてからきつと貰えるよね。の人なら」

「だろうな」

そういって笑うお父さんに続いて少し笑う、これが私にとつての日常だ

「あ、お風呂の準備出来てるよ」

「お！ 助かるぜ、流石は俺の娘だな」

そう言つてお父さんが頭を撫でてくれる

「えへへ、ありがとう。今日のご飯どうする？」

「そうだな、今日は家で出前とるか。ラーメン屋に電話しとく」

「はーい。後で着替えとタオル持つてくれ！」

そういって私は台所に向かう

その後お父さんがお風呂に入つてゐる内に私もお風呂の準備をしておく

さすがに一緒には入らないけどね

そして数十分後

「上がったぞー」

その声と共にお父さんが首にタオルを掛けて戻つてくるので私は冷蔵庫から先程のラッピングしたチョコを取り出してお父さんの元に向かう

「お父さん！これ、私からの手作りチョコ！良かつたら食べて!!」

そう言つて差し出すとお父さんが少しきよとんとした後に赤いリボンでラッピングされた袋を受けとると、袋の中身を見る

「これ、本当にお前が作つてくれたのか!?」

「私、お父さんには凄く感謝してるの、私を助けてくれて居場所をくれて、私を色々な所に連れてつて……だからこれは私からのお返し。お父さん、私を拾つてくれて、家族になつてくれて本当にありがとう」

そう言うとお父さんが眼に少し涙をためながら私を抱き締める

「どういたしまして」

そう言つてくれて私は凄く嬉しかつたので元気良くうんと言つた

その後はお父さんとご飯を食べてテレビを見た

もう一つのチョコ、無事に○○○○○に届いてたらいいな

ヴァーリ side

「店主、会計を」

「あいよ」

ステップまでしつかりと飲み干した俺はそう言いながら席を立つた

俺があいつらの前で自分の正体を告げ、離れてからどれくらいいたつんだろうか  
アイツ……俺の妹となるクロエは大丈夫なのだろうか  
アザゼルの奴も元気にやつているのだろうか

そんなことをつい考えてしまう

「まいどあり」

店主が釣りと一緒に赤いテープでラッピングされた紙袋を渡された  
「なんだ、それ？」

「お前さんに渡すよう頼まれたんだよ、何でもこらでお前さんの良く来るラーメンの  
店を探し回つてたらしくてな、知り合いか？」

「そんな知り合いはいないが…………」

「そうなのか？まあ、貰つとけ。んじゃまた来いよ」

「ああ」

そう言いながら紙袋を受け取り、店の外に出る

そしてそのまま近くにあるベンチに座り紙袋の赤いリボンをとつて中を開けると  
ハート型のチョコと何個か小さなチョコが何個かと小さなメモのような物が入つて  
いた

チョコ、そういえば今日はバレンタインと言われる日だつたな

そう思いながらハート型のチョコをとる

「!？」

するとハートには白い文字で「お兄ちゃんへ」と書かれていた

銀髪で琥珀色の瞳の少女が頭のなかに過る

もう一つのメモを見る

『お兄ちゃんへ

元気にしてる？体を壊したりしてない？

今日はバレンタインデーなので、チョコを送ります。頑張つて行きつけをみつけたんだよ？あの1日のほんの少しだけどあなたの妹に、家族になれて嬉しかったです。

本当なら今でもテロなんて止めても帰つてきて欲しいけど、貴方の決めたことなので私は止めません。どうか、元氣でいてね。

貴方の妹、クロエ・フォン・アインツベルン。』

メモを読み終えた俺は小さなチョコを一つ口に入れる

「あまずっぱいな…………」

恐らくはイチゴをチョコに潜らせたのだろう  
ラーメンの後のデザートだな

それにもしてもアイツはこんなに料理がうまかつたのか、意外だな

俺はメモをズボンのポケットに入れてとハート型のチョコをかじつた  
「ありがとう、クロエ」

# お腹がすきました

とある路地裏

そこには外套を羽織った一人の少女がその場に座っていた  
「はあ」

——ぎゅるるるるううう——

「お腹、減った……」

そう咳きつつ、私はお腹を押さえ音が鳴らなくなるのを待つ  
ふと近くにあるゴミの残骸にある鏡の破片には琥珀の目に褐色の肌、色が抜けた銀髪

の小学生くらいの少女が映っている

誰もが見れば美少女だと言うであろう少女は、ボロボロの外套を羽織つており、更には顔色が酷く悪く

痩せこけた姿をしていた

「はあ」

深くため息をつき、少しでも体力を消費しないように目を閉じ、ボロボロだが少し暖かい外套に身を委ねる

私の名前はクロエ・フォン・アインツベルン

病死した私は神様から特典として

【F a t e / K a l e i d l i n e r】プリズマイリヤのクロエ・フォン・アインツベルンの容姿と能力】

だけを貰い転生させられた

なんでも通常なら一年の死者数の限界値を越えないのだけど、私の場合は死者数の限界値を越えてしまつたらしく、死者数の定理を維持するためにワタシは別世界に転生させたらしい

私のクロエに関するF a t e 知識は、二次創作とプリヤの1話2話を見た程度、その他は全てF G O からだ

なので、クロエと言う少女がどうして生まれたのかは知らないし

クロエが衛宮士郎、まあアーチャーエミヤの力を借りて戦闘していることぐらいしか  
知らない

特典があるだけで十分羨ましい？

ふざけてるのかしら？

二次創作なら、転生者は家やチート能力にお金などを心配ないでしょ？  
私にはなにもない

家も家族も友達、お金に身分証も

なにもない

あるのはこの体だけ

ねえ、他に転生者と言われる人がいるなら答えてよ

なんで家があるの？

なんでお金があるの？

なんで友達がいるの？

なんで幸せになれるの？

「はあ、何日食べてないのかしら…………駄目ね、考えるとお腹が減る」

そんなことを考えつつ、私はこの世界に生を受けたときのことを思い出す

神様に言われ、転生した先で最初に飛び込んできたのは葉のついた木と空を羽ばたい  
て行く鳥達

「夢じやなかつたんだ……」

起き上がりながらそう呟くと聞き慣れた自分の声ではなく、少女のような幼さを残し

た声だつた

取り敢えずここは公園？

取り敢えず自分の姿を確認したくて近くの男子トイレに入り鏡を見る  
少し高いけど少し離れれば見ることができた

そこにはワンピースを着た琥珀の目、そして褐色の肌の少女  
クロエ・フォン・アインツベルンが立っていた

「本当にクロエになつてる……」

そう呟き、男子トイレの外に出る

さすがに元男とはいえ、少女でも親の同伴なしで男子トイレにはいない方がいい  
取り敢えず、神様の言つていた転生特典であるクロエの容姿は確認できた

「次は、投影ね」

早速あの赤い弓兵が使つていた夫婦剣

【干将莫邪】を頭のなかで想像すると

手のひらに鉄のようや少し思ひけど慣れ親しんだような物の感触を感じ目を開くと

そこには

黒と白の双剣、干将莫邪がしつかりと投影されていた  
「凄い、本物だ」

思わずそう呟いて双剣に触れようとして、ふと周りを見る

で本来であれば魔術の行使は回りの人々に見られないよう結界等をはり  
神秘の秘匿を守らなければならぬ

私の周りに誰もいないのを確認してホツとした

見てる人がいないから良かつたけど、このままだと警察に捕まってしまう

両手の干将莫邪が消えるようイメージすると、手から黒と白の双剣は消えていた

「よし、取り敢えず家に…………」

家つてどこ?'

「つ!?

急いで私は持っていた私物を確認するために服のポケットに手を見る

よく二次創作なら、ポケットに神様の手紙やらなんやらが入つていて家までの住所が  
分かるはずだ

「嘘……何もない」

そう、何もなかつた

持つていた財布もなければ身分証明書もない

つまりは帰る家も、お金も、自分の身分を証明出来るものが何もない  
更には、私は男から女になつた

体の動かしかた、つまりはトイレとかの仕方は分からぬし教えてくれる人もいな  
取り敢えず先程、私が倒れていた所の近くにあるベンチに座つて考える  
一応、投影魔術は使えるけど

それで宝石を投影して売つたり、お金を投影したりはしたくない  
もちろん、食糧も盗んだりはしたくない

もし出来たら、直ぐにでも家やご飯は解決するんでしょうけど……そこまで私は堕ち  
たくない

「はつくちゅつ！……寒い」

体感だと、季節は春に入つたばかりに見える

また雪が降る可能性もあるし、吹く風が体を容赦なく冷やしていく

「取り敢えず、何か上着を……」

そんなことを考え、お金が無いことを思い出す

「改めて失つて、大切なものに気付くつてこう言う事を言うのかしら」

そう一人愚痴りながら、少しでもお金やご飯を恵んで貰う方法やこの世界で生きる方  
法を考える

前世での唯一の特技であるピアノで稼ぐ？

無理無理、今時そんなんで恵んでくれる人なんているわけ無いわ

拾つてくださいってダンボールに書いてその中に入つてればいいのかしら?

駄目ね、へたら警察か誘拐よ

まずは身分証を作らないと、でもそんなお金ないし

孤児院は待遇によつて変わるけど、嫌なイメージしかないから却下

「はあ、どうやつて暮らしていけばいいのよ……」

そうして公園で考えていると、いつの間にか辺りは暗くなつていた

「はあ、まさか転生して全てを失うなんて、考えたことも無かつたわ」

てつきり、毎日を楽しく幸せに暮らせるとばかり思つてた

改めて考えると、ラノベとか二次創作の神様は凄く良い神様なんだとつくづく感じる  
転生特典に無料でお金と住む場所まで貰えるんだから

その現状に軽く絶望しながら、ベンチに横になる

クロエの体は大人が、横になればはみ出るであろうベンチに収まる  
もう、考えても仕方ないわ

取り敢えず野宿して、明日考えましよう

そう思い体を猫みたいに小さくして目を閉じる  
寒いけど、寝れなくはないしたぶん大丈夫よね  
お休みなさい

19 お腹がすきました

「君、起きなさい。君」  
「んう？」

体を揺すられる感覚があり、私は目を開きつつ体を起こす  
目を擦りつつ、前を見ると青い服に帽子の二十代前半っぽい感じの人気がいた  
うん、どう見ても警察よね

「何かしら？」  
「君、どうしてここで寝てたのかな？親は？」  
うーん、どう答えたものか

転生したら女の子になつてて一人でした  
何で言つても信じて貰えないでしようし  
逃げようかしら?

……ついでに腰についたリボルバーも解析してみようかしら?

「いないわ。私、ホームレスだし」

「ホームレス? そんなはずないだろ、家出でもしたのかな?」

駄目ね、やつぱり信じてくれない

その内に、リボルバーは解析できたしもう投影は出来そうね  
どうせこのまま捕まるでしようし、逃げた方がいいわね

確かFGOではクロエの敏捷ステータスはB

サーヴァントの体で逃げるなんて余裕に決まつてるわ  
私はベンチから降りると、全力で駆け出した

「おい、こら! 待ちなさい!!」

さすがクロエの体

前世の小学校だつたとき異常に走るスピードが  
速い

ある程度まで走り、そろそろいいかと足を止める

「ふう、何とか逃げきれたわね。それにしても、ここは何処?」

適当に走つてきたり、何よりこの町?の地理も分からぬ

近くには路地裏のような場所の入口、入つてみると座れそうな捨てられた木箱やら色々と転がつていた

取り敢えずここならさつきみたいに見付かることはなさそうね

そう言えば、二次創作だと投影魔術で外套とか投影出来てたし、やつてみようかしら  
目を閉じてイメージするのは前世で見たF a t e / s t a y n i g h t のM M D  
で見かけたアーチャーの記憶で羽織つていた外套

手に確かな感触を感じて目を開くと子供には少し大きすぎる外套があつた

「出来た……」

取り敢えず羽織つてみるとやつぱり大きすぎたのかしたの方の布が地面に擦れてしまつている

やつぱり剣以外の投影はエミヤが言つてた通り干将莫邪を投影したときよりつかれた感じがする

大人であるエミヤの着ていた外套をイメージしたから大きな外套が投影されたのかな?

取り敢えず外套にくるまつて木箱に座る

はあ、疲れだし余計お腹が減つた

前世の父さんに母さん

私の転生後の生活は前途多難です

# 彼方の呼び声

クロエ side

「はあ、もう色々と慣れちゃつたなあ」

あれから1ヶ月の時間が過ぎた

女の子のトイレ問題は解決

慣れることも出来たし、お風呂に入れることにも慣れてしまった

まあ、川の周りに誰もいないことを確認してから川に入つて体を洗つたりはしてるから不潔ではない……と思う

何故か女の子の体になつてから、お風呂に入れないときついものがある

でも、それと同時に体が食べ物をあまり食べないことを学んでしまい、胃が小さくなつたと思う

前に路地裏に入つてきた白髪のお兄さんがいて、その時に菓子パンを貰つたけど、半分でお腹一杯になつてしまつた

あのメロンパンの味は忘れられない

そとはカリカリ中はふわふわで、甘くて身体中が幸せだった

前世ではいつでも食べれたけど、今になつて食べると、凄くメロンパンや食べ物の有り難みを感じることが出来た

それにしても、あの人アルビノなのに傘を差さなくとも大丈夫だつたのかな？  
それにあのお兄さん、どつかで見たことあるような気がするのよねえ

まあ、そんなこんなで

どうにか生き長らえる事が出来ています

そんな私は今、路地裏から離れ転生した日にいた公園に向かつています  
目的は水を飲むこと

今のところ、あのお兄さんの施し以外では食べるものを確保出来なかつた

そんな時は、水を沢山飲めばお腹が一杯になる

それに水は無料だからね

ちよつと足元がふらふらしているけど、まあ慣れてしまえば問題ないわ

公園に入り、水飲み場に向かう

夕方だけど、人が余り居なくてよかつた

水飲み場の水道の蛇口を捻り、水をガブ飲みする

「ふはー、これで暫くは持つわね」

そう言つて朝から鳴り続けていたお腹を擦る

……これで何か食べられたら良いのだけど、まあそんなの高望みね  
「はあ、いつかこの生活から抜け出す日が来るのかしら？」

そう咳き、水飲み場を後にしようと

『一答えよ、我が契約者よ。仕事だ』

「は？」

変な声が聞こえた瞬間、私は先程の公園とは全く違う所にいた

「（）（）（）？それにさつきから聞こえるこのうるさい叫び声はなんなの？」

しかも、少し先から凄くうるさい音が聞こえてくる

少し歩いていると、少し遠くで大きな白い龍と赤い龍が背中にいろんな羽を生やした  
人達と戦っているのが見える

何よあれ？

新手の映画かなんかの撮影かしら？

なんて現実逃避はやめよう

うん、あれは本物ね

あんなのは出来るだけ関わらない方がいいわ

それにこれ以上動いたらまたお腹が空いちやう

『「聞け、契約者よ。ここは貴様がいきるよりはるか前の時代。そこに擬似的な第一魔法で飛ばした』』

『まだだ、また頭の中に声が響き渡る  
てか、は？』

『私がいた時よりはるか前の時代つてまさか私タイムスリップでもしたの？』

『「その通りだ。お前は我の命に従い、お前も見えているであろう赤と白と二匹の龍を討伐してもらう」』

『は、なんで？』

『なんで私があの龍を殺らないといけないわけ？』

『それにそんか事したらまたお腹が空いちゃうじゃない！』

『「お主は我と契約した者の力を使つてゐる、故にお前には私の命令にしたがつて貰う」』

『なんで従わなきやいけないのよ』

『てか、もしかしてこの声つてエミヤが契約したアラヤだつたりするの？』

『「是」』

『うそでしょ、私に殺しをしろつてこと？』

『「お前があの幻想種を殺さぬのなら、あの場にいる奴らは全員死ぬ事となるだろう。』』

そしてそれによりお前が生きていた未来に大きな亀裂が入り、崩壊する——』

「ツ?!ふざけんじやないわよつたく……やればいいんでしょやれば!!あと、報酬にメロンパンを貰うわよ!」

そう言つて私は頭に響く声に向かつて叫び、クロエの戦闘時の衣装をイメージすると着ていたワンピースが赤い外套に黒いプロテクター等がついた少し露出の高い服装に変わる

着けてた外套は変わらないのね

英霊エミヤ、悪いけど力を借りるわよ

アーチャー工エミヤが使つていた洋弓を投影して構える

原作のクロエやイリヤとは違い、私の場合はちゃんとアーチャーの……エミヤの力を使つていることを知つてゐるから、原作のクロエよりは上手く投影出来るはず

全く、あんなに沢山の人?の命と私のいる未来を救えるならやつてやるわよ  
でも改めて考へると、私つて弓使うの初めてだけど大丈夫かしら?

まあ、クロエの体だしどうにかかるわ

「——I <sub>我</sub>  
am <sub>れ</sub>  
the <sub>子</sub>  
bone <sub>は</sub>  
of <sub>總</sub>  
my <sub>狂</sub>  
sword」

片手で弓を構え、もう片方の手で脳内にイメージした一振の螺旋状の剣を投影して弓につがえる

「これでも喰らいなさい、偽・螺旋剣!!」

カラドボルグⅡ カラドボルグⅠ

真名を解放して、白い龍の翼へと偽・螺旋剣を放つとそれは高速で飛んで行く初めて弓を射つたけど、さすがはクロエちゃんボディね

カラドボルグが白い龍の一翼を撃ち抜く

「ついでにこれもサービスよ。墜ちなさい

真名解放、虹霓剣!  
カラドボルグ ブローケン・ファンタズム 壊れた幻想!!

すると白い龍のもう片方の翼を撃ち抜いたタイミングでカラドボルグⅡに込められた魔力を爆発させる

すると、込められた魔力の爆発と爆発によつて飛ばされたカラドボルグの剣の破片が龍を傷付け突き落とした

「後は赤い龍だけね」

ん? あそこの4人、集まつて私の方を見てる?

見つかつた? でも関係ないわ

今私がすべき事はあの赤い龍を討伐することだけ

討伐すれば、お腹一杯になるまでご飯を食べてふかふかのベットで眠るという目的がいつかは叶える、といいと思いたい目的が果たせなくなる

あの赤い龍はカラドボルグⅡじや駄目、FGOの宝具、鶴翼三連かしら

?

そう言えばクロエは宝具で相手の背後に瞬間移動してたけど、どうやつてるのかしら  
でも転移出来るとしたら、あの4人の所から赤い龍に向かつた方がここから走るより  
は早いわね

出来るか分からぬけど、自分があの4人の目の前に瞬間移動するのをイメージする  
すると少し体が浮くような感覚がしたと思つたら、私は彼らの前に転移していた

## サーゼクス side

——何処で間違えたのだろうか

目の前の光景に、僕は思わず頭の中にはその言葉が過つた

天使、堕天使、悪魔の三大勢力による大戦

そんな中に突然と現れ、暴れる二天龍

赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオンを封印するために悪魔、天使、堕天使で協力し奴らへと挑んだ

目の前では、二天龍の攻撃で沢山の各勢力の戦士達が傷付き倒れていく

それが、こちらの不利な事を感じさせられた

「おいおい、こいつは不味い状況だぜサーゼクス！」

「サーゼクスちゃん！あの龍強すぎるよ！このままじゃみんなが！」

「踏ん張りましよう皆さん！このまま引けば、私達は終わりです！なんとしても今、封印しなければ!!」

状況を把握し冷や汗を流す堕天使のアザゼル

沢山の同士達が倒れていくのを見て悲鳴をあげる同士の悪魔、セラフオルー

二天龍を封印するために戦わなければと主張する天使長ミカエル

「くつ、二天龍はここで封印しなきやならない、たけど…………」

こうして話し合う中、同士達がどんどん傷付いていく

必死に頭を回転させ、この状況を打破する方法を模索する

何か手はないのか、何か…………

その時だ、ふと見上げた二天龍に向かつて何かが高速で飛んで行くのが見える

よく見ると、それは螺旋状の剣だつた

そしてその剣は白龍皇アルビオンの翼へと吸い込まれるように向かい、その翼を貫いた

「ツ!?

そしてその剣がもう片翼貫いた瞬間、その剣が爆発しアルビオンを地面に突き落とし

た

「アルビオンが倒れたよ!」

「何が起こつたのですか!」

「一体だれが!?」

そう言つて皆が周囲を見るなか、僕は少し先の崖の上を見ていた  
見付けたのだ、恐らくはあの剣を投擲したであろう者を

だけど、それを見た瞬間あたまを殴られたかのような感覚がした

その人物は、フード付きの外套で頭を隠しておどりの陣営の援軍かは分からぬが子供程の身長で手には黒い洋弓を持つていた

そう、投擲したのではない

あの弓で射ったのだ

あれほどの距離

白龍皇アルビオンの翼を貫く程の威力

剣が重ければ弓につがえるのも無理なはずだ

何より、あんな子供と言える見た目からあんな物が放たれたなんて  
「サー・ゼクスちゃん、アルビオンが……サ・ゼクスちゃん?」

「おいサー・ゼクス……一体何処を見てやがる?」

僕は未だに整理の着かない中、外套を羽織つた人物がいる崖を指差す

「あ? あそこには崖しか……なッ!」

「ええ!」

「あの場所からあそこのアルビオンを!」

彼らも知らないってことは、悪魔でも天使でも堕天でもない?

そもそも人間は冥界には入つてこれないはず

ならあの人物は一体……

そう考えていると、その人物は弓を手放す

すると弓が落ちた瞬間、まるでガラスのように割れて消えた

あの弓、まさか神セイクリッド・ギア器か

ならあの威力も領ける

その時だ、その人物が消えて僕たちの前に現れた

「なつ!?

思わず身構えてしまうが、それはアザゼル達も同じだつた

暫く沈黙が続き、外套の人物がこちらを一瞥すると何処からか両手に黒と白の双剣を取り出す

そして声が聞こえた

「大丈夫……いま、終わらせるから」

「え?」

するとその人物は両手の双剣を赤龍帝へと投擲した

「なつ!?

「おいお前！そんな剣を投擲したつて赤龍帝を倒せる訳ツ!?」  
アザゼルと僕が驚いたのは、先程の黒と白の双剣を投擲した事じやなかつた

「な、なんですか？」

その光景に、セラフオルーやミカエルも驚きの表情を浮かべている  
外套の人物は先程と全く同じ白と黒の双剣を両手に持っていたから  
「じゃあさつき投げたのは！」

先程、投擲された双剣は回転しながら真っ直ぐとドライグへと向かつていた  
「全く同じ剣なんて、作れる訳が…………いや、神器ならあり得るのか？」

詳しい知識はないけど、一度作られた双剣を模様して全く同じ剣を作りあげるなんて  
不可能だ

するとまた外套の人物は両手の双剣を投擲し、また同じように黒と白の双剣を何処からか取り出して投擲し、それを追うように途轍もない早さで戦場を駆け抜けていく  
僕たちも、駆け抜けていく外套の人物へと走り、向かうが追い付かない

「——山を抜き、水を割り——」

すると恐らくは外套の人物が放つたであろう声が耳に入る

恐らくは何かの詠唱だろう

外套の人物は少し先で戦う悪魔や天使達を追い抜き、投擲された双剣と並んで走る

「——なお墜ちることなきその両翼——」

ドライグへと飛び上がり、飛来してくる一対の双剣を手に取つて大きく振り上げるすると先程投擲された二対の双剣もドライグへと向かっていく

「——鶴翼三連!——」

そう言つて外套の人物が双剣をドライグへと振り下ろし、そのまま地面に着地すると外套の人物が持つていた双剣は先程の弓と同じように粉々に壊れ、消えた瞬間ドライグへ六つの大きな斬撃が襲い、ドライグは地へと墜ちた

「す、凄い…………」

「あの赤龍帝を一撃で倒しちゃった」

「あの方は一体…………」

僕やセラフオルー、ミカエルは驚きのあまり呆然としていた

そしてアザゼルはと言うと、外套の人物の双剣な弓、セイクリッド・ギア 器に興味が刺激されたの

か、その外套の人物へと向かっていた

セイクリッド・ギア

「おいさつきのカツケー技はなんだ!? それにお前の神 器は一体」

アザゼルがそう聞こうとしたその時だ、外套の人物がフラリと後ろに倒れそうになる

「おいッ！ 大丈夫…………ッ!?」

アザゼルがそれをどうにか支えると、外套のフードが取れ外套の人物の素顔が顕になつた

褐色の肌に色が抜けた銀髪、琥珀の瞳の人間の少女

だが、なによりその場の4人を驚かせたのは、その少女の状態だった  
ボロボロのワンピースを着ており顔色は悪く、酷く痩せこけていた

「お前、人間だつたのか!? しかも、そんな状態で…………」

「これは酷い…………」

「なんで、こんな風になつちやつてるの!?」

その時だ

「お腹、減つた…………」

少女が消えそうな声色でそう呟いた

「おい！ 大丈夫か！ なんでこんな状態で戦場になんで來た!!」

「人間は、冥界にこれないはずなのに」

「アザゼル！ とにかくその少女を拠点に連れ帰つて様子をみましょう」

ミカエルがそう言つた瞬間、少女の体から金色の粒子がこぼれ始めた  
「お腹いっぱい食べたかったなあ…………」

その言葉に、少女が今までの間ろくに食事を摂つていらない  
いや、摂ることが出来なかつたと言う事を知らされた

「おい！それつてどういう――――――」

アザゼルが聞き出そと声を発した瞬間、少女は金色の粒子となつて空へと消えた  
「サーゼクス、ミカエル。今すぐ彼奴等を封印の為の作業を進めるぞ」

「…………分かつてるよ」

そう言つて僕らは二天龍を封印する作業を行うために、歩き出した  
あの娘の犠牲を無駄にはしないために

クロエ side

金髪のイケオジに支えられながら『お腹一杯になるまで（メロンパン）食べたかった  
なあ』と思いながら気絶して

目が覚めるといつも寝ていた路地裏に倒れていた

『——よくやつた、我が契約者よ——』

「アラヤ？ここにいるつて事はもとの時代に戻つて来たつて解釈でいいの？」

『——是——』

「メロンパンは？」

『——なし——』

「ひえ！？」

いい加減に報酬寄越せ下さいアラヤ様

クロエ side

アラヤ社によるタダ働きから1ヶ月

魔力の使いすぎと空腹でぶつ倒れそうですが  
私はなんとか生きています

嘘です、路地裏に倒れて横になつてます  
なんと、最近雪が降りました

おい転生させた神、泣くぞ?  
年がいもなく大泣きするぞ?

まあ、そんな年じやな……：そんな見た目だけど

マジで寒い、外套無かつたら死んでたわね

この季節で一番怖いのは凍死だ

それに冬だから川に入つて体を洗うなんてとてもじゃないが出来ない  
「はあ、もう何日食べてないか覚えてないわ」

——ぎゅるるるるううう——

「…………アラヤマジ許すマジ」

今度こそ絶対働かないもんね！

転移させられても動かないもんね！

タダ働き反対！報酬よこせー！

はあ、一人で言つて悲しくなつてきたわ

「少女よ、生きているか？」

声のした方を見ると、前にメロンパンをくれた白髪アルビノのお兄さんが此方を見つめていた

「前の、お兄さん？スンスン、美味しそうな匂い…………」

手にはまだ温そうなスープを紙のカップに入れたものを持っていた

「それ、貰つてもいいの？」

「前と同様、欲するならば施そう

「…………下さい」

ふらふらする足に力を入れて立ち上がりお兄さんからスープの入った紙カップを受け取る

「……………温かい」

木箱に座つてゆつくりと飲む  
体がポカポカするし心も温かい  
「はあ……………幸せえ」

そう呟いて更にもう一口

そうしているとき、お兄さんはと言うと  
ずっと隣で立つたまま此方を見ている

たが私は気にならない

いつぶりの食事かは覚えてない

本当に、このお兄さんは優しい人だ

恐らくは私があまり食べていなく、胃が弱っている事も考慮してこのスープを持つて  
きてくれたのだろう

「本当に、温ったかいなあ……………」

あれ？何でかしら、目の前が滲んで見えない

一度スープを膝に置いて目元を拭う  
拭つても拭つても、目は滲んだままで

「あれ？可笑しいわ、なんで私……………」

目から涙が流れるのを感じて、触ると

涙に触れた指が少し湿っていた

そうして泣いている私の少し横に、お兄さんはじつと佇んでいた  
今はなにも言わずに横に居てくれたのは、少し良かつたと思った

「美味しい、温かい」

取り敢えずそれを気にせずにスープを最後まで飲む

「ごちそうさま、美味しかったわ。ありがとう、白髪のお兄さん」

「ああ」

そう言つてお兄さんは、路地裏から出ていった

???  
s i d  
e

歩く 少女、いや元マスターであつた彼女にスープを届けた俺は活動拠点である喫茶店へと

なぜ俺がこのような形で現界しているのかは不明だが  
元マスターであつた彼女をこれからも見守つて行こうと思う  
これが俺に出来る唯一の事だ

クロエ side

あのお兄さんが帰つてから少しの寂しさを感じたけど、頭を振つてその思考を消し  
久しぶりの満腹感に浸る

「眠、い…………」

そう咳き、木箱に横になつて外套に身を委ねる  
そしてうとうととし、眠気に負けて寝ようと

『――答えよ契約者。仕事だ――』

したタイミングで頭の中に声が響き渡る

「ちくしょう…………あと少しで寝れたのに」

このまま寝られたらどれだけ良かつたか

そう思つていると、いつの間にか私は暗い森の中にいた

「今度は、よりもよつて森…………」

せつかく満腹になつたのに、森で動き回つたらまたお腹がすいちやうじやない

『「契約者よ、この先にいる黒猫の追手を始末しろ」』

「はあ？何いつてんの？更に言えば私、猫苦手なの忘れた？」

そう原作だとイリヤとクロエは猫が苦手だったのだ

私の場合はクロエの体と能力を貰ったからちゃんととは分からぬけど

『「早く追手を始末しなければ、黒猫の妹と再会できず死ぬ」』

はあ？てかなんでアラヤさん猫助けようとしてるの？

猫好きなの？

猫耳萌えくな感じなの？

『「更に言えば黒猫が死ぬことでお前が生きている時代にも影響がおよび、タイムパラ  
ドックスが発生し、お前の生きている時代は消滅する」』

「ああもう！やればいいんでしょ！」

本当に、アラヤのああいう言い方マジで嫌い

更には私が関与しないとまた私の生きる時代滅ぶじやん！！

脳内で、クロエの戦闘時の赤い外套にプロテクターの姿を想像すると外套はそのまま  
に服が変わる

そして木々を跳んで渡りアラヤの指定したポイントへと向かう

この方が森の木々を避けつつ走るよりも体力の消費が少ない

てか、やつぱりこの体

人間やめちやつてるなあ

そうやつて思いつつ跳んでいると、少し先で黒猫が走っているのを見つける  
私は少し加速して地上に降りて黒猫を拾うと、特に何も無かつたので肩に乗せ直ぐに

木々へと飛び移る

「にや!<sup>^!</sup>にやにやにやん!」

「黙つてなさい黒猫、死ぬ氣で掴まつてないと落ちるわよ!!」

そう言つてそのまま木々を渡りながら後ろを見ると背中に翼のある三人の人間?が

追いかけてきているのを確認し

次の木々に渡るため、跳んでそのまま背後を向き

右手に洋弓、左手に剣を三つ投影する

そして剣を纏めてつがえ、発射する

「当たりなさいー！」

すると、剣はそれぞれの三人の頭を貫き

そしてガラスのように割れて消える

そして木の幹に着地し、地上に降りる

はあ、この体のお陰で頭に思い浮かべた通りに動けたわ

肩にしがみついていた黒猫を掴んで地面に下ろす

「はい、もう終わつたわよ」

「にやん！」

はあ、疲れた

もうおうち（路地裏）に帰つて寝たい

「ニヤツ!? にや、にやにやにやん!？」

はあ、それにしても何でこんな猫一匹助けるためにアラヤさんが動いたのかねえ  
〔体からなんで光が!?〕  
〔にやにやにやにやん!〕

ぎゆるるるるううう

はあ、木々を渡つたり弓をいつたりしてお腹は空いたし眠気が凄い  
どうせこの後、前みたいに路地裏に戻つてるだろうし寝ちゃおう

起きたら今度こそアラヤにしつかりと報酬を寄越して貰おう

早速私は戦闘服からいつもの白いボロボロのワンピースの上に外套を被つた姿に戻り地面に横になる

「…………お休み」

???  
s i d e

「お母さん！神社の境内に、この子が」  
「あら？何でこんな所に？取り敢えず家に連れて帰るわ」

帰らせて貰えませんでした、ここ何処？

黒歌 side

あの日、私は猫の姿で追つてから逃げていた

まさか猫になつているのをバレるとは思つてなかつたにやあ  
頭の片隅でそんなことを考えながら必死で走る

やはり猫の姿だと、悪魔から逃れるのは難しい

私が数歩かけて移動するのを、奴らは一步で移動できてしまふ  
そして追つては私の直ぐ後ろまで迫つていた

捕まる、そう思つたときだつた

突如として体が浮く、見ると褐色で銀髪の少し痩せこけた少女が私を抱き上げていた  
そしてそのまま跳躍し、木々を飛び渡つて行きながら私を肩に乗せる  
「にや!<sup>あん</sup><sub>あん</sub>にや<sup>ん!</sup><sub>ん!</sub>にやにやにやん!」

私がこの子の肩に捕まつて思わずそう言つたが、今私は猫のため  
言葉にはならなかつた

「黙つてなさい黒猫、死ぬ氣で捕まつてないと落ちるわよ!!」  
すると、少女は私に向けてそう言うので私は振り落とされないように必死で捕まつて  
いると

目を疑うような事が起こつた

私の捕まつている子が木々へと跳んだ瞬間に、背後へ向き直る

そしてどこからか、取り出した洋弓にまたもや何処からか取り出した剣を三つ纏めて  
つがえたのだ

剣？矢じやなくて！？

そもそもこの子の何処に片手剣を三つ片手で持てるような力が？

「当たりなさい！」

そう言つて少女が弓をいると

恐らくは私を探しているであろう追手がこちらへと走つてきていた

そして少女のいつた剣はまるで吸い込まれるかのように奴ら三体の頭を貫いた  
なつ！？

少女はまるで何度も行つた事があるかのようだ、洗練された動きで奴らを殺した

そしてそのまま流れるかのように着地し私を下ろした

「はい、もう終わつたわよ」

「にやにやん」

何はともあれ、この子のお陰で助かつたし

いつか白音と再会すると言う目的に走れそうにや

そう思つていると、少女の体から金色の粒子のような物がこぼれ始めた

「にやにやにやにやん!」

そしてその粒子がこぼれるに連れて少女の体が薄く半透明な物になつていく

「ニヤツ?!にや、にやにやにやん!」

そう言えばさつきからこの子、私がこれだけ騒いでるのになんて気づかないの?

改めて見ると、この子

ボロボロのワンピースに体が酷いぐらいに瘦せてる

こんなんであんな戦闘をしたら体が:!?

もしかして、さつき私を助けた時に何かしらの力を全力で使つてしまつたから

もう体が:.....

——ぎゅるるるるううう——

その時だ、少女のお腹から音がなるが少女は目を瞑つて動かないまるで、今の少女は死期を悟つたかのような感じだつた  
そして

「…………お休み」

少女がそう呟いた瞬間、目の前にいたはずの少女は光の粒子となり消えていった  
あの子つて一体なんなんにや…………  
確かに目の前いた筈の女の子の存在が消えていたけど、幻を見た何ては思えなかつた

クロエ side

「知らない天井だ……本当にこの台詞使うことがあるんだ」

目が覚めると、いつもの路地裏ではなく  
和室らしき場所の布団に眠つていた

「…………？」

落ち着いて、ステイ・クールよ

常に優雅たれ、私

私は確かにアラヤに呼ばれて黒猫を追つていた追手を奴らを殺して  
それで疲れて眠つて、起きたら知らない天井  
知らない和室、知らない布団に眠つていた

というか、改めて考えると

私は人を殺したのに、あまり心が動かない  
前世の僕だつたら発狂するか、鬱になるか  
血液恐怖症とかになつてそうだ

「一体どういう事なの？」

知らない布団に横になつたままそう考える

布団柔らかい、そうだ

この布団を解析して、何時でも投影出来るようにしよう!

そうと決まれば私は直ぐに敷き布団と掛け布団を解析した

これもし家に住めるようになつたら何時でもこのふかふかを味わえる

それにしてもここは何処なのだろうか?

もしかして、この場所はアラヤが頑張つた私への報酬として……

そう考えたとき部屋の戸が開き、女の子と恐らくはその母親らしき人物が部屋に入つ  
てきた

「あら? 起きましたか?」

「は、はい…………あの、どうして私はここに?」

そう言いながら体を起こすと、私は何時も着ているボロボロのワンピースではなく簡  
素な和服を着ていた

「あれ? 服が…………」

「貴方が着ていた服なら洗濯しているから、今はそれを着ていて下さい」

「え!? な、何もそこまで。そもそもどうして私はここに?」

「ええつと、貴方がうちの神社の境内に倒れていたのを見付けて、心配だったから連れて

きたのよ」

へ？神社の境内！？路地裏じゃなくて！？

ちよつとアラヤ！

どうなつてんの！？

タダ働きの次は拉致ですか！？

辞めようかしらこの会社、無理ですね

分かります（分かりたくない）

「そ、そだつたんですか……」

少し混乱しているせいか、あまり言葉が続かない

「ねえ、貴方のお名前は？私は姫島ひめじま朱乃あけのよ！」

「私は姫島ひめじま朱璃しゅりよ」

姫島？どつかで聞いたことあるような…………たぶん前世のご近所さんの名字だっけ

？

「私の名前はクロエ・フォン・アインツベルン」

「そつかクロエちゃんね。クロエちゃんはどうしてうちの神社に寝てたのかな？」

「どうして姫島さんの神社にいたのかは、分かりません」

「そ、そ…………」

すると、朱璃さんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる  
これに関してはマジで私も分からないんですすいません  
正直言つて罪悪感が！罪悪感があ！

黒猫を助けたんだから帰れると思つてたのに帰れてないし  
「じゃあ、お家は？神社の近く？」

「……そんなのないわ」

そう言つて慌てて自分の口を押さえるが遅かつた

私の家なし宣言に朱璃さんは顔をしかめ

娘の朱乃さんに至つては目に涙が溜まつてしまつていた  
ど、どうしようこの状況

正直言います、罪悪感が！罪悪感があ！

ちよつと待て、この状況でこの方々のお父さん的な人が来たりしたら  
最悪、私死なない？大丈夫？

朱璃 side

「……そんなのないわ」

目の前にいる女の子

色の抜けた銀髪、褐色の肌で赤い目をした少女

クロエちゃんから出たその言葉に私は思わず顔をしかめてしまつた  
この子は朱乃と変わらないくらいの年齢のはず

なのに家もなく、記憶喪失

更に言えば、体は痩せこけていた

59 帰らせて貰えませんでした、ここ何処?

恐らくは、親から虐待か何かしらをされていて  
食事もあまり食べることが出来ず

逃げ出して来たのでは無いだろうか?  
そんな彼女にかける言葉が見つからず

取り敢えずお風呂に入れたは良いものの  
これからどう接すればいいのか

朱乃は先程から心配そうにクロエちゃんの向かつたお風呂の入り口を眺めている  
もし出来たら、彼女も私が

「ねえ、朱乃」

「?」

「もし、クロエちゃんと家族になれるとしたら……どうかしら?」

クロエ side

「はあ〜〜〜

そう息を吐きながら久しぶりに暖かいお湯の中に体を沈める

私は今、朱璃さんのご厚意でお風呂にいれて貰つたのだ

あのあと、どうにか落ち着いたのか

かける言葉が見つからなかつたのか分からぬが『取り敢えず、よかつたらお風呂に入る?』

そのご厚意に私は申し訳ないが甘えてしまつたのだ

流石に慣れたが、やつぱり体を洗うなら暖かいお湯に浸かりたいのだ

そんな感じでお風呂に入つてゐるのだが

正直言つて、私もまだこの状況を理解していない

一体アラヤは何を思つて私をここに飛ばしたのかしら?

61 帰らせて貰えませんでした、ここ何処？

そう考えつつ、ふと窓から見える月を眺めた  
やつぱりお風呂つて暖かいなお

# 幸せな時間は続かない、本当ね

クロエ side

お風呂から上がると、着ていた和服をおいた場所の隣に私が着ていたワンピースが置  
んであつた

あ、洗濯終わつたのね

そう思いながら、体と髪を拭いて置いてあつたワンピースを着る

うん、何だかこつちの方が落ち着くわね

そんな風に思いながら浴室を出ると、朱璃さんが浴室の入り口近くに立つて  
いた  
もしかして、待つてたの？

「す、すいません。お待たせしました」

「大丈夫よ、気にしないで。それと、良かつたら泊まつていかない？あと少ししたらあの  
人が帰つてくるし、相談してみるわ」「え？ど、どうして？」

なんで私が泊まる流れになつてるの？  
ねえ、誰か教えてえらいひと！

引きこもり姫：姫好みの展開キマシタワーー！

マギ☆マリ：今のうちに楽しんだら？

盾少女：えっと、頑張つて下さい！

最後の主<sup>マスター</sup>：取り敢えずさつきの人に聞いてみたら？

髭ブラック：良ければ拙者のお家に

ロマン@エグゼイド：→精神科にいつたらどうだい？

サンタ：赤い弓兵さん、事件です！

所長初代（本人）：取り敢えず私の部屋来る？

月の主<sup>マスター</sup>：犬のお巡りさん、こいつです

ミスターアゾット：自害せよ、ランサー

青槍：俺は死んでねえ！

赤い弓兵@女誑し：おや、とつくにくたばつてていると思つたのだがね。それより私の名前、後半は可笑しくないかね？

輝ける星：あながち間違いではないのでは？以前にリンとサクラを同時に相手していたではないですか

一般通過遠野兄貴：いや五人くらい相手にしてただろ？

全性癖対応型蓮華：あら？ 私はどんな愛でも受けとめますよ？

美の赤いアクマ：ねえ、さつき食堂でアーチャーが死んでたんだけど、何かあつたの？

赤い天使：姉として言うと、知らない方がいいのだわ

ヤンデレ@狂戦士<sup>バーサーカー</sup>：ワタシノあんちんサマハドコデスカ??

幼女絶対守るバーサーカー：すまない、力になれそうにない  
すまないさん：すまない、助けになれなくて本当にすまない

…………誰も當てにならないわね

それにもしても、なんか凄く沢山いた気がするわ

「それじゃ、私はご飯作りに行くからさつきの部屋で休んでてね」

結局、私が何故泊まることになつてているのか聞けないまま、朱璃さんは廊下を歩いていつてしまつた

そんなわけで取り敢えず私はさつきの部屋の布団の上に体育座りで座つてゐるのだ

が

…………何処か、落ち着かないわ

今まで外で生活してきたからか、風が吹かず

かつ寒くないこの空間は、少し慣れないと

そう言えば、前世の頃に部屋の隅っこに座つて落ち着いたことがあつたつけ？  
試してみよう、そうすれば少しは落ち着くかも

そう思い、私は部屋の隅っこに体育座りして膝に顔を埋める  
うん、なんだか少し落ち着いたかも

それにしても、いつも外で寝てるのに今日は部屋に寝ていて  
いつも川で体を洗い少し寒い思いをしていたのに、暖かいお風呂に入ることが出来た  
なんか、夢みたい

もし私の家とか、家族とかがちゃんとしてたらこんな風に過ごしてたのかなあ  
まあ、そんなこと考えても意味ないわね

もし私がここにいるのが、アラヤとガイアの抑止ニより前の場所からすぐ転移させた  
とするなら

直ぐにこの場から消えることになる

なら、あんまり長居しない方がいいわね

この生活に慣れたら、私はきっと

思考の海に沈んでいると、部屋の戸が開き少し厳つい顔で体格が凄く良い男性が入つ  
てきた

「お前が、朱璃の言つていたクロエ・フォン・アインツベルンか？」

そんな男の問いに私はどうにか頭だけ動かして頷く  
というかぶつちやけ怖くて声がでない

少し体が震えてる、私

あんなに怖い人知らない

なに？ ヤ○ザなの？

朱璃さんの話だと神社だよね？

ヤが着く人が管理してるお家なのここ？

お願ひだから、私をぎろりとした目で見下すの止めて！

怖いから、震えちゃうから！

「今日は泊まつていくといい」

すると、その人はそう言つて部屋を出ていった

はあ、怖かつた

てか、やつぱり私はここに泊まることになつてるの？

バラキエル side

今日、家に帰ると朱璃からとある少女が神社に倒れていたと聞いた  
何でも、外套に羽織つた銀髪で、褐色  
赤い目の可愛らしい少女らしいが、着ていた服はボロボロで体は酷く痩せ細つっていた

それでその子を中心に運んで寝かせ、起きてから話を聞くに名前は覚えているらしい  
が、それ以外は覚えていないらしい

更には、家が何処か聞いたときは少女が『そんなのはない』と言つていたらしい  
朱璃が言うには瞳の奥が黒く濁つて いる用に見えたらしい

「出来ればその子を泊めてあげたい、か？」

「ええ、それにしても倒れているところを見付けるなんて、なんだかあの時みたいね」

「ああ。取り敢えずその子を一度見てくる」

そう言つて俺は朱璃から聞いた場所、客間の戸を開くと中央に布団が敷いてあるが誰もいない

一瞬そう思つたが、違つた

少し色の抜けた銀髪の少女が部屋の隅つこに膝を抱えて座つていた

その様子は何処と無く寂しそうで

そして何かに怯えるように震えていた

「お前が、朱璃の言つていたクロエ・フォン・アインツベルンか？」

試しにそう聞いてみると、彼女は震えながらも此方を見た

朱璃から聞いていた通り、酷く濁つていると錯覚される瞳だ

まるで、親から虐待か何かをされたよう……ッ！

家は？と言う問い合わせなんはないと言う発言は、彼女が何らかの形で家にいられなくなつた

いや家に居たくなくなつたと言う事ではないのだろうか？  
そして記憶がないのは、親からの虐待が酷く

その場から逃げだし、神社に来て取り敢えず安心した拍子に倒れ  
親に虐待されていたと言う事実

または、それ以上にショックな何か

そんな過去を封印する事で記憶喪失となつた  
ならこの少女に関する事が全て納得が行く

俺はそんな少女の思考を止め、出来る限り優しい声色で口を開いた

「今日は泊まつていくといい」

そう言って俺は客間から出て朱璃の元へ戻る

「朱璃、泊めて上げよう。恐らく彼女はよほど酷いことに会つてきたみたいだ」

「ええ、少しでもあの子の心を癒してあげたい。でも、それだけじゃ駄目よ、出来るなら  
あの子を……………」

クロエ side

姫島さんのお家に泊めてもらつてから3日  
何故か私はまだ姫島さんのお宅で過ごしていきます  
更に言えば

「うふふ♪」

朱璃さんの膝に座らせられ、ずっと頭を撫でられています

今までの間、暇さえあれば朱乃ちゃんと朱璃さんが私を交代で撫でて来るのです  
はい、縫いぐるみですか？

暇さえあれば泊めてくれてる家の母娘が抱き締めて撫でてくるそうですよ？  
NO・ウサギも誰もそんなの呼んできません！  
羨ましいので黒ウサギも混せてください！

黙りなさい、カラドボルグぶっぱするわよ

「お母さん、今度は私の番です!!」

「あらあらうふふ、もう少しぐらいいでしょ?」

まあ、泊めてもらつてる身ですから何も言いませんけど  
実際、私が元の時代に戻つたらと考えると少し怖いわね

少しこの生活に慣れてきてしまつてる

しかも昨日は家族写真を撮ると、バラキエルさん（朱璃さんの旦那らしい）

顔の怖いと怯えてたが、話してみると真面目で優しい人だつた

てつきり私はカメラマンをするのかと思つていたけど、なんで家族写真に私も入れる  
わけ?

私は居候みたいなものだから、家族ではないのだけど

まあ、朱乃ちやんにお願いされ

朱璃さんとバラキエルさんの後押しで私は一緒に撮ることになつた  
この場合、私が元の時代に戻つたらこの写真はどうなるのだろう?

「ツ!?

夜中、突如として大きな爆発音が聞こえ私は布団から飛び起きた  
頭の中でアーチャー＝エミヤの経験が、私の頭に警告を告げてくる  
これは急襲だと

私は即座に部屋から出ると、廊下に朱璃さんが朱乃を連れて立つていた  
「着いてきて、逃げるわよ！」

私は何も言わず頷いて、朱璃さんと朱乃ちゃんに続き裏口から外に出る  
そして走る、私は本気で走ると二人を簡単に追い抜いてしまうので二人に追走する形

で走る

チラリと後ろを見ると、前世にチラツと漫画で見たことがある陰陽師みたいな服と札を持った男が何名か此方へと走つてきていた  
わお、本当に陰陽師かどうかわからないけど  
そう言う人たちつているんだ

そう思いながら走つていると、だんだんと朱璃さんと朱乃さんの息も荒くなつていた  
そしてふと後ろを見るとさつきまで此方へと走つてきていた陰陽師達が消えていた  
疑問に思いながら前を向くと、少し先に先程まで後ろを追走してきていたはずの陰陽師達が立つていた

朱璃さんは走るのを止め、朱乃ちゃんと私を守るように前に出る

三日間泊めてくれたバラキエルさん、朱璃さん、朱乃ちゃんの為にも  
私が前に出て戦えば、この二人を逃がすことが出来る

「クロエちゃん朱乃の事をお願ひね。私はこいつらの相手をして時間を稼ぐから、お願  
い出来る?」

「お母さん…………」

ツ!

…………そんな台詞、言われたら

つ

すると陰陽師達は札を此方へと構えると、何らかの術式を発動し此方へと炎や雷を放

私は走つて雷や炎の二と朱璃さんの間に入る

片手を炎や雷の方向へと翳し、そのまま爆炎に飲み込まれた

「そんな…………クロエちゃんツ!?」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアア!?」

そんな叫び声が聞こえ、私は思わずクスリと笑いながら、口を開いた

「<sup>ロ</sup>熾天覆う七つの円環」

爆炎が七つ桜の花びらのような盾が展開され、防がれおり、朱璃さん達を守った  
そして私は爆煙の中で、戦闘服である赤い外套に黒いプロテクター等がついた少し露  
出の高い服装に変わる

そして私が生きていることに陰陽師の奴らは驚愕の表情を浮かべ

朱璃さんと朱乃ちゃんは信じられないような物を見たかのような表情を浮かべてい  
た

「クロエ、ちゃん？あなた、一体…………」

「朱璃さん、時間を稼ぐのはいいけど…………別に、アレを倒してしまっても構わんのだ  
ろう？」

「そ、そんなの無理よ！ そんなことしたら、クロエちゃんが」

私は朱璃さんの警告を無視して両手に白と黒の双剣、夫婦剣【干将莫耶】を投影し投  
擲

そのまま投擲した干将莫耶は一番手前の陰陽師の両肩を切り裂き

私はそいつの肩に跳躍し蹴り着けて更に跳躍する

そして洋弓とを二つ剣を投影し下の両肩を切り裂いた奴とその近くにいる奴に向  
て弓につがえる

弓をいると、二つの剣は二人の陰陽師を頭から貫いき絶命させた

そして下へと落ちながら両手に再び千将莫耶を投影し、此方へと放たれた陰陽師の炎の氷に向けて投擲して防ぎ地面へと着地する

そして今度は赤く棘のある朱槍を投影し少し遠くにいる奴にサーヴアントとしての本来のスピードで接近して槍を放つ

「刺し穿つ死棘の槍ツ!!」

そして、見事陰陽師の心臓に突き刺さり絶命

そうしてゐる内に高速で朱璃さん達の前に戻り洋弓に螺旋状の剣をつがえる

「——I 我が骨子は狂れsword」

そして残りの陰陽師の奴らの足元へと狙いを定める

「偽・螺旋剣!!」

放された螺旋剣が奴らのいる墓所の中央近くに刺さつた

「さようなら、壊れた幻想」

すると螺旋剣に込められた魔力が爆発し、その場にいた陰陽師の全てを薙ぎ払つた

戦闘が終了した時に、後ろから気配を感じて振り向くと

何時から見ていたのか、朱璃さんと朱乃さんの隣にバラキエルさんが立つていた

バラキエルさんも朱乃ちゃん達と同様に信じられない物を見たよう目で此方を見つ

めてくる

それはそうだ、三日間泊めていた少女がこのような現場を生み出したのだからすると、タイミングがいいのか悪いのか

前と同じように体から金色の粒子が零れ始めた

「クロエちゃん、あなたは一体……」

「クロエ……」

「朱璃さん、バラキエルさん、朱乃ちゃん。今までお世話になりました」

「……え？」

朱璃さん達と過ごした日々が頭の中で再生される

私は今出来る、最高の笑顔を浮かべた

「ありがとう」

そう言つて私は、その時代から消失した

目が覚めると、何時もの路地裏に倒れていた

「戻つて、きた……」

どうやら今回はちゃんと元の時代に戻つてこれたようだ

相変わらずホームレスだけど

外套のフードを被り路地裏から出て記憶を探りあの神社へと向かう

もしあの人たちが生きているのなら、この目で確かめたい

その思いで、私は神社へと上がる階段をどうにか見付けだした  
だが、その石の階段は酷くボロボロで所々に雑草が茂つていた

嫌な予感がして、階段を駆け上がる

そして目の前に写つたのは、整備されておらずボロボロとなつた神社と朱璃さん達が

住んでいた家があつた

私は、目の前の光景を認めたくなかつた  
もしかしたら、あの人達は…………

「守れなかつた、の…………」

そう考え、私は力の抜けた足をどうにか動かして路地裏へと戻る  
私はあの人たちを救えなかつた、その事実が重く私の両肩にのしかかつた

# あれから一年

クロエ side

私がこの世界に生まれ、外套とこの身1つで生きることになつてからとうとう一年が過ぎ春となつた

やつと温かい季節が来たと思いつつ！私は外套の中で丸くなる  
そもそも、年を越せたこと事態に凄く驚いた

それと最近はお風呂が恋しくなりました

朱璃さんや朱乃さん、バラキエルさんの家でお風呂にいれて貰つたが凄く頭に残つて  
いるからか、最近はお風呂のことばかり考えている

でも、あんなに優しくしてくれた人達は、もういない

そして年末、私は再びアラヤに呼ばれとある教会の牧師である紫藤トウジさんだつた  
かな？

その人とその人の上司さんとの問題を、どうにか話し合いだけで誰も死なずに解決さ  
せる事が出来た

その他にも、沢山の場所に飛ばされた

人体実験をされた子供達が死んでいる場所

そこで私は一人の少年しか救うことが出来なかつた

私に助けてくれてありがとうと言つてくれた

救われて笑顔を向けてくれた少女は

次の日には絶望した顔で死んでいて

泣きながら助けてと懇願してきた子供も、物事が終わつた後には地面に倒れていた

何も救えなくなつた

殺して、救つて、切り捨ててて

また殺して、切り捨てて、救つて

殺して、殺して、殺す事を繰り返した

沢山の人人が死んでいくのを見た

その後も、殺して、切り捨てる事を繰り返してきた

飛ばされて、言われた通り殺して

切り捨てて、殺して、殺して、切り捨て続けた

色々な人を見た

『何故助けなかつた!』と泣き叫ぶ人がいた

『お前なら守れただろ！』と怒鳴る人がいた

『偽善者』だと叫ぶ人がいた

『悪魔』だと指をさす人がいた

言葉無く、私を睨み付けてきた人がいた

そして、この世界に存在するらしき

『天使』『悪魔』『墮天使』

その内の『天使』はそんな私を犯罪者として祭り上げた  
多くの罪なき人々を殺した滅殺すべき真の悪魔として

そんな私は路地裏から出られなくなつた  
あのお兄さんもあまり来なくなつた

何も食べなくなつた

そんなことを考えていると、目の前が霞んで  
目の前が真つ暗になつた

「え…………」

だが、あの時とは違い

目の前に広がるのは、沢山の羽が生えた天使や悪魔、墮天使達が倒れ  
赤い血で染められた大地が広がっていた

「な、なんで!? 私は…………」

私が呼ばれたとき、みんな傷付いていたものの、生きていた

確かに救つた、はずなのに

ふと先をみると、一人の男性が女性の死体を抱き締めて泣いていた

「生きていた、生きて……」

そう言つて私は何かに縋るように彼のもとへ歩いていく

そして私に気付いた彼はまるで私を死んだ恋人の敵を見付けたかのように睨んでき

た

「…………お前が」

「え？ グツ!?」

その男は私の服の襟を掴み、此方を絶望したように暗い瞳で言つた

「お前がもつと早く来ていれば！ ■■■■■は死なずにすんだ！ 僕らは来週、再来週と楽しく生きていたはずなのにツ!!」

なんで…………

「お前が彼女を！ここに死んだ、同士の皆を殺したんだ！」

違う、私はただ……アラヤに呼ばれただけで

まさかこんなことになるなんて

「何か言つてみろ偽善者！ お前が！ここにいる皆を殺したんだ！」

そう言つて私は投げ飛ばされる

「痛、い…………」

そう言いながら立ち上がる

地獄を見た

ふと、手にまるで水に濡れたかのような感触がして、視線を右手の掌に送る  
私の手は真っ赤な血に濡れていた  
「ひつ!?

気がつくと、さつきまでいた場所とは違う

暗い森の中に立つていて、目の前には助けたはずの黒猫が真っ赤な血の中に倒れてい  
た

そして近くには白い髪の少女が黒猫を見つめて泣いていた

「あなたがもつと早く来ていれば………」

「ツ?!

「姉様は助かつたのに、何で助けてくれなかつたんですか……」

その女の子は私を殺意の籠つた視線と、殺気を向けてきた

「姉様じゃなくて、貴方が代わりに死ねば良かったのに」  
そう涙を流しながら言う少女に私は、また目の前が真っ暗になつた

救われない地獄を見た――

気が付くと、私はまるで実験施設のような場所に立つていた  
そして地面上には、沢山の子供達が倒れて死んでいる  
すると、少し先に金髪の男の子が此方へとゆらゆら歩いて来た  
私は思わず生きていたことに驚き男の子の下に近付き

「…………え？」

そして、男の子の持っていた剣でお腹を刺された  
刺されたお腹からはどくどくと血が流れ出ている  
「貴方がもつと早くアイツラの実験を止めていれば、

みんな死ぬことは無かつたのにツ

「……………！」

地獄を見た

『この偽善者！』

『お前がもっと早く来ていれば』

『貴方が変わりに死ねば良かつたのに』

『お前が彼女を！ここに死んだ、同士の皆を殺したんだ！』

『貴方がもつと早くアイツラの実験を止めていれば、みんな死ぬことは無かつたのにツ  
！』

『何故助けなかつた！』

『お前なら守れただろ！』

気が付くと、私は両手に枷を付けられ長い階段を上つていた

ここは何処だろう？

この先に何があるのだろう？

そう考える内にだんだんと何があるのか見えてきた  
目の前には上の台から輪つかの出来た繩が降りている

処刑台があつた

私は怖くなり、逃げ出そうとするが体は勝手に処刑台へと上つていく

『これより、数々の罪なき人を殺した

真の悪魔であるこの者を処刑する！』

何者かの声がそう言い放つと、沢山の人がまるで私の死を望むかのような雄叫びをあげる

い、いや…………やめて

私は、アラヤに言われて…………

そんな心とは裏腹に体は繩へ近付つしていく

そして私は、縄に手をかけた

無限に続く、地獄を見た

「は！ はあ、 はあ…… ゆ、 め？」

目が覚めると何時もの路地裏に横になっていた

太陽が大分上つていいくるから、 お昼ぐらいだろう

私は震える体をどうにか押さえて、 右手を開くと真っ赤な血に濡れておらず  
首もとにも、 傷は出来ていなかつた

思わず体を抱き締める

怖い、 怖い…………コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ  
コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコ  
ワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ科  
コワイコワイコワイコワイコワイ科  
コワイコワイ科  
コワイ科

イコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコ  
ワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコ  
コワイ

なんで、なんでみんな私を責めるの？

貴方は、貴方達は何もしないで

見てるだけなのに、なんで

私ばかり責められるの？

犯罪者として扱われるの？

みんな私の本当の心をしらない

何を言われても、助けたくて

ひたすらにアラヤに言われて頑張つてきた

……………だけでもう、無理だ

そう思い、ふとアーチャー工ミヤの投影品である短剣【ルイ ルブレイカ】を思い

出した

確かあれは、対象を突き刺せば色々な魔力や繋がりを破棄することができたはず

そう思い、私は右手に破戒すべき全ての符ルイ ルブレイカを投影する

もしこれを私に刺せば、アラヤとの繋がりも

もしかしたら破棄することが出来るかもしない

そう思い破戒すべき全ての符を逆手に持ち、自分の胸に向ける

もし失敗すれば、私は死ぬ

いや、もう死んだ方がいいかもしない

それに、私は……もう疲れた

どうせこの先、生きてられるかわからない

私の事を家族と言つてくれたあの人達も、もういない

そもそもあんな状況から、ここまで良く頑張ったと思う

お金も家も、家族もいない

そんな〇の状態から、一年生き延びた

これからも私はアラヤに呼ばれ

指示通り人を殺し、救おうとして

あのように責められるのであれば

「…………私はツ！」

右手を振り上げ勢い良く自分の胸に突き刺そようと、短剣を振り下ろす

やつと、楽になれる

ねえ、朱璃さん

朱乃ちゃん、バラキエルさん  
時々施してくれるお兄さん

私、今度こそ来世で

……幸せになれるかな？

「…………おい、悪い事は言わねえがバカな事は辞めろッ！」

そう言つて、後ろから伸びた手が私の短剣を持つた右手を掴んだ

思わず驚愕して後ろを向くと、その勢いで被つていた外套のフードがとれる  
見えたのはあの二匹の龍と戦ったときに私を受け止めてくれた金髪のおじさん

「なッ！お前はあん時の!?」

私は金髪のおじさんに押さえられた手をどうにか動かそうとするが、全く動かないあと少しで、死ねるところだつたのに

「…………離してよッ！」

「離すかよ、離したらお前が死ぬだろうが！」

「死なせてよ!!」

大声で金髪のおじさんへと叫ぶ

「どうせこの先生きても良いことなんて無いに決まってるじゃない！」

私は金髪のおじさんへとまるで、吐き出すように自分の本心を叫ぶ

「それどころか、助けようと動いてもみんな私を責める声ばかり！『お前なら守れた』『もつとはやくお前が来てくれれば』そんなこと私だつて分かつてゐるわよ！でもどれだけ救おうと手を伸ばしても、救えない！救いきれない！どうやつても、何かを切り捨ててしまふ！更に天使は私を滅殺すべき真の悪魔だと宣言したッ!!」

「なッ?!」

頬に何かが伝う感覚がするが、きにせず話し続ける

あるのは、行為を止められたこと

今まで誰にも言わずにいた自分の怒り

「貴方に分かるの!?私の気持ちが、必死に戦つて、殺して！救えたと思えた存在に罵倒された上に人殺しの犯罪者として認識された私の気持ちが！」

こんなこと言つてもなにも変わらない

そう分かっていても、止まらない

心の壁と言うダムが壊れ、感情が流れ出て止まらないのだ  
「それに私には家がない！帰る場所もない！もう…………私はこの世界に居場所がない」

そして最後は、ポツリポツリと声を発する

「私は死ぬべきなの、皆を救えなかつた私は生きる資格なんて…………無いんだから！  
ねえ離してよ！お願い、だから…………死なせて」

そう言つた瞬間だつた

体からスウッと何かが抜けていくような感じがして足に力が入らず

そんな感覚がして意識が遠くなる

……………ああ

心当たりはある

もうどれだけ食べてないのか飲み物を飲んでいないのか覚えてない

そつか、どつちみち私は…………もう

最後に見たのは私をあの時と同じように受け止め、何かを叫ぶおじさんの焦ったような顔だった

# 少女は眠り、残された者達は思い出す

…………ピッピッピッピッピッ

真つ暗な暗い部屋

病室のような設備のある部屋で大きなベットに一人の少女が眠っている

酸素マスクをつけ、手には複数の点滴が刺さっており、静かに眠っている

まだ目覚めない

ボロボロとなつたその体がいくら治療されようが彼女が目覚めることはない

絶望に染まつた彼女の心は、治ることはないと

アザゼル side

病室のような部屋、そこには大きなベッドに一人の少女が眠っていた  
口には酸素マスクが付けられ、ようやく呼吸しており  
点滴により、体に栄養素を注入されていた

そして点滴の近くの機械が、ずっとピッピッピッと彼女が生きていることを表す電子音を鳴らしている

コイツが眠つてから、1ヶ月の月日がたつた

近くに椅子を持つてきて座つた俺は、彼女の様子を見る  
傷付き続けてきた体、ろくに食べてこなかつたからか、痩せこけからだで深い呼吸を繰り返す

「こいつに一体何が起きやがつた……」

そう咳き俺はコイツを見つけた時の事を思い出す

「つたく、アイツは仕事仕事つて。そんな事言われたらやる気が出ねえつの…………？」  
俺は何時も通り仕事をサボり、人間界の駒王町に遊びに来ていた

ゲーセンでもいくかあ

そうボヤきながら歩いていると何でもない路地裏がふと目に止まつた  
普段なら気になることもないはずの路地裏へ  
俺は興味を引かれ、入つていく

そこには恐らくは誰が捨てたであろう様々な廃棄物が転がつており

その中で外套を羽織った何者かが手にナイフを持っていた  
しかも、そいつは俺ではなく自身へとナイフを向けていて俺に気付く素振りを見せな  
い

「私はツ！」

そう言つて大きくナイフを振りかぶる

俺は急いでそいつのナイフを持つた右手を掴んでこいつが行おうとしていた、自殺を  
止める

「おい、悪い事は言わねえがバカな事は辞めろツ！」

俺に捕まれたことに驚いたのか、そいつが此方を見ようとし、外套のフードが外れる  
「なツ！お前はあん時の!」

そこには昔、二天龍であるはずのドライグとアルビオンを倒し  
力を使い果たして光の粒子となつて消えたはずの少女がいた  
だが、その体はまるで成長しておらず

あの時の少女の瞳には、まだ光が灯つていた

だが、今はどうだらうか

少女の琥珀色の目は酷く濁り、あの時よりも瘦せていた  
一体、こいつに何があつたんだ？

そもそもコイツは人間だ、何故あんな風に消えることが出来た？

何故生きている？

少女が押さえている右手を動かし、ナイフを動こうとしたするが手に力を込めてそれを阻止する

「…………離してよッ！」

「離すかよ、離したらお前が死ぬだろうが！」

そう言つて更に掴む手に力を入れてナイフで自身の命を絶とうとする少女を止める

「死なせてよ!!」

すると先ほどまでの小さな声ではなく、大声で彼女は俺に叫んだ

「どうせこの先生きても良いことなんて無いに決まってるじゃない！」

そんな事はねえ、そう言おうとした

だが、言えなかつた

「それどころか、助けようと動いてもみんな私を責める声ばかり！『お前なら守れた』

『もつとはやくお前が来てくれれば』そんなこと私だつて分かつてゐるわよ！でもどれだけ救おうと手を伸ばしても、救えない！救いきれない！どうやつても、何かを切り捨ててしまふ！更に天使は私を滅殺すべき真の悪魔だと宣言したッ!!』

「なつ!?」

そう言つて泣きながら話す彼女に、そんな気休め程度の言葉は言えるはずがなかつた  
どういう事だ？何故こいつが天使から狙われるはめに？

ミカエルは一体何をしてやがる！コイツが二天龍を倒したところはアイツも見ていたはずだ！

しかも今の言葉から推測するに、こいつは二天龍との戦いのあとも数々の戦場を経験したと見える

一体、その体の何処にそんな力があるってんだよ

「貴方に分かるの!?私の気持ちが、必死に戦つて、殺して！救えたと思えた存在に罵倒された上に人殺しの犯罪者として認識された私の気持ちが！」

泣きながらそう訴える少女に対し、俺はただ少女の言葉に耳を傾けていた

「それに私には家がない！帰る場所もない！もう…………私はこの世界に居場所がない」

そして怒りがだんだんと冷めてきたのか、ポツリポツリの少女は言葉を紡ぎだす

そして再びナイフを持つ手に力が入るがどうにか押さえ込む

「私は死ぬべきなの、皆を救えなかつた私は生きる資格なんて…………無いんだから！  
ねえ離してよ！お願ひ、だから…………死なせて」

少女が怒った際に、放っていた言葉が頭の中で繰り返される

そして次の瞬間、少女がまるで糸がプツンと切れた操り人形のように倒れる  
「おい！」

あの時と同じようにどうか受け止める

軽い、人間とは思えないほど目の前の存在は軽くて、ボロボロで、壊れていた  
少女は此方を見つめながらゆっくりと瞳を閉じていく

「おい！しつかりしろよ！おい！聞こえるか！？」

声をかけるが、少女は気付くそぶりを見せず目を閉じた

「クツ！」

少女を抱えて人払いの魔術を使用しながら、近くの顔の聞く個人病院へと向かう  
死なせねえ、絶対にさなせるわけにはいかねえ

そう心の中で言い聞かせ

俺は病院へと走った

今考えれば、サボる目的で駒王町に行つたがこんなことになるだなんて思いもしなかつたな

「…………せつかく助けたんだから、死ぬんじやねえぞ」

そう言つてそつとベットに眠る少女の髪を撫でる

そういうや、前に『お腹いっぱい食べたかった』って言つてたな

起きたら、何でも好きなもん買つてやるよ

お前はまだ、甘えていい歳だしな

俺が助けちまつたんだ

だから、責任もつて最後まで面倒ぐらいみてやるさ

…………こんな小さな子供がこんなになるまで見てただけなんて、一人の大人として情けねえな

木場

祐斗 side

剣道場で竹刀を振る

頭にあるのは、強くなつて僕の、みんなの人生を狂わせた  
聖剣を破壊すること

その目的は今でも変わらない

でも、それと同じように僕が今しなければいけないものがある  
僕を助けてくれたあの女の子を探すこと

あの女の子がいなければ、恐らく僕はここにいない  
改めてお礼を言いたかつた

ふと竹刀を振る手を止めて窓から見える夕陽を眺める  
そして思い出す、僕の目的が1つから2つに変わった日の事を

目の前には沢山の仲間だった、友達だった者が倒れている

僕はその光景を見て、心から暗い何かが押し寄せてくるのを感じた

聖剣が憎い

聖剣のせいで僕らは……………

涙を流しながら、僕は周囲を見回す

その時だ、向こうからふらふらと何者かが歩いてくる  
もしかしたら僕と同じように生き残りが、そう思い痛むからだを気にせず人影の見え  
る方へ歩く

すると銀髪で褐色の肌、琥珀色の目から涙を流した僕より小さな女の子が涙を流しな  
がら必死の形相で周囲を見回していた

何かを探しているのか？

思わず、女の子を行動を見つめていると

彼女の瞳が僕を見付ける

すると女の子は驚愕した後、僕の方に走つてくる

「ツ!？」

思わず僕が身構えると、女の子は途中でスピードを崩し、僕の事を抱き締めた  
訳が分からぬ、彼女はなんで僕を

そう思つていると、彼女の声と思われる声が聞こえた  
「ありがとう…………生きていてくれて、本当にありがとう」

そう泣きながら、何度も何度もありがとうと言う少女

何でこの子が、僕に感謝するんだろうか？

そんな事を考えている間も、彼女は安堵したかのように、優しい声色でありがとうと

言っていた

それを、僕は困惑してただ聞いていていた  
やつと離してくれた女の子を改めてみて僕は驚愕した

女の子はボロボロで、体は酷く痩せ細つていて骨が所々浮き出ているのが見えた  
そして何より、女の子の目だ

女の子の琥珀色の瞳は暗く濁つていて、その目から大量の涙を流していた  
そして女の子は申し訳無さそうな顔をして、言つた

「…………ごめんなさい」

「え？」

彼女がそう言つた瞬間、彼女の体から金色の粒子が零れ  
女の子の体の所々が透けていく

思わず僕は女の子へと手を伸ばす

だがその手は宙を舞い、女の子に振れることはなかつた

少女は消えていった

その瞳からずつと涙を流して

う

そうして、その研究所から逃げた僕はリアス部長と出会い、眷属となりこうして今を生きている

『…………ごめんなさい』

夕陽を見ながら、あの時に僕を助けてくれた彼女の最後の言葉を思い出す

あの謝罪の言葉が、当時の僕には分からなかつたが今なら分かる

きつと、あの場にいた皆を助けることが出来なかつた事に対しての言葉だつたのだろう

リアス部長の眷属となつてから、聖剣計画について調べたが

僕のいた研究所は、僕以外のみんなが死んだあの日

何者かの襲撃を受けていた、そこで計画を進めていた研究員は証拠隠滅の為あの場に毒ガスを放つたらしい

そして僕はそれを運良く免れ、あの女の子と会った  
信じられないが、その襲撃者は彼女だったのだろう

きっと、僕らを救おうとしたがあんな事になり生存者を必死に探していた所に僕が現れたんだろう

彼女自身があんな状態なのに、他の人の為に動いてくれた

だから僕は、聖剣への復讐が終わつたら彼女を探して、伝えたいんだ  
“助けてくれて、ありがとう” つて

朱乃 side

部室にて、リアスが出ていった後  
私は自分の鞄から常に持ち歩いている一枚の写真の入ったケースを取り出して眺める

その写真には私、お母さん、お父さんが写っている  
一般的な家族写真だが、この写真は違う  
映っていないのだ

本来ならば、その場にいたはずの少女が

まるで、最初からその場に存在しないかのように消えていた

私とお母さんの間で申し訳無さそうに笑う少女

クロエ・フォン・アインツベルンちゃんの姿が

私とお母さんをクロエちゃんが隠していた力で助けてくれたときの、彼女は最後に私は  
達に言つた言葉が今も私の頭には鮮明に思い出すことが出来る

『ありがとう』

そう言つてクロエちゃんが浮かべた笑顔は、凄く可愛いけど、何処か儂くて  
触れれば壊れてしまいそうなほど、脆そだつた

クロエちゃんはあれから何処にいつてしまつたのだろうか?  
だけど、きつと彼女は生きている

きつとどこかで

だから私は、私達はずつと待つ

もし彼女が帰つてきたとき、あの子を受け入れて上げられるように

そして帰つてきたら私は必ずクロエちゃんに伝えたい

“お母さんを私を、救つてくれてありがとう” つて。

# 私の居場所

黒歌 side

あの女の子に助けて貰つてから、私は人間界に融け込んで生活していた。様々な所を旅して白音を探している

人間界での生活を行つていると、駒王町でそんな感じの子を見たとの情報を得て、私は駒王町にやつてきていた

時々、悪魔とかに見つかるが、どうにか逃げ続いている

それでもなんなのにや前のあいつら？一緒に世界を変えようとか、オーフィスが首領とか

そんなこと今は関係ないにやん

もしそんなのに加担したら、後からの白音の目線が怖いからにア

それに白音はキレると止められないからにやあ……

白音を探すのではなくテロなんかに体を張つて助けてくれたあの女の子に申し訳がたたないにや

さて、まずはバイト場所と宿を見つければいいと……ん？歩いていると、どうやら個人病院のような場所が見え、店の前に張り紙が張つてあつた

なになに、バイト募集中？

免許なしでもOK、受け付けと清掃

け、結構時給がいいにやんね、；取り敢えずキープかにやあ

そう思い、私は他のバイト場所を探した

「それじゃ、今日からお願ひね黒谷さん」  
「はい」

そう言つて私は医院長に返事をする

最初に見つけた個人病院で私は『黒谷 韶歌』としてこの病院で働くことにした

宿の方は貯めていたバイトのお金を使つてアパートを借りた

まず、医院長に頼まれた入院室の掃除だ

そこの入院室には毎日お見舞いに来る人がいるらしい

それに入院してゐる子も綺麗な方がいいと思う

との事で最初にそこを掃除することになった

私は掃除道具を持つて部屋に入ると、そこには大きなベットにカーテンが掛かっており、誰が眠つてゐるのか分からぬが外に機器が見えているのを見る限り、点滴、酸素マスク等の医療器具が置かれているのが影で見える

「結構重症にやんね……………」

なんで個人病院なんかに入院してゐるにや、普通なら大きな総合病院とかに入院してるべきじゃないかにや？

だつて、医療ドラマとかで見るピッピツつてなる機械が鳴つてゐるし

そう思いつつ、そのベットで眠る人物に興味をそそられ、ベットのカーテンへとてを

伸ばす

もしかしたらヤの付く人でもねているのだろうか？それとも犯罪者？

そんな想像をして、ドキドキしながら

カーテンを引き、眠っている人物を見る

その人物は、少し痩せ細つた体に褐色の肌

「…………え」

そして色の抜けた銀髪の少女だつた

手から小箒が落ちてカラッと音を立てる

私は思わず、自分の眼を疑つた

ベットに眠っていたのは、自分の知つてゐる少女だつた

何しろこの少女はあの時、追つてから私を救つて消えた女の子だつた

「な、なんで……なんでこの子がここに」

確かにあの時、目の前に力尽きて消えたはず

その後、動搖する心を落ち着かせてその部屋の掃除を終わらせると医院長にこの子はどうして入院してゐるのか聞いてみた

なんでも、知り合いがこの子が自殺しようとしたところを止め、少女が倒れたのをこの病院に運んだらしい

それを聞いて、私は混乱した  
だつて、この少女は私がだいぶ昔に逃げている所を助けてくれたのだ  
もう人間なら死んでいても可笑しくない時がたつていて、更に言えばこの子が何であ  
の時から少しも成長していない  
まつたく変わっていないのだ

あの子はいつたい…………

そんなことを考えながら、私は仕事に戻った  
白音を見付けて、色々と落ち着いたら  
改めてお礼を言いに行こうかにや

## クロエ side

目が覚めると私は知らない部屋のベットに眠つていた

「ここは、一体？」

そう言つて掛けてある布団を退ける

「クロ、やつと起きたんだ！」

その声が聞こえて、私は思わずびくりと肩を震わせて声がした方を見る

「おはようクロ！・今日はお寝坊さんだね！」

「え？」

そう言つて私と同じくらいの少女が立つていた

長く綺麗な外人風の銀髪に赤い瞳の子が私の方を見て笑つていた

彼女を何処かで見たような気がする

「イリ、ヤ？」

口が勝手に動き、そう呟く

そうだ、この子は

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

あれ？ 何で私はここにいるの？

何時もなら私は外套を羽織つて路地裏にいるはずなのに

「クロ？ どうしたの？ 早く降りないと駄目だよ。今日はお兄ちゃんがご飯作ってくれたんだから！」

ここは、一体何処？

そもそもお兄ちゃんって？

ぼんやりと考えながらイリヤに促されてベットから降りる

「もう！ 早くいくよ！」

「え、ちょっと!?」

そう言つて私の手を引いてイリヤと階段を降りる

そして、一階に降りる

「おはようございますイリヤさん、クロエさん」

「おはようセラ！」

白髪でお姉さんのような人に挨拶され、取り敢えずおはようございますと言つてゐる間にイリヤが台所に立つてゐる赤い髪の高校生ぐらいの人に向かっていく

「お兄ちゃんおはよー！」

「おはようイリヤ、よく眠れたか？」

「うん！バツチリだよ！」

この光景が、何処かで……確かに前世にテレビで

「ツ！」

そう思つたとき、頭にノイズと共に激痛が走る

「そうか。クロエ？どうした？」

この人は、いつたい誰？

いや私は知つてゐる、一番よく知る人

誰を？

この人を……私のお兄ちゃん衛宮士郎を

「クロ？」

「どうした？何処か痛いのか？」

「ええ、大丈夫よ。イリヤ、それにお兄ちゃん」

「そうか？無理しなくていいんだぞ？」

「大丈夫ですかクロエさん？」

「少し頭痛がしただけよ。問題ないわ」

そう言つて私はテーブルで何時も座る場所に座りみんなとご飯を食べる

「美味しいね、クロ」

やつぱりお兄ちゃんの作るご飯は美味しい

「ええ、そうね」

いくらでも食べられる

あれ？

なんで私はご飯を食べてるの？

そう考えたとき、私以外がまるで映像をストップさせたかのように動かなくなつた  
そもそも、こんなに食べたら胃が小さくなつてゐる私じや吐き出しちやうし  
そもそもこんなに食べられないはずなのに

ナニかが可笑しい

私は何を変だと感じてるの？

私は

わたしは

ワタシハ…………イツタイダレ?

わたしは■■■■■

ワタシハ、クロエ・フォン・アインツベルン

ここは何処?

知らない場所

ワタシノオウチ

——違う、私には家はない

私にはこんなに温かい家族はいない

私はこんなところにいる資格なんてない

多くの人を救おうとした

多くの人を殺した

——こんなはずじゃなかつた

多くの人から罵倒された

——私はアラヤの人形

多くの救われない人達を見た

なんども、なんどもなんどもなんども

多くの人を殺した

この身を血に汚した

私は幸せになつてはいけない

私は幸せをくれたあの人達は、私と関わつたせいで死んだ

私の居場所なんてない

私は野良猫、何時も一人

朝も、昼も、夜も

春も、夏も、秋も、冬も

常にフラフラとし、誰にも見られず独りで死んでいく

私は可愛いらしいヒロインでも

全てを救えるような正義の味方<sup>ヒト</sup>でもない

人から、天使から見た私は悪魔

完全な、  
ヴィラン  
悪者。

そう考えた瞬間、回りに何もなくなつた

そして体が沈む

まるで、水の中にいるみたいに

苦しい

暗く、静かで、何もない真っ暗な深海へと、沈む  
沈んでいく

嫌だ

深い水絶望の中に差す光へと手を伸ばす伸ばす

【お前がもつと早く来ていいれば】

こんな、死んだ方が良い

【この偽善者！】

死ぬべきだと思う私の中に

【アソコ死が悪魔だ！滅殺すべき悪だ！】

まだ、微かに残つている

『クロエちゃんどうしたの？早く並んで並んで！』

『へ？家族じゃない私が入つたら変？なにいつてるの？』

小さな、生きたいと

『確かに私達は過ごした時間は短い。けど、クロエちゃん、貴方はもう私達の家族の一人

なのよ』

『だから、一緒に写ろクロエちゃん！早く早く！』

諦めたくないと言う

小さな思希  
い望。

何かに引き上げられるような

そんな感覚がして、私は重い目蓋を上げる

目の前には真っ白な知らない天井。

なんだかんだ、また生きちゃつたな

知らない天井を見つめるのを止め、固くなっている体を起こす

口許に違和感を感じ、口に手を当てようとして固いものに当たる

「ん？」

見ると両腕に点滴が付けられた、口には酸素マスクが付けられていた  
また片手に差された点滴らしき物の管をたどると、なにやらピッピッと鳴る  
医療ドラマなどでよく見る機械が設置されていた

私は確か…………

ぼんやりする頭のまま考えていると、部屋にある扉から

あの時に私が死のうとしたのを止めた金髪で所々黒い髪の男の人人が入ってきて、起き  
ている私を見つめ、顔を驚愕の表情に染める

「ツ?!目が、覚めたのか?」

そのと問い合わせ、私は頷いて返すとその人がもう一人知らない男を連れてきた  
恐らくはこの場所、病院だろうか?

こここの医師らしき人が来て、私のことを診察した

なんでも、極度の疲労に睡眠不足

身体中の所々にある傷からの再出血

そして栄養失調が原因で倒れたらしい

過労や睡眠不足は分かるけど、栄養失調は仕方なくない?

私、一応ホームレスなんですけど……

診察が終わり、医師の人が部屋から出ると

さつきの金髪に所々黒髪の残った男の人が入つて来る

「よお、大丈夫……じゃあねえか」

「私の状態を見て大丈夫だと思うなら眼科に行くことを勧めるわ。ありがとうね、止め  
てくれて」

「ハツ早まつた行動をしようとすると子供を止めんのも俺たち大人の仕事だ」

そう言つて男はベットの横の椅子に座る

「ありがとうね、助けてくれて」

おれいを言うと、男は意外そうな顔をした

「怒らないんだな。てつきりすぐ死のうとすんのかと思つてたぜ」

「あの時はちょっと色々と追い詰められてたからね、もう大丈夫よ。でも、自分が死ぬべ

きだと考へてゐる事に変わりは無いわ」

まだ、私は死ねない

アラヤの指示もあるが、私自身

今後は呼び出しに従い

救えるなら、救えるだけ救いたい

そのため、いくら罵倒されようとも  
悪魔と罵られようとも、最善を尽くす

誰よりも戦つて、殺して

そして誰よりも戦い抜いて救えるだけ救う

「そうか…………

そう言えば、私の治療費つてどうなるのかしら?

考へてみれば、恐らくはここは個人病院、総合病院とかではないから値段も高いはず  
私はとてもじゃないが払えないし……どうしよう  
治療費をどう払おうか、頭を悩ませていると

「おい、どうした?・急に暗い顔して」

そう言つて男の人が心配そうな顔で私を見てくる  
優しい人ね、この人

「いや、この病院での治療費……どうしようかなって」

「は？」

「だつて私、家無しお金無し親無し身分証無しのホームレスじやない？」

「あ、ああ……………」

流石に身売りとかしたくないし、かといつて私の見た目じや雇つてくれるところ何て

……………」

「それなら、俺が払つてやるよ」

「へ？ いいの？」

「ああ。それとお前……俺の養子にならなか？」

「へ？」

「そうすれば、お前の戸籍や身分証を作つてやれるし、飯も寝場所も手に入る。何より教会の奴等からお前を守つてやれる」

確かに、彼らは私にとつてとても魅力的な誘いだ……でも

「なんで、自殺を止めてくれて治療費まで払つてくれただけでも十分なのに。何で私のような赤の他人に、ここまで………」

私がそう言うと、男は優しい笑みを浮かべながら言つた

「お前が覚えてるかは分からねえがよ。俺はお前のお陰で生きてるんだぜ？ お前が二天

龍……赤と白のバカデカイ龍を倒してくれたお陰で、俺も部下も、みんな助かつたんだ

そう言われ心臓が大きな音を立てた

今まで、ずっと苦しかつた

あの時、誰かを切り捨てて救つた人から罵倒され、悪魔と罵られたあの時から  
まるで、私はあの人達の犠牲の上で生きていると  
何も救えていないと、そう思つて生きてきた  
でも…………

目の前に助けられたと言う人がいる

他にも救われた人がいるつて

わたしは、助けられてたんだ

心の何か少しが解けて、何かが込み上げてくる

「それに、俺がお前を助けたんだ。最後まで責任持つて面倒見てやる」

目から何かが流れて頬を伝う

心の奥底の何かが溶けて、崩れしていく

「あれ?わたし、なんで…………」

片手で両目を拭うが、頬を伝う感覚が全く変わらない

でも、私は…………

頭に過るのは、あの時

短い間だが私を家族だと言つてくれた、けど今は恐らくは死んでしまった  
私が関わつたせいで死なせてしまつた

姫島さん達

ねえ。朱乃ちゃん、朱璃さん

そしてバラキエルさん

わたし、生きていいのかな？

そう思つていると、男の人が頭に手をポンと乗せて撫でる

俯いていた私は、顔を上げる

すると男の人が口を開いた

「お前さ、前に居場所がないって言つてたよな？」

私はそう言われ、怒りに任せてこの人に色々と話したのを思い出し頷く  
すると男が撫でていた手を離し私の前に差し出す

「居場所がないのなら俺がなつてやるよ。

——俺の居る所がお前の居場所だ

そう言つてさつきの言葉、結構格好いいだろ？

と、男の人笑うのに対し私は泣いていてた

わたしは、

「いい、の？」

「あ？」

初めて、何かに縋るのような声が出た

「こんな、沢山の人を殺した血に濡れて、穢れた私でも……いいの？」

そう言つて恐る恐る手を伸ばす

すると男の人がそれを握りかえし、私を抱き締めて頭を撫でる

「あ…………」

「良いんだよ。それに、お前はまだ大人が一緒にいねえといけねえ歳だ。好きなだけ泣

け

そう言われ

私はこの世界で生きてきて

この日、初めて声を押し殺さずに泣いた

あれから、私は無事退院した

体は病院で栄養を体に直接点滴で入れ、ご飯も普通に食べられるまで回復した  
痩せこけていたあの体は、普通の体型に戻り

無事完治した

今考えると、アラヤが声をかけてこないのがおかしく感じる

長期休暇おりたの??

それとも知らないうちに有給を取つていたのかな?

診てくれた先生に感謝をつげて個人経営の病院を出るとあの人待つっていた

「よし、帰るか。クロエ」

「うん、お父さん!!」

そう言つて私はアザゼルさんの元に走つた

# 始めてのお出かけ

クロエ side

夕方、アザゼルさんのお家に着いた

見た感じは普通の二階建ての普通のお家だ

「ここが今からお前の家だ」

そう言つて中に入るよう促され、中に入る

見ると、例えるなら日本が好きな外人の人が持つていそなグッズが沢山飾つてあつたりした

「凄い…………」

私のイメージだと、少し散らかつた部屋を考えていたのだが  
ちゃんと綺麗で物も散らかっていない

取り敢えず空いてある部屋

その部屋が私の部屋になつた

「まだ何もねえが、明日にでも買いにいけばいいだろ」

アザゼルさんが私にそう言つて頭を撫でる

「あ、そう言えば布団用意しねえとな……考えてみれば家は布団が1つしかねえんだよな……」

確かに、急に私を養子として引き取つたらしいし仕方ないわね

あ、布団なら確か鑑定したことがあつたから投影いけるわね

「布団なら大丈夫よ」

「言つとくが、外套被つて寝るとか言つたら許さねえからな？」

「そんなんじやないわよ。トレイス・オン 投影開始」

頭の中に浮かび上るのはあの日、私が始めての使つたあの人達のお家にあつたあのふかふかした布団

姫島さん家にあつた布団を投影した

「ね？」

「なんだよ今の、お前の腕に急に布団が出てきたぞ！」

「これは投影魔術つて言う魔術よ。視認して鑑定したものなら、大抵なんでも投影出来るわ。まあ、剣以外は少し魔力を通常より使うからつかれるのだけどね」

「へえ、なるほどな。んじやお前の持つてたあの黒と白の剣も投影したのか？」

「まあね」

「んじや、ベットはいらねえか。取り敢えず明日は家具とお前の服だな」

「安くていいよ?」

「バーカ。俺を舐めんなよ? ちゃんとしたのを買つてやるからな」

「…本当に安くてもいいのに

服だつて、着れさえすればどうでもいいしファッショソなんて私とは無縁だし  
 「だがまあ、明日買いにいくのに同じ服はきついか。取り敢えず明日お前の服を買いに  
 いくから取り敢えず今着てるやつを洗濯しどけ、ついでに風呂入れ。その間にお前の着  
 れそうな物探してくるからよ」

「分かつたわ」

そう言つて脱衣所に向かう

脱衣所にある洗濯機に着ていた服、と言つてとパンツと上から着るワンピースだけだ  
 からあんまり量がないから、これだけで回すのも何か勿体ないな

そんなことを考えて洗濯機を動かし、風呂場に入る

シャワーでまず体を流し、髪を洗つてから体を洗つてから湯船に浸かる

「はあ、幸せ♪」

そう言つてゆつくりと体の力を抜く

それにして、あんな優しい人に拾われるなんて、転生したての時は思わなかつたし

考えられなかつたなあ

そう言えば、時々施してくれたあの兄さんどうしてやるのかな?

色々と落ち着いたら、探してお礼を言わないと

それにしてもアザゼルさん、か……なんかハイスクールD×Dのあの人凄くそつくり……ん?

頭の中に何かが引っ掛かる

私が戦つた大きな赤と白の龍

アラヤの指示で助けた黒猫

姫島朱乃ちゃん、姫島朱璃さん、バラキエルさん

沢山の子供達を使つた何かの実験場

天使、悪魔、墮天使と言う三種族

そして何より先程みた駒王町と言う看板

「ここ、ハイスクールD×Dの世界なのね」

そう吐き出すように咳きつつ片手でお湯を肩にかける

「はあ、まあどうでもいいわね」

こうして普通に過ごせることが私にとつての幸せなんだから

そう思いながらお風呂から上がりタオルで体と髪を吹きタオルを巻いて風呂場から

出ると、脱衣所にアザゼルさんの物と思われる大きな長袖のジャージとズボンが置いてあつた

Tシャツを来てみると、Tシャツが大きすぎるのか私が着るとちょっとしたワンピースのようになつた

袖は長すぎるので萌え袖に成つてしまふが仕方ないか

下着も洗濯中なので履いてませーん

別に気になりませーーん！

転生した時に着ていた物しか無いんだから仕方ないわね

ズボンも履くと長すぎるので足はめくつて置こ

そんなんで部屋から出ると、アザゼルさんが壁に寄つ掛かつて待つていた

「取り敢えずお前が着れそうなの用意しといたぜ。一応俺のだが洗濯してあつたから丈夫だろ」

「へえ」

そう言つてジャージの胸元を鼻まで持つてくる

元男だから、あまり何も思わない

でもなぜだろう

なんか、アザゼルお父さんが抱き締めてくれたときみたいな感じになる

「この匂い、なんか……落ち着く」

「いや犯罪臭が凄いな……」

「なんか言つた?」

「いや、なんでもねえよ」

「なんか、聞こえたと思つたんだけど氣のせいだつたのかな?」

「取り敢えず今日の飯は出前をとるぞ、ピザと寿司とラーメン、どいつがいい?」

「じゃあ、ピザ……かな? 食べたこと無いから食べてみたい」

「そうか、ならピザでいいか」

そう言つてお父さんが電話をして、その日の晩御飯はピザを食べた

もう体は直つたので、おいしく普通の量を食べることが出来た

熱々でトロトロで美味しかった

また食べたいなあ

『もう少しだ、あともう少しで』

何だろう、暗い

『後は…………寿命の問題を』

カタカタと何かを叩く音が響き渡る

『次はこっちのを試してみれば』

パソコンか何かを動かしているのだろうか？

少し息苦しい、なんで？

『クローン第1製作体E—2025—と似たようにすれば』

そもそもここはどこ？

ゆっくりと目を開く

すると真っ暗な部屋で私は生まれたままの姿で何かの液体の中に入っていた  
なぜだろう、凄く何かが引っ掛かる  
目の前では靄がかかった顔の男がパソコンを叩いており、チラリと横を見る  
え？

そこには、私と同じように薬に浸けられた沢山の女の子が目を閉じて薬の中に浸けられていた

『これこそ、我が人生の最高傑作となる！』

そう言つてパソコンを叩き続けながら狂ったように笑う男  
なに、あの人……怖い、怖いよ

助けて……お父さん

怖い、怖いよ

朱乃ちゃん、朱璃ちゃん、バラキエルさん助けて、お願ひだから  
助けて、お父さん！

「ツ!? はあ、はあ、はあ……ゆ、め?」

布団からガバツと起きる

荒い呼吸を繰り返し、震える体を抱き締める

窓から光が差し込んでこない辺り、まだ夜明け前なのだろう  
なんだつたの？

さつきの夢は、私はあんなの見たことがない

取り敢えず深呼吸を繰り返す

怖い、怖いよ

お父さん…………

私は枕を持って部屋を出る、そして教えられたアザゼルさんの部屋に入る  
すると、布団の中でゆっくりと寝ているお父さんの姿がある

寝ているお父さんの布団に潜り込む

後で、謝るから…………お願い

今だけは、そばに居させて

た

体を揺すられる感覚がして目を覚ます

目を擦りながら体を起こすと、アザザルさんがこちらを少し困ったような目で見てい

「おはよう。で、なんで俺の布団に?」

そう言われ、私は口を開こうとするが体が震え出してしまって

「おい!?

心配してくれたのか、私の肩を優しく叩く

私は両手でその手を掴んで近くによせる

「夢をみた、の…………」

「夢?」

「なんか、見たこと無い研究所で……私の他にも沢山の女の子が薬の中に入つてて」

「…………」

「私、知らない…………あんな場所知らないの」

そう言うとお父さんが優しく頭を撫でてくれた

お掛けで少しづつ落ち着いて来たし、震えも止まつた

「よし、大丈夫そうだな?」

「う、うん」

そう言つて私は掴んでいた手を離してお父さんを見上げる

「なら、早速買い物行くぞ。お前の服とか色々と買い出ししねえとな、そら着替えてこい」

「うん、着替えてくる」

そう言つて私は持つてきた枕を持つてお父さんの部屋を出て自分の部屋に入り何時

も着ていたワンピースと下着を履いてお父さんと共に車でショッピングセンターに向かう

アザゼルさん、免許持つてたんだね

向かうまでの間は外の色々な景色を見ていた

今まで生きていくなかできにする余裕が無かつたから余計にキヨロキヨロと外を見ていた

大きな建物、ショッピングセンターの駐車場に車を止めて中に入ると凄い賑わっていた

「沢山人がいる…………」

「そりや、そう言う場所だからな。取り敢えず、服買いに行くぞ」

「うん、分かったわ」

そう言つてアザゼルさんに着いていくと、大きな服屋があつた

前世でいうし〇むらとか、そう言う雰囲気だ

「さて、服を買うにしても俺は流行りとかファッショントかあんま分からねえし店員に頼むか」

そう言つてアザゼルお父さんが店員さんに言うと女性店員さんが凄く輝いた目で此方を見ていた

「銀髪、赤目、幼女……うふふふ」

な、なんだろう？あの視線

凄く嫌な感じがするんだけど

そんなでその店員さんに沢山の服を着させられた

もうね、着せ替え人形かと思つたよ

黒の猫耳パーカーにチエツクのミニスカートにハイソツクスに黒のブーツ

白と黒のゴシックロリータ

華のゴスロリ

黒いセーラー服

フリルの着いた真っ白なドレス

リヴァイアサン  
ペニギンの足下まである大きなパーカー？

ウサギのお家っぽい感じのお店のワンピース

と言つた様々な物があつた

まあ、最初のが一番着やすいから好きかなあ

するとアザゼルお父さんは面倒いからと言つて全部買つてくれた

ついでに、下着とかパジャマは店員さんに色々聞いて安いものを選んだ

今の格好は黒の猫耳パーカーにチエツクのミニスカートにハイソツクスに黒のブー

ツだ

だつてずっと着てたワンピースは春先だから少し寒いし、こっちの方が良いとアザゼルお父さんに言われた

なのでこの服を着ているわけだが、結構視線が来る似合つてないのかしら？

「服は決まつたし、次は家具……の前に飯だな」

そう言われ近くの時計を見るとちょうど時計の針が十二時を過ぎた時間だつた

「うん、お父さん。お腹空いた」

「よし、んじやなに食う？」

そんな話をしながら飲食店を見ていく

麻婆豆腐、お寿司、ラーメン、ハンバーガー

天丼、カツ丼、お蕎麦におうどん

ステーキにバイキングにお好み焼き

「この店の旨そうだな、ラーメンにするか？」

「うん！」

そう言つて二人でお店に入り

チャーチュー←メーン！→を食べた

服に汁が飛ばないよう気を付けて食べた  
 チャーシューが厚くてスープも美味しくて、麺がモチモチして凄く美味しかったです

ああ、凄く幸せ

こんなに沢山美味しいものが食べられるなんて  
 頑張つて生きていて良かった

そんな感じでラーメン店を後にした私達は、続いて家具とか色々と置いてあるお店に  
 来た

取り敢えず歩きながら、近くにあつた物を鑑定しながらアザゼルさんに着いていきた  
 タンス、人を駄目にするソファー、折り畳みのミニ机に座椅子を買つてくれた  
 途中、猫の肉球がデザインされたクツシヨンに目を引かれた  
 じつと見ていると、アザゼルお父さんが買つてくれた

本当にありがたいなあ

それと、アザゼルさんの家にまな板とか調理器具無かつたから買つてもらつた  
 これでも、前世では作れるときは自炊してたし

何か作つて上げようかな？

それにしてもこれだけ使つてもお金があるなんて凄いなあお父さん

と思いながら必要な買い物を終え家に運んでもらう手ははずになつた。その後はアザゼルお父さんとゆつくりと店を見て回つた。

ゲームセンターを見て回つたり、モールのゲームショッピングに行つたりして親子デートを楽しんだ

そして早めの晩御飯として、回転寿司を食べた

沢山種類があつて選ぶのが大変だつた

マグロとサーモンが凄く美味しかつたし、デザートにパフェも食べた  
デザートのパフェは凄く甘くて幸せの味でした

その後、二人で車に乗つて帰つてきたのは夕方ぐらいの時間だつた

「よし、家具は明日届くしもう大丈夫だな」

「うん、色々買ってくれて本当にありがとう」

そう言つて私はアザゼルさんにお礼を伝える、するとキヨトンとしたが次の瞬間、笑いながら言つた

「色々と買つてやるのは当然だ。お前は、俺の娘だからよ」

と言つて頭をポンポンするアザゼルお父さん

私は思わず笑いながら、頷く

まだ、また胸がポカポカして暖かい

きつと、この世界で父親がいるのならこんな人だつたのだろうか？

こんな生活がずっと続いたら良いなあ

そう思いながらアザゼルさんに続いて家に入ろうとした瞬間、頭のなかに、忘れかけていた私を呼ぶ声が響き渡る

「ん？ クロエ？ ……どうかしたのか？」

思わず私は歩みを止め、玄関の前で立ち止まる

ああ、どうして世界は私の幸せをいつも邪魔するの？

まるで狙つたかのようなタイミングに怒りを覚え拳を握る手に力が籠る  
でも私は決めたのだ

誰よりも戦つて、殺して戦い抜いて……救えるだけ救うつて

だから、私は

カチツ

頭のなかで何かにスイッチが入るような音がして、体が先程の服から赤い外套にプロテクターを身に付けた姿に変わる

「アラヤからの命令を受諾。」

自分でも驚くような、氷のような冷たい声が出る

「クロエ？」

さつきまでの笑顔が無表情に変わっていくのを感じながら、受諾した命令を復唱する

「おい!? 聞いてるのかクロエ! ?」

「抑止力発動条件

『人類の大量殺戮』『権能の行使』を確認。

目標、エクスカリバー（偽）の破壊

自分が、生きている人からただひたすらに命令をこなすだけの機械に変つていくのを感じる

「及び、その行動に関与した人物の抹消」

でも、これは自ら受け入れたことだ

「抑止力としての活動を開始します」

だから私は、少しだけ平和な日常から離れて非日常へと向かう

私は玄関とは逆の方を向き

「クロエ、お前……どこに行くつもりだ？」

歩こうとしたところをアザゼルお父さんに肩を捕まれ、止められる

「仕事、かな…………」

そう言つて私は困ったような笑顔を浮かべる

「はッ！このご時世、子供を雇うような所なんてねえだろ…………本当のことを言え、クロ

エ

そう言つて肩に触れる手に少し力が入る

私はその手を優しく掴んで、離した

「……あるんだよ、お父さん。私のような子供でも  
抑止力の守護者として、世界の存続の為に

“セイギノミカタ”として呼ばれることがね。」

「それは、お前が俺ら三種族での戦争の時に現れて消えたことと関係があるのか？」

「…………いつか絶対に言うから、少し行つてきます」

そう言つて私は、地を蹴り夜の町に消えた

今度は、出来るだけ早く帰りたいな

だつて、ようやく見つけたから

私の、本当の居場所を

# 戦場に舞う死の妖精

あるものは見た

その絶対的な“存在”を

あるものは見た

戦場に現れし“救世主”を

あるものは見た

戦場にて鮮血と共に舞う死神を

あるものは歓喜した

彼女は、我らを救うため神から使わされたと  
またあるものは恐怖した

彼女は、まるで死を纏う妖精だと

時には多くを殺し、時には多くを救つた少女は  
様々な戦場にて現れ、その戦場を蹂躪し

いつの間にか、スッと消えている

そんな、少女の噂が様々な場で見られた

時には悪魔の住む世界、時にはとある研究所

そして、人同士の戦場

そんな彼女は人々からこう呼ばれた

鮮血の妖精、と.....。

クロエ s.i.d.e

驅ける

驅ける

驅ける

道を、屋根を、電柱との間を  
駒王町にて赤い閃光が道を駆ける

アラヤに指定されたポイントへと向かう

駆けていると、エミヤのスキルなのが目の前の目的地である大きな学園が見えた  
だが、その学園は魔術で作られたらしい大きな結界が張ってあつた

近くには数人が結界に触れていることからその人達が結界を維持しているのだと見  
られる

もし頼み込んで、入れてもらうことなど無理と言う結果が、見えている

例え、目の前に障害があつたときでもそれを破壊する  
それがアラヤの意思、私への指令。

「——I am the bone of my sword」

私は走りながら、左手に洋弓を投影して走ってきた勢いを殺すように強く地面を踏み  
しめながら止まり右手にかの昔、とある魔女の使つたとされる少々異常な形状の短剣  
私は破戒すべき全ての符を洋弓に番えて弓の弦を引き絞る

「破戒すべき全ての符！」

そう言つて短剣を放ち、それを追うように再び駆ける

破戒すべき全ての符

これは、あらゆる魔術や契約を無効化する  
先程と同じような赤き閃光の軌跡が生まれ、その閃光の少し先では高速で結界へと向  
かう短剣は見事その結界を打ち消した

「なつ!? 結界が!?!」

「一体何が起こつて——」

恐らくは結界の維持をしていた原作の生徒会組だつたつけ?  
その人達を避けて走り抜ける

「なつ!?!」

「なんでこんな所に!?」

そんな声が聞こえたが、気にせずに走っていると頭の中に追加で情報が入ってきた  
『アラヤより報告『目標のエクスカリバー（偽）の破壊』を確認。これより『エクスカリ  
バーに関する行動に関与した人物の抹消』を開始します』

頭の中に入つてくるのは最優先抹消対象の二人の顔と名前

『バルパー・ガリレイ』

『コカビエル』

二名を索敵、開始

走りながら恐らくはエミヤのスキル千里眼、『鷹の目』を発動する

両方、発見。距離、前方

少し離れていることを確認、近い方を殺した方が速い

駆けていると、こちらに背を向けたバルパーの姿が見える  
チャンスね。

私は両手には白と黒の夫婦剣『干将・莫邪』を投影しそれを持ち刃の先を後方にして  
少し前傾姿勢で駆ける

加速し、距離を詰める

次第に、周りの会話が聞こえる

遠目に見た限りだと、あの金髪の少年がエクスカリバーを破壊したのだろう  
手には見たことのない剣が見え、少し先には碎けたエクスカリバー（偽）が見える

「これで終わりだ！バルパー・ガリレイ!!」

三、距離を詰めつつ干将莫邪を両手をクロスして構える

「チェックメイト、さあ覺悟を決めてもうよ！」

「何故だ、何故……………そうか、本来なら交わることの無い聖と魔が何故」

二、ここまで駆けた加速によるスピードで少し地を蹴り宙に浮かぶ

「……………そうだ、本来ならあり得ない聖と魔の剣。これは聖と魔のバランスが崩れ  
たからだとするなら、過去の対戦で神も——」

「ここだッ！」

一、最優先抹殺対象であるバルパー・ガリレイの首元ぐらいまで浮かび上がった私は  
両手にクロスさせていた干将莫邪を広げるように首を斬る

「なっ！」

腕に確かな感覚と共に宙に鮮血が舞う

対象の首がぼとりと地面に倒れ私は驚愕した様子の前に干将莫邪を広げた状  
態で立っている

「誰だ……………ツ?!君はある時のツ!」

「第一最優先抹殺対象、バルパー・ガリレイの抹殺を完了了……ッ！」

そう言つて私は金髪の少年の前に立ち干将莫邪を私の背後にいる人物へと投擲、片手を着き出す

「熾天覆う七つの円環！」

すると、私へと投擲された光の槍の前にアイアスの盾が七つ桜の花びらのように展開され、一枚を削るだけで光の槍は霧散した

アイアスを使わなかつたら、私を含めてこの人も殺されてた

一方、私の投擲した干将莫邪は光の槍を投擲したと思われる人物の精製した光の槍にて防がれガラスのようになつた

「ほう、今のを防ぐとは流石は鮮血の妖精と言つた所か」

そう言つて空中から降りてくる一人の墮天使の男

「リアス・グレモリー眷族の相手をする気など無かつたが、貴様は別だ『鮮血の妖精』。

貴様なら私を相手に相応しい」

長い髪にスーツを来た男が今、地面に立つた

「第二最優先抹殺対象を確認。投影開始」

私は再び両手に干将莫邪を投影し、構えるとコカビエルも同じく光の槍を構える

【.....】

「…………」

しばらく、睨みあいが続く

そしてそれは何が合図か分からず、金髪の少年の仲間と思われる者達もこちらを眺めているだけ

——風が吹く

「ツ！」

「ハアッ！」

私は干将莫邪を構えて駆け出した

相手も同じくタイミングで駆け出し斬り結ぶ

相手の刺突を干将でいなし、莫邪で斬り着ける

「ツ!?」

だが、それもまた、コカビエルの精製した光の槍で防がれる

「フツ、今度はこちらからいくぞ！」

私は下がりつつ干将莫邪を二組投影し指に挟むようにしてから、コカビエルへと一気に投擲しバク転で距離を取る

「牽制など！」

そう言つてコカビエルが光の槍で飛来する六つの干将莫邪を破壊しようとした

次の瞬間  
「壊れた幻想」  
ブローグン・ファンタズム

コカビエルへと迫つた六つの干将莫邪に内包された私の魔力を暴走させ大きな爆発が起き、コカビエルを襲う

「グツ、小癪な真似を……」

私は左手に洋弓、右手にある剣を投影し番え魔力を込める

その剣はかつて北欧の英雄、ベオウルフが振るつたとされる魔剣

「——I 我 a 骨 m 子 t は h は e は b は o は n は e は o は f は m は y は s は w は o は r は d は .」

逃れられるかしら？射貫け、赤原猶犬！」

洋弓から放たれた赤原猶犬は射手が健在な限りは弾かれたとしても再び相手を襲い続ける効果のある剣

それを放ち、私は早めに決着を着けるため右手を前にかざし左手で右手を支えるよう掴む

精神を研ぎ澄ませ、想像する

想像するのは大英雄の一撃

「こんなもの！なッ！」

精神を研ぎ澄ませ、想像する

想像するのは大英雄の一撃

赤原猶犬を弾いたコカビエルだったが、弾かれた赤原猶犬は再びコカビエルに襲いかか

り、驚愕した所を赤原猟犬に襲いかかる

だが、コカビエルの腕を少しかするだけで通りすぎる

私は構えていた右手を上に振り上げる

「トレー・ス・オーン」 投影、開始

風が吹き、頬を風が撫でる

鼻腔には先程と殺した男性の血と死骸の臭い

銀髪フルンデイングが揺れる、私は構え右手に力を込める

赤原猟犬トリガード・オフが足止めしているうちに私は右手をまだ現れない架空の柄を握りしめる

想像する、彼の大英雄の使っていたあの剣を

すると、私の右手にズツシリとした自身の身の丈よりはるかに大きな斧石で出来た大

剣が握られていた

「トリー・ガード・オフ」 投影、装填

大剣を持つた手が、ピシッとなる

さすがの私でも、この剣を振るうのは容易じやない

音のなつた右手、その肩からは赤い血が流れ、伝っている

だけど、この一撃で終わる

終わらせる、だから持つてくれ

コカビエルはだんだんとフルンディングをいなすことが出来はじめている、仕掛ける

なら今

「壊れブローカン・ファンタズムた幻想」

ちようどコカビエルの目の前から、コカビエルへと向かう赤原獵犬フルンディングを爆発させ土煙を起こす

「またか!? 一体、奴は何処に!」

コカビエルは土煙で此方が見えていない

「全工程投影完了」

私は一瞬で距離を詰め、土煙を突つ切る手に持った強大な剣を片手で振り上げる

「是ナイシ射殺ライフブレイドワーフスす百頭ヒヅツッツ！」

神速による九つの斬撃がコカビエルを襲う

これは、ギリシャの大英雄

ヘラクレスの宝具。

それを再現した、まさに英雄の一撃

その前に、コカビエルは倒れた

体の九つの傷から大量の血を流して

すると、私の右手にあつた石斧の大剣がガラスのように碎け散り右手が解放される

それと同時に右手がダランと下がり、私は膝を着いて左手で右肩を押さえる少し無理をしそうに、右肩がまるで針を刺されて無理やり傷を広げられたかのように痛い

だが、これで最優先抹消対象の抹消を完了した

「第一、最優先抹消対象の抹消を完了。はあ、はあ」

肩で息をしながら私は先程から動かすと激痛の走る右肩を左手で押さえる  
どうにか足に力を入れて立ちながら周りを見ると、先程の金髪の少年の他にも赤髪の  
少年や白髪の少女、大和撫子な雰囲気な少女や赤髪で偉そうな少女が此方へと走つてく  
る

敵意が感じられない為、私は少し安堵する

「ツ!」

次の瞬間、此方へと走つてくる彼らを追い抜き、此方へと明確な殺意と共に向かつて  
くる気配を感じ即座に夫婦剣【干将莫邪】を投影し、右肩の痛みを無視して構える

右のショートカットの少女は大剣、左のツインテールの少女はレイピアの用に細い剣  
を此方へと振り上げていた

私は即座に二人の間へと高速で向かつていき、走り抜けながら地を蹴り体を捻り干将  
莫邪で二人の剣をいなして着地する

それと同時に両手の干将莫邪を構え直しながら背後の少年達を見ると、あの二人が攻撃したことが信じられないのか驚愕の様子だつた

一人は二人に凄い殺意の宿る目で見て いた

金髪の少年達からは敵意を感じないから背にしていても問題はない

二人の内のショートカットの少女は直ぐに身を翻し此方へと手に持つた剣を振り下ろしてくる

それをあの剣を止めるには、今の干将莫邪の強度じや叩き折られることが見えて いる

なら

「同調、開始」

トレイス  
オラン

トレイス  
オラン

トレイス  
オラン

トレイス  
オラン

トレイス  
オラン

トレイス  
オラン

強化すれば、なんの問題もない

ガキンツ！

金属同士がぶつかり、大きな音を立てる

私は干将莫邪をクロスさせて振り下ろされた剣を受け止めていた

だが、相手のショートカットの少女は振り下ろした剣に体重をかける

相手の剣と私の干将莫邪擦れるが擦れる音が聞こえる

「まさかこんな所で見付けることが出来るとはな、鮮血の妖精！」我等に斬られ、神の元で

断罪されろ！」

「グツ……」

ブラッドフェアリー  
鮮血の妖精、それは私がいつからだつたか覚えていないけど

沢山の人が私の事をそう呼んでいた事は覚えている

それにこの少女達が私を敵視してくる事から、天使の陣営であることは明らか

「いいわよゼノヴィア！そのまま押さえてて！」

そう言つて、ツインテールの少女が剣の形状をレイピアから通常の剣に変化させ突撃してくる

私はクロエの能力、小聖杯による転移を使いゼノヴィアの隣に転移する

先程、ゼノヴィアと呼ばれたショートカットの少女の剣が空を斬る

「なッ!? あぐつ！」

私はゼノヴィアの横腹を回し蹴りで遠くに吹き飛ばし、突撃してくる少女に向かい

干将を指す

「憑依経験、<sup>トレイス</sup><sub>オン</sub>投影開始。

ロールアウト バレット  
工程完了、全投影、待機」

少女が接近してくるのを見ながら詠唱を続行する  
右手はもう痛覚がおかしくなったのか、感じなくなつたので右手の干将を相手に指し  
狙いを着ける

「停止解凍、<sup>ソードバレルフルオープ</sup><sub>フリーズアウト</sub>全投影連続層写!!」

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剣 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剣 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剣 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剑 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剑 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剑 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剑 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剑 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

少 女 は そ れ に 驚 いた も の の 、 剑 を 避 け 時 に は 持 つ て い た 剑 で 吹 き 飛 ば し な が ら も 此 方  
へ と 迫 つ て く る

見れば、吹き飛ばされたゼノヴィアと呼ばれた少女は脇腹を押さえながら立ち上がりおり

ツインテールの少女の方は自身の獲物を手放した事で動搖しておりどちらも動けな

さそうだ  
すると、頭のなかにアラヤの声と共にこの事件に関与した人物の顔と名前が頭に浮か

び上がる

先程蹴り飛ばした少女『ゼノヴィア』、ハルペーで持っていた剣を吹き飛ばされた少女

『紫藤イリナ』、エクスカリバーを破壊したと思われる金髪の少年『木場祐斗』

頭の中に次々と情報が入ってくる

茶髪で左手に籠手らしき武器を装備した少年『兵藤一誠』、金髪のストレートヘアで

優しそうな顔の少女『アーシア・アルジエント』

この町を管理する魔王の妹『リアス・グレモリー』、そして白髪で小柄な少女『塔城

小猫』

そして、リアス・グレモリーの女王の大和撫子を表したかのような少女

『姫島朱乃』

「——え?」

頭の中に、その名前が浮かんだ瞬間

私は思わずその少年達がいる方へと振り返り、そして見付けたあの時の幼さは消え、きれいな女の子となつた私を家族と言つてくれた死んだと、守り切れなかつたと思つていたあの子、朱乃ちゃんが目の前に生きていた思わず、目から涙が流れ地面上に膝を着く

「朱乃、ちゃん？」

そう咳くと、朱乃ちゃんらしき女の子は驚き目に涙を貯めた

「クロエちゃん、ですよね？」

それは私にとつて、最高の知らせだつた

守ることが出来ていたのだから、だが今に限つては最悪な情報だつた  
何故なら、アラヤから出された指示

『この事件に関わった人物の抹消』

対象、つまりは私が朱乃ちゃんを殺すよう  
アラヤから指示されたも同然なのだ

思わず、手を握りしめる

それを知らずに朱乃ちゃんは此方へと歩いてくる

頭の中には、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も



『……否<sup>ネガ</sup>定<sup>ディイ</sup>』

私はこの人を殺したくない！

『コンフリクト・サーキット閉鎖<sup>コン・トラクト</sup>  
強制執行<sup>コ</sup>』

意識が沈む、このままだと駄目

朱乃ちやんが……お願い

「……にげ、て……！」

「指令  
……  
実行します」

# 鮮血の妖精

朱乃 side

私は思わず駆け出していた、他のみんなも彼女『クロエちゃん』へと走っているゼノヴィアちゃんとイリナちゃんが攻撃を仕掛けたとき、私は怒りでどうにかなりそ  
うだつた

私が彼女の近くに来ると、クロエちゃんは驚いたかのように此方を見て膝を着いた  
「え？」

手に持っていた鎖の着いた鎌のような武器も落としガラスのように碎けて消えた

「朱乃、ちゃん？」

彼女の口から私の名前が呟かれる

「クロエちゃん、ですよね？」

そう言うと、クロエちゃんは瞳かは涙が伝い落ちた

でもそれは、再会できたことを喜ぶ様なものではなく、まるで悲しいような、絶望した

かのようなそんな虚ろな瞳で涙を流していた

突如としてクロエちゃんは頭を両手で頭を押された

まるで、頭痛を耐えているなんてそんな軽いものではない

頭で知った全てを受け入れるのを拒む様な、涙を流しながらそんな必死な顔をクロエちゃんはしていた

「い、や…………うるさい。うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！黙れ！黙れ！ 私は、朱乃ちゃんを！恩人を殺したくないのに！！なんですよ！アラヤ！！」

「クロエちゃん？どうしたの!?落ち着いて!!」

突如として錯乱し始めたクロエちゃんにその場にいた全員は呆然と見ていた  
先程まで、感情の無い人形のような彼女がまるで、何かに怒るように声を荒げて叫んだのだ

その何処か虚ろな琥珀色の瞳から涙を流して

私はそれを見て思つてしまつた

彼女は、まるで何かから洗脳され人を殺している、または何かから指示を出され強制的に戦場へと出されている

そんなクロエちゃんの様子に先程まで攻撃を仕掛けていたゼノヴィア、イリナの二人

も顔を驚愕に染めていた

私は想わずクロエちゃんに駆け寄る

「クロエちゃん！・クロエちゃんしつかりして!!」

そう声をかけて、クロエちゃんを瞳を見る

あの時より更に曇った瞳、傷痕だらけの体

そして先程口にしたアラヤと言うなにか  
頭の中が謎で埋め尽くされていく

「……にげ、て……」

クロエちゃんはそう言つてガクツと顔をおろした

「逃げて？それってどういう――――」

そう言つてクロエちゃんに聞こうとした

その時だった

「朱乃さんツ！」

突如として、私はイッセー君に突き飛ばされた

そして突き飛ばされた私にも覆い被さる様にイッセー君が倒れ込んで来る

「イッセー君ツ！一体な、に……を……」

突如として突き飛ばされた事に困惑しながらそう言つて、その先の言葉が口から出な

かつた

見ると倒れ込んだイツセー君の背中には、大きな切り傷が出来ていた

「イツセー君!」

「あけ、の……さん。無事、ですか?」

そう背中の痛みに苦しそうな声色で話すイツセー君

見ると服に血が滲んでおりたつた今付けられた傷だと分かる

「一体誰が!?」

もしかしたら先程と同じように何処かに墮天使が隠れていた、そう思い辺りを見回し

「…………え?」

私は、目を疑つた

そこには、膝を着けた状態から立ち上がり双剣の片割れである白い方の剣を上に振り上げたまま俯いたクロエちゃんの姿があつた

その白い剣を赤い鮮血を濡らした状態で

彼女は、何をした?

頭の中ではとつぶに出ているであろう答え

イツセー君を、斬り着けた

それを頭の中で否定するが現実は違つた

違う、クロエちゃんはイッセー君ではなく  
私を殺殺<sub>そ</sub><sup>う</sup>としたのだ

その事実が頭の中で理解することを拒んでいる  
そんなはず無いと、心でそう思うが目の前でそれが起きた  
見てしまった

「オーダー…………実行します」

そう言つてクロエちゃんは、また無機質な声と表情でそう呟いた  
クロエちゃんが双剣を構えて、此方へと歩み寄る

「朱乃さんは速く部長とアーシアの所にイッセー君を運んで！僕が彼女を止める！」

そう言つて祐斗君がクロエちゃんへと斬りかかる

私は何がなんだか分からなる中、イッセー君をリアス達の元へと運ぶ

「イッセーさん！大丈夫ですか！」

「イッセー！大丈夫なの!?」

そう言つてアーシアさんが神セイクリッド・ギア器トライライト・ヒーリング、聖母の微笑みでイッセー君の背中を治療する

クロエちゃんは祐斗君と剣で斬り結んでいる

私はその光景を見ていることしか出来なかつた

祐斗 side

先程まで手に持つていた魔剣が吹き飛ばされる

「グッ…………まだまだッ！」

手に痺れるような痛みが走るが、無視して新たに魔剣を構え少女へと斬りかかる

「……………」

少女の双剣が木場君の剣を受け流し、首を狩ろうと双剣の片割れを僕へと振り下ろす  
だが、僕は体を捻つてそれを回避し少女に剣を振り下ろし、つばぜり合いになる

「…………なんで、何で君がこんなことを！」

手に持った剣に力を入れる

「…………」

過去に木場祐斗と言う人間が悪魔となる前、それこそ彼がまだ ■■■■■と名乗つていたところ

彼は少女に救われた

いやとある実験場からクロエが救う事が出来た唯一の一人

僕は彼女に生きることを感謝された

その時の彼女の声は凄く優しい声色だつた

「あの時、誰かを救おうとしていた君が、なんで朱乃さんを！」

木場祐斗は知っていた、少女。クロエが本来ならば誰かを救う為に動いていたと。

だからこそ、先程からあの時のような優しい声色で話す事のない少女を変だと感じていた

「何で、何で君は朱乃さんを！皆を殺そーとするんだ！」

頭の中で引っ掛かるのは先程まで錯乱していたはずの少女

空へと叫ぶ声は彼女がいかに怒りを覚えていることを指していた

押しきると同時に彼女は後ろへとバツクステップで下がり此方へと持つていた剣を

向ける

「停止解凍、ソードバレルフルオーブン全投影連続層写」

大量的の剣を宙に展開して此方へと掃射する

「くッ！」

僕はそれをどうにか斬り落とす、身体中の様々な場所に向かう剣  
それを切り落とし続けるが、だんだんと僕の集中力が落ち、身体に剣が掠り鮮血が舞

う

想わず痛みに顔をしかめ、動きを止めてしまう

「しまつ！？」

目の前に彼女の掃射した剣が迫る

そして、それが横から振るわれた剣で振り落とされた  
更に此方へと放たれる剣をまた何者かの剣で防がれる

「なんで……」

その剣を切り落としたのはゼノヴィアとイリナだつた

「協力するつて事だよ、でも勘違いしないでよね。」

「私達は奴を仕留めるためにお前と協力するだけだ」

「あの子を仕留めることには反対だけど、協力は助かるよ！」

そう言つて再び手に持つ剣に力を入れる

すると、少女は手に持つた剣を落とし片手を此方へと構える  
〔フリーズアウト ソードバレルフルオーブン  
停止解凍、全投影連続層写〕

再び、宙に大量の剣が現れ僕らへと放たれる  
僕らはそれを協力して剣を切り落とす

少女の方を見ると、右手を上に構え何かを握るようにして  
いた  
その姿には見覚えがある

先程、彼女がコカビエルを葬った際に持っていた石の斧のような大剣  
「まさか、アレをやるつもりなのか!?」

そんなの無茶だ、さつきあの子が使つたときは、腕が潰れそうになるのをどうにか無  
視して使つていた様に見えた

見るに、少女の右肩からは今だに血が流れ続けている

そんな少女の腕に線のような光が走る

「あんなのやられたら、私達は終わりだぞ！」

「どうにか止めないと、でもッ！」

「グッ！ 剣が邪魔で進めない！」

止めなければと動こうとするが、少女の放つた剣がその道を阻む

その時だ

少女のその手に大きな石斧の大剣が現れる

「ツ！」  
トライガード・オフ  
投影、装填」

少女がそう呟いた

その言葉は僕らにとつてはまるで死刑判決を言い渡されたようになえた  
だが、後ろから赤いなにかが通り少女へと向かう

「止まれええええええ！」

そう言つて少女へと駆けていくのは神器、赤龍帝の籠手<sup>ブーステッド・ギア</sup>の倍化した身体能力で走る兵

藤一誠だつた

「イッセー君!? 無茶だ！」

僕は想わずそう叫ぶが、少女はその行動が予想外だつたのか、直ぐに回避しようとするが、既に手には大きな剣を握つていた為に行動出来ずにイッセー君の赤龍帝の籠手で殴り吹き飛ばさる

「木場！ イリナにゼノヴィア！ 下がるぞ！ 今です、部長！ 朱乃さん！」

イッセー君に言われた通りに下がつていると  
「よくやつたわイッセー！ 後は任せなさい！」

「クロエちゃん、止まつて！」

そう言つて部長は滅びの魔力、朱乃さんは雷を少女へと放つ

「燐天覆う七つの円環」

だが、少女は目の前に手を翳し七つ桜の花びらのような盾が展開しそれらの攻撃を打ち消した

「なつ、これも駄目なんて!?」

すると少女はその手に螺旋状の剣を三つ取り出して、左手に洋弓を取り出して此方へと番える

「あれはッ！みんな避けて!!」

すると朱乃さんが焦ったような様子でそう言つたタイミングで螺旋状の剣が放たれ

た

「偽・螺旋剣」

カラドボルグー

「外した？」

僕らはそれを避けようとするが次第に僕らの足元へと下がり地面に刺さる

小猫ちやんがそう呟く

三本の螺旋状の剣は僕らを覆うように三ヶ所に刺さった

これはどう言う事だ？

少女に限つて腕の怪我でちゃんと放てなかつたと言うのはないはず  
そこで頭に過るのは先程に少女が戦つていた時に少女が剣を爆発させ、コカビエルを

攻撃した

まさか、彼女はこれを狙つて!?

そう思つた、次の瞬間

「壊れた幻想」  
ブローケン・ファンタズム

螺旋状の剣が爆発し、僕らを爆炎が襲つた

朱乃 side

「ぐう……」

私は痛む体をどうにか起こして立ち上がる

みれば所々を破片が掠つたのか体の所々に傷が着いている

先程に私達を襲つた剣の爆発

みんなは無事かと、辺りを見回す

「イッセーさん！・イッセーさん！」

アーシアは無傷だつたが、瞳から涙を流しイッセーの前に座り込んで治療していた  
どうやら、アーシアはイッセー君が守つてくれたお掛けで無傷らしい  
リアスは傷ついた片手を押さえながら立ち上がつていた

「リアス、大丈夫!?」

「ええ、なんとかね……ツ……」

祐斗君やゼノヴィア、イリナは魔剣を杖にどうにか立ち上がつている

小猫ちゃんは所々に切り傷を着けながらも大事には至つておらずクロエちゃんの方を警戒していた

私達のほとんどは満身創痍の状態だった

見ると、クロエちゃんが白と黒の双剣を持ち此方へと歩いて来ていた  
俯いているため、表情は読めない

「させません…………やあ！」

小猫ちゃんが殴りかかるが、クロエちゃんは体をそらしてそれを避け  
小猫ちゃんの腹を回し蹴りの要領で蹴り着ける

「がはッ!?」

そしてそのまま体を捻り逆の足で小猫を蹴り飛ばした

そして今度は祐斗君達が動こうとするが、クロエちゃんが両手に手に挟み込むように持つた六つの十字架のような剣を皆の足元に投擲して止めてしまう

クロエちゃんがゆっくりと此方へと歩み寄る

「そんな、クロエちゃん…………」

そして、私は身体から力が抜けて跪いてしまう

ふとクロエちゃんを見る

「ツ!？」

思わず、私は目を見開いた

濁つた琥珀色の瞳から涙を流して泣いていた  
それは、何時から流れていたのか分からない  
でも、クロエちゃんはこれを望んでいないことを察することが出来た  
「いつたい誰が…………」

クロエちゃんにこんなことを、させているんだろう

頭の中で、クロエちゃんを操っているであろう相手に怒りを覚える一方で身体は跪き  
いた状態で動かない

そして、クロエちゃんがとうとう私の目の前にたどり着く

そしてクロエちゃんが手に逆手に持った双剣の片方を振り上げる

恐らくはあれを私に振り下ろすのだろう

私は、思わず目を閉じる

お父さん、お母さん…………リアスにみんな  
さようなら

あれ？

いつまでも断つても、痛みが来ない  
体を斬られるような感覚もない

私は不思議に思い、閉じていた目を開く

すると、目の前には剣を振り上げたクロエちゃん

そしてクロエちゃんの振り上げた手を掴んで止める白髪の男がいた  
だが、その男は明らかに私達とは違った

「そこの少女よ、向こうへ行け。邪魔になる」

そう言われ、私は少し離れると白髪の男の人がクロエちゃんの手を離した  
その瞬間、クロエちゃんはバックステップで後ろへと下がる

「抑止力よ、元とは言え俺のマスターを返して貰おう」

そう言うとクロエちゃんは手に持った双剣を構える  
すると白髪の男は大きな槍を片手で構える

「致し方無し、少々強引だが彼女を返して貰おう」

するとクロエちゃんは手に持った双剣を増やし、合計六本となる双剣を投擲するが  
「その程度か」

白髪の男は手に持った槍に炎を纏わせて振るうことでそれらの双剣を振り払った  
「武器など前座、真の英雄は目で殺す」

そう言つて男が片目を押さえると、クロエちゃんは目の前に七つ桜の花びらのような

盾が展開される

「梵天よ、<sup>ブラン</sup><sub>マースト</sub>地を覆え!!」

すると白髪の男の目から光線のような物が放たれ、クロエちゃんの目の前に展開された七つ桜の花びらのような盾を全てを貫いた

「なつ!?

「先輩達の魔法でも壊れなかつた盾が」

「たつたの一撃で壊された!?」

その事に私の離れた場所にいた皆が声に出して驚いていた

それにクロエちゃんは、宙に大量の剣を出現させ剣を掃射するが、白髪の男が再び炎を纏わせた槍で振り払い近付いていく

クロエちゃんがだんだんと押されていく

そしてどうとう白髪の男がクロエちゃんの目の前に辿り着く

「抑止力よ、既にこの件の原因は死した。もう良いだろう、少女を解放しろ」

そう言つてクロエへとその大きな槍を向ける白髪の男  
すると、クロエちゃんはまるで力が抜けたかのように手から双剣が手放し姿が恐らく  
は私服であるであろう服に代わる

そして後ろへとふらりと倒れそうになり、白髪の男に抱き止められる

「少女よ、今は眠れ。」

そう言つて抱き止めたクロエちゃんに眩い白髪の男はクロエちゃんを両手で抱えて  
私達から離れ始める

「ま、まつて！」

私は思わず男の人へと叫ぶ

すると男の人は振り返り、私を見つめる

「何だ？」

「クロエちゃんを、どうするの？」

それだけは、知りたかった

さつきみたいに洗脳されているようなら、絶対に帰してはいけない

そう思つたのだ、それにクロエちゃんは私の家族だから心配だつた

「……マスター、お前は恵まれたな。このように自身を心配してくれる者がいるのだ  
から」

男の人が何かを呟くと、此方へと向き言つた

「問題ない。親の元に帰す。それだけだ」

そう言つて男の人は、クロエちゃんを抱えたまま歩いていくのを

私達は、呆然と見ていことしか出来なかつた

アザゼル side

深夜、クロエが突如として出ていつて長い時間が過ぎた  
「生きて帰つてくるよな……」

そんなことを呟き、頭を振る

「いや、あいつは帰つてくる。そうだよな、クロエ」

そう呟き、今日見たクロエの幸せそうな顔を思い出す  
様々な食べ物を見て、目を輝かせる少女らしいと思つた

だが、それ以上にあの時

クロエが出掛けると告げたときの声はそれ以上に悲しさを感じた

俺と過ごしていたアーヴィングが人間から、まるでロボットのように変わったような錯覚を

覚えた

何より、クロエが言つていた言葉『アラヤ』、恐らくはそれが関わっている少し、調べた方が良いか

そう考えた、その時だつた  
家のチャイムが家に鳴り響く。

俺は恐らくはクロエが帰つてきたのだろうと思い急いで玄関へ向かい、扉を開けるすると白髪の若い男が右肩から血を流したクロエを抱えて立つっていた

「お前が、俺の元マスターの保護者……か？」

一瞬、クロエをこうした奴がこいつかも知れないと考えたが直ぐにその考えを捨てる  
もしそうなら、こうしてクロエを大事そうに抱えて俺の元に連れて帰つてこない  
それに、こいつはなんと言つた？

元マスター

それは、どういう意味だ

その通りなら、クロエはこいつの主人？

頭の中で様々な考えが浮かんでは消えていく

「お前は、何者だ？ 何故こいつの家がここだと知つている？」

警戒しつつそう答える、先程からそなだが

この男には、隙がないのだ

まるで、数々の戦闘を切り抜けた俺やサーゼクス以上の何かを感じる

「俺の名はカルナ。この少女のサーヴァント…………だつた男だ」

カルナ、だと!?『マハーバーラタ』に記された不死身の英雄じやねえか

そもそも、ならなんで生きてる?

こいつが本当にカルナなら、もうとつくる昔に死んでいるはずだ

「さつきからクロエの事を元マスターと言つていたが、それはどういう意味だ?」

「その言葉の通り、俺はかつてこの少女に従つていた。それだけだ」

「…………」

「それはともかくで今は、この少女を寝所に下ろしたいのだが」

「そんな事よりまず傷の手当て、を…………ッ!?」

改めてクロエの肩の血を見ると渴いており、血のでていた場所と思われる後のある箇所は元からなかつたかのように傷が無くなつており血が固まつてているだけだつた

クロエを差し出され俺はクロエを受け取る

すると、クロエから規則正しい寝息が聞こえてくる

「元マスターを、よろしく頼む」

そう言つて、家から去つていくカルナと言う男を俺は少し見届け、クロエの肩の血を

タオルで拭つてから、部屋に寝かせた

まあ、コイツが話すつってたし俺は待つさ

今はクロエが無事に帰つてきてくれたこと喜ぶとするか。それにクロエの言つてい  
たアラヤについて軽く調べてみるとしよう

# 傷付いた硝子（ココロ）

クロエ side

真っ暗な中、私は両手両足を鎖のような何かに縛られていた  
私はそれから抜け出そうと、必死に手足に力を込める

「動け、動け！動け動け動け！」

どれだけ手足を動かそうとしても手足に付けられた鎖が音を立てるだけ  
目の前には私がクロエちゃんやその友達と思われる人達を手に持った干将莫邪で傷  
付けていくのが映されている

「動いて！動いてよ！」

そう必死に叫ぶが、残酷にも目の前の私はその人達へと剣を放ち続ける  
機械的に、そのもの達を排除するためにだけに

私の頬には涙が伝い続ける

それは悲しみ、苦しみ、罪悪感

そして絶望

私は何のために戦うと決めた？

誰よりも戦つて、殺して戦い抜いて……救えるだけ救う？

無理だ、救うどころか

まさに今、私を救つてくれた恩人

そして自身で救つた金髪の少年の面影のある彼にまで手を出してしまつたじやない  
か

すると突如として目の前には泥のような禍々しい何かが生まれ、人形のような形を作

る

色の抜けた銀髪、褐色の肌は色が抜けたように真っ白に変わつていて瞳はまるで、憎  
悪を燃やすかのように紅く光つてゐる障害の姿となる

「ツ!」

見れば、私の肌の所々に黒い模様が走つており影のような何かを纏つていた

そして身体中の所々に大量の血が付着していて色の抜けた銀髪の所々は紅く染まつ  
ていた

『「どう？自分のかつてきたことが理解できた？クロエ』』

「わた、し？何なの、その姿は…………」

私

『「さあ？それより、どう？私がみんなを排除する姿は』』

そう言つて私がみんなを私が剣で皆を傷付けていくのを指差す  
「…………うるさい」

『「何？自分がすることでしょ？」』

ピキッ！

私の何かにヒビが入る

『「私は結局、人を殺すことしか出来ない」』

ヒビから更に新にヒビが入つていく

『「滑稽よね。今まで救えたと思ってたの？アハハ！凄い思い違いよね？」』

私は映像から目を背けうつむく

「もう、やめて…………」

頬を伝う涙はいまだに流れ続けている

そう言つて私は近付いてきて私の顎を持ち上げて視線を合わせる

『「貴方はただの、人殺し。救う？何もすくえてなんかないじゃない？今もほら」』

そう言つて私は流れている映像を見ると、私が放つた壊れた幻想ブローケン・ファンタズムで皆が地面上に倒れ

ていた

「ああ…………」

そして映像に映つた私は倒れた人達へと近付いていく  
「止まつて、止まつてよ…………止まれ!!」

お願ひ、誰か私を止めて

そして小さな白髪の女の子が私を止めようと私を殴ろうとしたが、避けられ蹴り飛ばされる

『あゝあ、あんなにちつちやい子も傷付けちゃつたわね』

白髪の女の子を蹴り飛ばした私はクロエちゃんへと逆手に持つた干将を振り上げる  
「誰、か…………」

そう言つて映像を見るが、誰も倒れているか大怪我をしているせいで動けない

先程私を殴り飛ばして止めてくれた彼も地に倒れ伏している

『もう終わりね。また殺すしかできなかつたわね私？それじやあお父さんに合わせる  
顔が無いんじやない？』

確かにそうだ

こんな事をしてしまつた私は、あんな優しい人の所でなんか暮らしちゃいけない  
前みたいに路地裏で倒れたいる方がお似合いに決まつていて

ピシッピシッ！

ヒビが全体に広がつていく

『死んだら?』

そうだ、私のような人間が生きて良いわけない  
人を殺すことしかできなくて、自分で救つた人さえ傷付けるような人が生きて良い訳  
がない

私は生きるかちなんてそもそもから無かつたんだ

絶対に私なんかより別の何かの方が私の体を良く使ってくれるに決まつてゐる

『じゃあ、ワタシにくれる?』

そうね、生きる価値もない。帰るべき場所だつて私がいない方が良いに決まつてゐる  
怖い、私が自分の力でお父さんを傷付けるのが  
皆を傷付けていくのが、だから

「私は…………」

この体を

『ツ?!?チイ!』

目の前の私が突如として顔を歪める

「抑止力よ、元とは言え俺のマスターを返して貰おう」

私の姿をしていた泥らしきものが何かの攻撃で崩れて消え、私の手足の鎖も無くなり  
自由になり地面らしき場所に倒れる

ふと見上げると、前に私に施してくれた白髪のお兄さんが大きな槍を持った状態で佇んでいた

「お兄さん？」

「待たせたな。立てるか？」

そう言つて私に手を差し出すお兄さん  
でも、私は手を伸ばさない  
伸ばしちゃ、いけない

「どうした？」

「私は、死なないと駄目」

そう言うと不思議そうに此方を見るお兄さん

「何故、お前が死ななければならない？」

「私は、この手で皆を傷付けた」

そう言つて私は先程から流れている映像を

「え？」

見れば、朱乃ちゃんは殺されてなどいなかつた

止められていた

目の前にいるはずのお兄さんが剣を振り上げた私の手を止めていた

「お前は、確かに傷付けたかも知れない」

そう言つてお兄さんは静かに言葉を紡ぐ

「だが、殺してはいない」

「ツ!」

そう言うとお兄さんは私の手を持つて無理やり立たせる

「見てみろ」

そう言つてお兄さんが流れている映像の方を指差す

見ると、倒れた私がお兄さんに抱えられた状態で朱乃ちゃんが何か言つていた  
もしかしたら、私を罵倒しているのではと考えたが直ぐに消えた

朱乃ちゃんの目は、誰かを心配しているようなそんな目をしていたから

「お前は、あの少女には恐れられる事も罵倒されることもない。それはあの少年だつて  
同じだ」

「え?」

「あの少女と少年、そして赤髪の少年はお前を止めようとしていた。お前を救おうとし  
ていた」

何故だろうか、このお兄さんの言葉を聞くと、先程ヒビが入った何かがゆっくりと元  
に戻っていくを感じる

「生きるがいいマスター。必ず、お前の帰りを待っている存在がいる」

「ツ！お父さん…………」

頭に浮かぶのは必ず帰ると約束した養父

「時間か、俺が干渉することが出来るのはここまでだ。もう、大丈夫か？」

すると、段々とお兄さんの姿が透け始める

「ええ、もう大丈夫よ。私には帰る場所があるって分かったから。まだ、死ぬわけには行かない」

まだ、きつとやり直せる

朱乃ちゃんに、あの皆に謝ろう

そう思い、私はお兄さんへと顔を向ける

「お兄さん」

「なんだ？」

「ありがとう、お兄さんがいなかつたらとつくの昔に私は死んでた。お兄さんが私の命を繋いでくれたお陰で、私はお父さんに会えた。ありがとう」

「ああ」

そう言つてお兄さんの姿が消え、私の意識も落ちていった

# 夢、終わりへの前奏曲（プレリュード）

クロエ side

目を開くすると、最近みたばかりの天井  
そして私を心配そうに見るお父さんの姿  
ではなく

私は夢で見たあの研究所で、前と同じように液体の中に生まれたままの姿で浸かつて  
いた

「 ツ」

口を開こうとしても、この液体が入つてきてゴポゴポと音を立てるだけ  
でも、何故か息苦しさはなかった

見渡すと、前にみた研究所らしき場所で私以外にも沢山の女の子が液体に浸けられて  
眠つていた

ふと私の近くにあるパソコンのある机を見るが、前とは違うあのような男はいない

その事に少し安堵した私は、改めて周りを見てみる  
「つ!?」

目を見開いた

ワタシの私は、知っている

……なんで

——薬のなかゆつくりと揺れる綺麗な銀髪

……一体どうして

——まるで雪のような真つ白な肌

なんで、彼女がそこにいる

琥珀色の瞳

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言う名の少女の姿が、そこにはあつた  
私と同じように薬の中に浸けられた状態で

『なんで』その言葉が頭の中を支配する

理解が追い付かない

なんで会つたこともない少女が夢に現れる?

そもそもなんでイリヤがここに?

なんで私と同じように何かの液体の中に浸けられている?

た

そんな理解しがたい光景から目をそらそうとして、私は更に信じがたい光景を目にした

そらした先の液体に浸けられた少女

この子も知っている

綺麗なショートカットの黒髪

イリヤと私と同じくらいの背

キリツとした顔立ちでイリヤと同様に液体の中で髪が揺れている

美遊・エーデフェルト

F a t e / K a l e i d l i n e r プリズマイリヤにて主人公であるイリヤのク

ラスメイト

何故、そんな子が此処にいる？

一体、此処はなんの研究所なの？

そう思いながら、周りを見る

改めて謎の液体が入ったようなガラスの中には人であつたと思われる何か

そして様々な臓器が入つていて、人であつた何かから臓器が飛び出したりしていた

なに、よ…………これ

気持ち悪い、頭の中に何度も何度もあの液体の中身がフラツシユバツクする

気持ち悪い

そう思つてゐると、何かに足元を捕まれた

私は恐る恐る足元を見ると、先程見た人であつた何かが私の足を掴んでいた  
ヒツ!?

『お前の、せいだ…………』

声が聞こえ、私は両手で耳をふさいで足を引くが力強く捕まれた腕はびくともしない  
『お前を作るために…………わたし達は』

突如として足元が消えて真っ暗な何かに捕まれた足を引きずり込まれる  
『死んだ、あいつもみんな…………失敗作だから…………』

ひたすら足搔いて手を伸ばすが、体は真っ黒な何かに引きずり込まれていきとうとう  
腰まで飲み込まれた

『お前のせいだ、お前が死ねば…………』

だんだんと体は引きずり込まれとうとう残つたのは伸ばした手と顔のみ  
嫌だ、誰か!

ふと上を見ると何人かの人影が見えた

「お願い、助けて!」

『なんでお前を助けなきやいけない? お前のせいだ ■■■■■■■■■は死んだ、お前には良

い死に方だろ、偽善者』

『フン、無様な姿だな鮮血の妖精。<sup>ブラッドフェアリー</sup>そのまま死に、神の元で断罪されるがいい』

『姉様を助けてくれなかつた貴方にはお似合いの終わり方ですね』

「お願い、助けて！助けてよ……お願い、だから……」

体が完全に沈む、もう駄目だ

諦めかけたその時、私の手が何か掴まれ

引っ張られた

掴んできたその手は、大きくて

とても温かかつた

目を開き目に入つたのは、つい最近に見た天井と此方を心配そうに見るお父さんの姿  
だつた

「クロエ！ 目が覚めたか！ 大丈夫か！？ 俺が誰だか分かるか！？」

ふと見ると、私の右手をお父さんが掴んでいたいた

そつか、最後に引っ張りあげて助けてくれたのお父さんだつたんだね

「おと、さん？」

あれ？

声が掠れて思つたように声が出ない、なんで？

ゆっくりと体を起こす

「クロエ、良かつた。分かるみたいだな」

体が怠い、でもそれより

「おと、さん！ どうや、て私、帰つて來た、の？」

あのあと、アラヤに意識を乗つ取られてからの記憶がない

白髪のお兄さんが私を止めてくれたのは覚えているが、そこから後の事が曖昧なのだが落ち着け、まずお前の元サーヴァントを名乗る奴がお前を抱えて帰つてきてな。それで、直ぐに寝床に下ろして帰つてつたんだ。そのあと、お前が急に熱を出して斂されだしてな」

あの白髪のお兄さんが、私を送つてくれた?

「それで、そのあとにお前を看病してたら今だ」

「なるほど。」

体の怠さ、声の掠れの原因はそれかしら

改めて体の体温がいつもより高いことに気付いた

——ぎゅるるるう——

お腹から、空腹を知らせる音が鳴る

なんか、久しぶりに聞いた感じがするなあ

「お腹、へつた」

「飯が食えるなら大丈夫そうだな」

そう言つてお父さんは安堵した様子で私の頭を撫でる

「ん!」

声が掠れているので、頷いて返す

「分かった。取り敢えずお粥かうどんでも作るか」

「うん」

そう言つてお父さんが部屋を出ていく

ああ、無事に帰つてこれたんだなあ

一人部屋で布団に横になり、そう思う

何でもないこのお父さんと過ごす時間が凄く穏やかに感じる

それにもしても、アラヤの事お父さんにいつ話したら言いかな?

それに朱乃ちやんに会つて他の皆さんにも謝らないと、それに朱璃さんやバラキエルさんがどうなつたのかも気になる

そう考え、少し窓を眺める

あの夢は一体何なんだろう?

それに夢の研究所にイリヤや美遊が眠つてたのも気になる

そもそもどうして私は行つたこともないし、会つたこともない二人の事を夢に見るのだろうか?

そう考えていると、アザゼルお父さんが湯気の立つ小さめな鍋を持つてくる

「お粥作つてきたぞ。温かい内に食え」

そう言つて鍋の蓋を明けてレンゲを渡されたので、受け取り手を合わせる

「いただきます」

そう言つて一口掬つて食べる

うん、美味しい

味は普通のお粥だけど、凄く温かい

「美味しい」

「なら良かつたぜ。所で話があるんだが」

匙を掬つて口に運びながら

「はふ、はふ。ん？」

「俺、明後日に町の学園。駒王学園にいかなきやならなくなつたんだ」「ツ！」

それはつまり、原作で言う三種族での会談

そして禍カオスの団の襲撃がある

そしてお父さんは自ら腕を引きちぎつて義手にするはず  
レンゲを持つ手に力が入る

私しか、この事実を知らない

私しか止められない

助けてくれたお父さんを、今度は私が……

「おいクロエ？ 聞いてるのか？」

「ごめん、何だつけ？」

「ああ、明後日にこの街の学園に少し用事があつてな。それで、俺の……まあ知り合いみたいな奴と行くんだが。お前にも来てもらいてえんだ」

「何で、私も？」

そう言つて首を傾げる

私はこの体だと小学生ぐらいだし

そもそもアラヤに呼ばれる私は、学校になんて通つてる暇はない

「お前の事や他にも色々と話し合う事があるからな」

「…………わかつ、た」

アラヤに乗つ取られてあんなことしたから、何時かは謝らないと思つてたけどこんなに早くくるなんて、予想外だわ

私自身、朱乃ちゃんや金髪の子と話を聞きたい事があつたからいいけど  
そう思つていると、鍋のお粥が全部無くなつていた

「ごちそまさまでした」

「おう、取り敢えず今はゆつくりと休んで熱を治せよ」

そう言つて頭を撫でてくれるお父さんに、私は頷き布団へと横になつた



221 夢、終わりへの前奏曲（プレリュード）

何故、  
彼がクロエとして  
この世界に転生したのか

何故、  
クロエの能力と容姿が  
転生特典に選ばれたのか

何故、  
身分証はおろか  
親も存在しないのか

何故、  
最初からアラヤとの  
契約があつたのか

何故、クロエが

あのような夢を見るのか

何故、夢の研究所に

イリヤとミュが存在するのか

駒王町にて悪魔、天使

そして墮天使による

三種族の会談が開かれる時

クロエの全ての謎が

今、明らかとなる

223 夢、終わりへの前奏曲（プレリュード）

♪最終章♪  
私の真実とバースデイ

少女の物語は、  
終わりへと加速する

# ～最終章～私の真実とバースデイ 壊れ行くモノ

クロエ side

熱を出して寝込んだ次の日、無事に私は熱が下がり体調が回復した  
そう言えば今日はお父さんの友達が来るらしい

私は、どうしていればいいのだろうか？

正直言うと、私は買い物の時に娯楽品と言える物はこの猫の肉球のクツシヨンのみで  
他には服や机しか買つていないので

なのでクツシヨンを抱えて部屋の隅つこに座る

あの夢を見てからずつと頭の中にあの景色が浮かぶのだ

あの研究所は何の研究所だろうか？

あの場所に何故イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

そして遡月美遊と言うこの世界に存在する筈のない人達が何らかの薬のなかにいた

のか

あの狂った男は一体なんなのか

そして何より、大量の液体に浸けられていたヒトであつたかのような物、内臓や死体が頭の中にフラツシュバツクする

気持ち悪い

私は今まで沢山の場所で様々な死骸や研究所を見てきた

でも、それ以上に夢のあの場所は酷く残酷で、自分がその液体のなかに入れられていることが怖かつた

気持ち悪い、キモチワルイ

体温が下がり、何かが喉をせり上がつてくる

「うえ…………」

どうにか吐きそうになるのを堪える

今行けば、確実にお父さんの邪魔をすることになつてしまう

「はあ、はあ…………」

息が苦しい、呼吸が正常に出来ない

どうにか呼吸を行おうとするが、過呼吸ぎみになり体が震えていく  
どうにか立ち上がり片手で口を抑え、壁を伝いながらトイレへと体を刺激しないよう

ゆっくりと歩く

近い部屋からお父さんとお父さんの友達だと思われる声が聞こえる。他にもテレビからゲームらしき音が流れていた

今ならばれずに行ける、お父さんに迷惑をかけなくてすむ

そう思い、更に足を進めようと  
するッ！

「ツ?」

壁に触れていた手が滑り、体勢がぐずれ地面に倒れて込んでしまう  
「おっさん、なんか廊下から大きな音がしたぞ?」

「ん?なんか、落ちたのか?」

その時、そう言つてお父さんが部屋から出てきてしまつた

そして私を見ると驚愕して焦つたようすで私の体を支えてくれた

「クロエ!?どうした!?体調が悪いのか!」

「おと、さん。気分が、悪くて、ト、イレに……」

浅い呼吸を繰り返しながらどうにかそう言つて立ち上がる

「おっさん!何があつたの、か……!」

するとお父さんの出てきた部屋から、一昨日の戦場で私を殴つて止めてくれた赤髪の

少年が立っていた

「おと、さん。私は、大丈夫だか、ら」

「バカヤロウ！大丈夫なわけあるか！取り敢えず、トイレまで抱えてくからな！」

そう言つてお父さんが私を抱える

「すまねえな赤龍帝。ちよつとこいつをトイレまでつれてくから部屋で待つてろ」

「は、はい」

お父さんに抱えられトイレにつくと、私を下ろしてくれた、私は直ぐに中に入つてせり上がつてくる物を吐き出した

吐いてる内に、からだの震えや過呼吸は直つており、私はあまりの気持ち悪さに閉じていた瞳を開けた

恐らくは昨日食べたお粥かお昼らしき何かが吐き出されているのだと思つた  
でも、違つた

吐き出されたのは、赤黒く

どろどろとしたナニカ

そう、私が今まで何度も見てきたもの

何度も作り続けてきた物

私の二つ名の元となつた物

血だつた

頭の中が真っ白になる、どういう事？

なんで胃液とかではなく、血？

なんで、その言葉が頭の中を支配する

そもそも、何故血が吐き出された？

考えられるのは、何らかの病気にかかつたこと

でも、何故？

心当たりはあるとすれば、それは私がまだアザゼルお父さんに拾われる前

生きるために毎日を必死に生きていたあの頃

生きるために、様々な物を口にした

捨てられたコンビニのお弁当の残りやカビが少し生えたパン、近くの公園に落ちいた  
食べられそうな木の実や雑草

それが後々からわたしの体を？

でも、もしそうなら食べて直ぐに症状が出ていた筈だ

なら何故？

取り敢えず、トイレットペーパーで口もとの血を拭い、便座を拭いてから水を流す  
よし、これで誰にもバレない

お父さんにも迷惑をかけなくても大丈夫

そう思い、家を出る

「クロエ、大丈夫なのか？」

そう言つてお父さんが両肩を優しく掴む

「大丈夫よ、問題ないわ。ごめんなさい、お友達との遊びを邪魔してしまって……」

「いいんだよ。お前は俺の娘だと言つたろ？もつと迷惑をかけてもいいんだぜ？」

そう言つて微笑むお父さん、でも私は罪悪感と迷惑をかけたくない気持ちでいっぱいだつた

すると、気になつたのかさつきの赤髪の少年が廊下を歩いてきた

「おっさん、その子」

「ああ、お前にはまだ言つてなかつたな。こいつはクロエ、俺の娘だ」

「はあ!? おっさんの娘だつたのか!?」

そう言つて驚きの声をあげる少年、いや気付いている

彼は兵藤一誠、赤龍帝にしてこの世界の主人公

でも、彼が驚くのも無理がない

だつて数日前に沢山の人を斬り、そして兵藤一誠達にも牙を向いた人物がここにいるのだから

「なんだ？ 知つてゐるのか？」

「は、はい…………」

すると、兵藤一誠は一昨日のエクスカリバーの事件に関することを話し出した  
私がバルパー・ガリレイ、コカビエルの両者を殺したこと

天使の教会の戦士が私を殺そうとしたこと

そして突如として涙を流して座り込んで錯乱し、『アラヤ』と言う単語を発しながら  
たこと

その後、突如としてその場にいた全員に刃を向けたこと

白髪の男が乱入しを止められると意識を失つて倒れたこと

その後、兵藤一誠は帰り私は部屋でお父さんと晩御飯を食べていた  
ついでに言うと今日はお父さんの気分で鰻の出前だつた

「クロエ、あいつが言つてたことは本当か」

食べながら、自然な感じで聞いてきた

思わず、私の箸が止まり、僅かな沈黙が続く

「…………うん」

「お前が言つっていた『アラヤ』と言ふ言葉に関係するのか？」

「うん」

すると、お父さんは箸を置いた

「なあ、クロエ。明日、駒王学園で夜中に天使、堕天使、悪魔の会議があるんだ。それで、出来ればお前も付いてきて欲しい」

「え？」

「そこで、お前のことをミカエルの奴に掛け合うつもりだ。上手く行けば、お前の指名手配を取り消せる。恐らくだがお前が学校で戦つたあいつらにも、お前が敵じやない事を伝えられる。だから、そこで何でお前があんな状態だったのか、なんで戦うのか、アラヤについてを話してくれ、頼む。」

そう言つて頭を下げるお父さん

この人には、頭が上がらないな……

こんな私を拾つてくれて、ご飯を食べさせてくれたばかりか、居場所をくれた上に私の為に掛け合つてくれようとしている

感謝しか出来ないよ

「お父さん、ありがとう。私、話してみるよ」

「そうか、ありがとなクロエ。」

そう言つて私達は食事の再開をしようと

「うぐっ！」

「どうしたクロエ!?」

その時だつた

突如として、また喉にナニカがせり上がつてくる

お昼と同じ感覚が喉に現れる

私は喉のせり上がりつてくる何かを片手を抑えて我慢し、急いで席を立ちお手洗いに行きナニカを吐き出す

吐き出されたのは、先程まで食べていたものではなく昼と同じような赤黒い血だつた  
「ま、また…………」

荒い呼吸をしながら、震える体を抱き締める

「おいクロエ！大丈夫な、の…………ッ!?」

すると、お父さんが開けっぱなしにしていた戸をから顔を出して  
そして固まつた

目線は、先程私が吐き出してしまつた赤黒い血

「お前！まさか昼のもそうだつたのか!?」

「ち、ちが…………」

違う、そう否定しようとした。でも、無理だつた

「悪いがクロエ、お前が昼に吐いた後に掃除の為にトイレに入つたときな……見ちまつ

たんだよ。部屋の端に付いた血痕を

見られていたのだから

「?」

「最初は勘違いだと思ったが、お前……」

「わかん、ない」

「クロエ?」

「わかん、ないの。なんで?わたしは、血を吐くの?……怖い、怖いよ。なんで、わたし  
…………」

そう言つて震えるわたしを、お父さんがそつと抱き締めてくれた  
「取り敢えず、今日は遅いから明日の朝に病院行くぞ」

「…………うん」

私は自身の体に起きた異変

これがなんなのか私は全く分からぬ  
一体、私の体に何が起こってるの?

# 運命の日

クロエ side

次の日の朝、私はお父さんに連れられ前の個人病院に向かつた  
そして下された診断結果は“原因不明”だつた

個人病院の先生が言うには、私の体は健康そのものらしく、病気らしき影すらない  
なら何故、吐血するのだろうか？

そう思つてしまふ

私のからだが健康体なら何故？

でも今はそれより夜に話す覚悟を決めないといけない  
アラヤについてこの世界でどのような認識があるのかは分からぬ  
それにいつ天使の陣営から攻撃されるかも

だから、出来るだけ警戒は怠らずに行かないと

朱乃ちゃんやあの私の助けた子にてる木場くん、そして私が刃を向けてしまつた皆

からどう思われるのかも

そう思いながら、私は車から外を眺めていた

病院から私達は授業参観日である駒王学園へと向かっていた

そして私の前の助手席には、銀髪のイケメンであり今夜裏切るのであろうヴァーリ・ルシフナーが座っている

「クロエ、ヴァーリそろそろ付くぞー」

「うん、分かったよお父さん」

「ああ、分かった」

車から降りて学園に入る、私は以前に買ったの猫耳パークーにチエツクのミニスカートにハイソックスに黒のブーツの格好でお父さんとヴァーリの後ろを付いていく

一応、私は顔を見られないようフードを深く被っている

結構、保護者さんが来ているらしく賑わつており

もし小さな子がいたら迷子になりそうなイメージがある

おいヴァーリ、なんだその不安そうな目は

ならないぞ、迷子なんか

なんだ、何故手を差し出してくる？

「迷子になられると困るからな」

ここまでされて断るのも少し変だと思うので私は差し出された手を握る

そう言えば、ヴァーリはお父さんに育てられてたつけ？なら私のお兄ちゃんって事になるからこれも普通なのかな？

そう思つて移動していると、様々な場所を見ていると授業開始のチャイムがなつた  
「俺は少し別の所を見てくる。お前はアザゼルの所にいろ」

「ん」

そう答えて私は先程アザゼルお父さんの入つていった教室に入る

そこでは英語の授業が行われていた、見れば兵藤一誠の近くでビデオカメラを構えた男女とお父さんがいた

なので、出来るだけ他の人の迷惑にならないようにお父さんの隣に移動しづボンの裾を少し引つ張る

「ん？ クロエか、ヴァーリはどうした？」

「別のどこ行くって」

「そうか」

そう言つてお父さんは兵藤一誠を見るなか、私はずっとその授業風景を見て少し懐かしかつた

英語の授業なのに何故粘土をやつてるのかは分からぬいけど

その後、ボーとしてたらいつの間にか誰かが作った女の人のフィギアの叩き売りになつて驚いた

お父さんは楽しそうに笑つてたし、まあいいかな  
そんな感じで授業が終わり、私とお父さんで廊下に出る  
でもヴァーリの姿はない

「ヴァーリの奴、何処見に行つたんだ？」

お父さんがそう呟くきながら、周りを見回していると近くにいた子供と親の会話が聞こえてきた

「お母さん、お姉ちゃん頑張つてたよ！」

「そうね。帰つたらお姉ちゃんの誕生日会の準備、始めないとね  
「うん！」

そんなことを話しながら帰つていく親子を眺める

微笑ましいなあ

すると、お父さんも見ていたらしく帰つていく親子を眺めていた  
「誕生会か……………そいやクロエ、お前の誕生日つて何時だ？」

「わかんない、かな？」

そう言われて、わたしはそう返した

前世の私の誕生日は何故か霧がかかっていて思い出せない

それに、クロエの誕生日も知らない

「つ！す、すまん…………」

「大丈夫よ。別に気にしてないしね」

そう言うとお父さんは少し気まずそうに考えて、何かを思い付いたのか此方に目を合わせた

「でも誕生日が無いと色々と不便だよな…………よし、ならお前は明日が誕生日だ！」  
「へ？」

「明日はお前の誕生日に決定だ。盛大に祝うぞ、楽しみにしてろよ？」

「……本当にいいの？」

「家族として、誕生日を祝うのは当然だろ。プレゼントは何が欲しいか考えとけ？」  
「うん！」

そう言つて私はお父さんに笑つた

明日、お父さんに祝つて貰うためにも

今日の夜の三種族の会談は必ずお父さんを守つてみせる

何もない廃墟に二人の少女が座っている

少女達は目の前に投映された少女を見て、片方の少女は口を三日月のようにして笑顔を浮かべ、もう片方の少女は無表情のまま目の前に投映された少女を見つめていた  
「やつと見つけた」

「…………うん、 そうだね」

「じゃあ、行こつか」

「分かった」

そう言つて少女達は立ち上がる  
その手に黄金色のカードを持つて

夜、

三種族による会談が始まる

# 救われた者

クロエ side

お父さんとお兄ちゃん、ヴァーリと共に夜の校舎に入り会議室へと向かう  
私はお父さんの提案もあり、最初から来ていたあのワンピースに外套を羽織った状態  
だ

この方が良いらしい

またヴァーリさんと手を繋いで歩いていると、少し先で見覚えのある背中が見えた

「よおバラキエル、待たせちまつたか？」

「……え？」

お父さんは今、何て言つた？

バラキエル、確かにそう言つた

バラキエルと呼ばれた人が振り返り、私は目を見開いた

「アザゼル総督、そんなこと、は……っ！」

バラキエルさんが目を見開いて此方を見る

「バラキエル? どうした?」

「クロエ、クロエなのか!」

そう言つて私の両肩に手を置くバラキエルさん、私は外套のフードを脱ぐ  
私は、瞳から涙を流してしまつていた

二度と会えないとそう思つていた恩人に会えたのだから  
「バラキエルさん、無事で、生きていて良かつた」

「クロエ、本当に生きて!」

そう言うとバラキエルさんは私を抱き締めた

お父さんより少し力が強い

「お前が、消えたとき私をは、私達は……」

「それって、朱璃さんも」

「ああ! お前のお陰で生きてる、お前があの時、守ってくれたから」

「ああ、心にずっと残つていた何かが取れていく

「安心、しました……私のやつたことは無駄じやなかつたんだと」

私は今まで、色々な形で自分の介入した紛争の後の話を見たり聞いたりした  
私の救えたと思っていた、町は所によつてはミサイルが落とされ救つた人の全てが死

に

時には毒ガスのテロが起きて死んでしまつていた

だから、初めて明確に自分で救えたのだと感じることが出来た

「ああ、こいつはどういう意味だ？」

「アザゼル総督、実は……」

そう言つて何がなんだか分からぬ様子だつたお兄ちゃんとお父さんにバラキエルさんは話しだした

少しの間だけ、私がバラキエルさん夫婦の元にいた時の事を

「なるほどな、そんな事があつたのか」

「はい、何故総督はクロエと？」

「こいつを拾つたんだよ、つまりは俺がこいつの里親になつたんだよ」

「なるほど」

「それでだ、お前朱璃を会議に連れてきてくれるか？」

「な、何故ですか？会議には私達だけで」

「こいつの、クロエの大変な話があるからだ」

「分かりました、いま連絡します」

そう言つてバラキエルさんが連絡するために離れたので外套のフードを深く被る

「…………クロエ」

突如として、お兄ちゃんが口を開いた

「何、お兄ちゃん」

「お前…………いや、何でもない」

「? そう」

そう言つて外套の上から頭を撫でてくるお兄ちゃんに少し困惑したがまあそのままにしておいた

すると少し先に朱璃さんが走つてくるが見えた

そして私を見つけると涙を流して走つてきてそのまま抱き締められた

「良かつた、生きて居てくれてありがとう。本当にありがとうございますクロエちゃん」

「朱璃さん…………」

良かつた、私は姫島さん達を救うことが出来ていたんだ

その後、私達は会議室へと来ていた

「クロエ、俺が合図するまで出来るだけ喋らずにいてくれ」

「?」

「お前が天使の陣営にバレたら確実に攻撃されんのは見える。だから俺が合図するまでは待つてろ。ヴァーリ、こいつがもし動こうとしたら止めてくれ」

「分かった」

アザゼルお父さんに続いてヴァーリお兄ちゃんに手を繋いで中に入ると、私が二天龍と戦ったときについた男の人や女人の人、そして昨日私が刀を向けてしまった原作の才力研の人達が揃っていた

私とお兄ちゃんはアザゼルの後ろに静かに移動する  
「悪いな待たせちまつたか?」

「いや、そんなこと無いよアザゼル」

「うんうん、私達もさつき来た所だから大丈夫だよ!」

「これで皆さん揃いましたね、サーゼクス」

「ああ、それじゃあ始めよう」

あれから様々な話題が出た

お父さんの陣営のコカビエルが現れこの街で暴れたが私に殺された事や

昨日のエクスカリバー事件のバルパーについて

その後、何故か塔城小猫が黒歌を連れてきてサーゼクス達に黒歌の過去の真実を語り、見事黒歌さんははぐれ悪魔でなくなつた

そして今、オカ研のアーシアとゼノヴィアが何故追放されたのかで今、ミカエルさんが二人に謝罪していた

すると、お父さんが此方へと目を向けた後に口を開いた

「そいやミカエル、お前ら『鮮血の妖精』<sup>鮮血の妖精</sup> つて奴を指名手配してんのだよな」

『ブラッドフェアリー?』

その場にいた天使長のミカエルや、オカ研メンバーは頭に?を作るが一部の物は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべる

「何を急に、数々の戦争に入しては沢山の人や天使を殺したのです、指名手配するのは当然でしょう」

そう言つて当然のような表情を作るミカエルさん、私は少し悲しかつた

分かつていたけど私が頑張つて皆を助けようと戦つたことがこのように伝えられていることが、凄く悲しかつた

私は、……

「へえ、なる程なあ…………」

「アザゼル、一体何故今その話を振るのですか？」

「実はお前が指名手配した鮮血の妖精、連れてきてるんだわ」

「なっ!?」

そう言うとミカエルや他の悪魔やオカ研の皆がアザゼルの事を睨み付ける

「どういうつもりですかアザゼル！あのような者をここに連れてきているとは！」  
「そうだよ！ここは話し合いの場所だよ！」

セラフオルーさんとミカエルさんがお父さんに聞こうとしたとき、お父さんは私の方を見る

「合図だと思い、私はお兄ちゃんと繋いでいた手を放してお父さんの隣に向かう  
外套、脱いでくれ」

「分かつたわ」

そう言われて、外套の投影魔術を解除すると外套がガラスのように割れて粉々になり消える

そして私はワンピースを着た状態に戻る

すると、その場にいたサーゼクスさんミカエルさんセラフオルーさん、黒歌さんが目を見開いた

「アザゼル、その子は!?」

「つ!? その子は、二天龍を倒した」

「嘘だよね…………だつてあの時に死んじゃつたはずじゃ!!」

「少し前にこいつが自殺しようとしてたのを止めて拾つたんだよ。」

お父さんがそう言つた瞬間、その場の空気が重くなる

「なつ!？」

「自殺つて……」

「どういう事、自殺なんて。ねえクロエちゃん?」

「そういや！ なんで自殺なんかしようとしたにや！」

朱璃さんと黒歌さんがそう言つて詰め寄つてくる詰め寄つてくる  
思わず後ずさつてしまふと、お兄ちゃんが私の前に出る

「落ち着け、そして今はアザゼルの話を聞け」

「ナイスだぜヴァーリ。それでこいつが自殺しようとしてた時なんだけどよ、実はなその時の声を途中からだが録音してたんだよ、お前らにはそれを聞いて欲しい」

え？ なによそれ、そんなの聞いてない

そう言つてお父さんが懐から何かを取り出し再生する

【貴方に分かるの！？私の気持ちが、必死に戦つて、殺して！救えたと思えた存在に罵倒された上に人殺しの犯罪者として認識された私の気持ちが！】

『？』

録音された機材から私が恐らくは一番追い詰められていたときの声が聞こえた

【それに私には家がない！帰る場所もない！もう…………私はこの世界に居場所がない】

悲しく、訴えるようなそんな私の声が

【私は死ぬべきなの、皆を救えなかつた私は生きる資格なんて…………無いんだから！ねえ離してよ！お願ひ、だから…………死なせて】

その後、何かが倒れる音がしてその再生は止まつた

部屋のほとんどの人が信じられないような物を見る目で私を見てくる

そして私と関わりがある黒歌さんや朱乃ちゃん、朱璃さん

そして何故かオカルトのアーシアさんとセラフオルーさんが泣いていた  
そしてミカエルさんが、私の方へと近付き頭を下げる

「すまない！あの時の君とは知らず！」

そう言つて必死な様子で頭を下げるミカエルさん

「大丈夫よ。私には、居場所が出来たから。出来れば指名手配を取り消してくれれば嬉しいかな」

「ああ！もちろんすぐに手配する！」

そう言つてミカエルさんは元の席に戻る

「そして、なんで今俺がこいつを連れてきたかには、もう一つ理由がある」

そう言うと、皆がお父さんの方を見る。正確には私とお父さんを

「もう一つ？」

「こいつは昨日のエクスカリバー事件で、オカルト研究同好会と戦闘になつたことがさつき話された訳だが、こいつはオカルト研究同好会のメンバーと戦いになつたんだよな？」

そう言うとオカルト研究同好会の全員が頷く

「そしてサー・ゼクス、俺らはこいつに二天龍を討伐して貰った」

その言葉に再び皆が驚きの声をあげる

「う、うん」

「あ、あの！私も、昔に助けて貰つたことがあるにや！」

「僕もです！」

そう言つて木場裕斗さんと黒歌さんが手を上げる

「そこで謎なんだが、こいつは人間だ。なのに何故生きてるか、だ。俺やサーゼクス、セラファルーにミカエルはこいつが、クロエが二天龍を討伐して光になつて消えたのは覚えているか？」

その言葉に、サーゼクスさん達が頷く

「そしてグレモリーのお前と黒歌は？」

「僕の時も、そんな風に消えました」

「同じく、にや」

「つまり、こいつはそれぞれの時代に存在していた。当時のクロエは俺らが知ってる姿だとそこまで生きること事態が難しいと言える。」

「確かに、いかに神器持ちの人間でもそこまで生きることは不可能だ」

「うん、ならなんでその子は生きてるの？」

「そして次に俺が出るのは『アラヤ』という単語だ。こいつがエクスカリバーの事件に介入する前、こいつはこう言つたんだ『アラヤの命令を受諾』ってな」

すると朱乃さんの肩がピクリと動いた

恐らくは私がアラヤに操られて暴走する前の事を思い出しだろう

「アラヤ？何だいそれは？ミカエルは？」

「私も聞いたことがない」

みんなにアラヤの事を話さないと

覚悟、決めないとね

「こいつは前にアラヤの命令と言つてた。つまりはこいつに命令している存在がいるってことだ」

お父さんがそう言うと、私の方を向く

「クロエ、話してくれないか。お前が言つていたアラヤって存在を」

そう言うお父さんに私は頷き、部屋を見回す

「話の前に自己紹介を、私はクロエ・フォン・アインツベルン。アザゼルさんの娘、になつた人間で抑止の守護者みたいなものよ。」

そう言つてから、私は一度深呼吸して心臓を落ち着かせる

「『アラヤ』の前にまず抑止力について説明をするわね。『抑止力』、別名『カウンターガーディアン』は世界において存在する、破滅の要因を排除して今の状態を存続させようとする見えない力事を言うの」

「見えない力、か」

兵藤一誠やその場のほとんどがその言葉に頭を傾ける  
 「ええ、抑止力はこの世界に生きる私達人間や悪魔、墮天使や天使の持つ『死にたくない』『平和でいたい』という願い、そしてこの地球と言う星の『死にたくない』『長生きしたい』『生きたい』と言う本能、そして靈長という群体の誰もが持つ『自分達の世を存続させたいといふ願望』が収束し、カタチになつたもの。言うなら世界の無意識が作りだした最終的な安全装置よ」

そう言つてから、私はホワイトボードとペンを投影して地球と書いた丸の他に二つの円を書く

「そしてこの抑止力には二種類あるの。一つ目は人類の持つ破滅回避の祈り „アラヤ“、<sup>地球</sup>星が願う生命延長の祈りである „ガイア“」

そう言つて何も書かれていない円の片方にアラヤ、もう片方にガイアと書く

「アラヤとガイア、聞いたことがねえな」「そのその二つにはどんな違いがあるんだい？」

「„アラヤ“は人類世界を存続させるためならば星を滅ぼすことも厭わず、逆に „ガイア“は星の生存を存続させるためならば人類を滅ぼすことも厭わない。でもそれはあくまでも究極的に言えばの話ね」

「なるほど、最終的にどちらもこの星と人類を護ることに繋がる訳か」

「待てよ、それじゃあクロエがアラヤから指示を受けてるってのはどういう事だ？」

「それも説明するわ。そうね、もしこの世界がとある人物に壊されようとしているとすると。その時に抑止力は、世界の破滅を察知してその原因を消そうするの。でも抑止力は動くことは出来ない、その代わりにそれを止めようとする人、例えばお父さんがそれを止めようと動いているとしたら、抑止力はそれを後押しする形で発動するの」「なるほどな、もしかして過去の英雄とかつて呼ばれてる奴らは」

「ええ、知らずの内に抑止力からの後押しを受けその原因を消した人が目に止まりその様に言われたんじゃ無いかしら？」

「そーなんだ……」

「でも、クロエはアラヤの命令を受けてるんだよな？だとしたら可笑しくないか？抑止力は止めようと動く奴を後押しするんだろう？」

「お父さんがそう思うのは当然よ。さつき言つたのとは別に抑止の代弁者として、守護者を遣わせたりするの」

「そう言つて私はホワイトボードに守護者、代弁者と書く

「抑止の守護者、『アラヤ』と契約し死後の自分をアラヤに売り渡した元人間よ」「なつ！」

「“人類の自滅”が起ころうとするとその場に現れて、その場にいる全ての人間を殺戮し尽くすことで全人類の破滅という結果を回避させる。それが抑止の守護者よ」「つ！」

「じゃあ、貴女が数々の戦場で戦っていたのは…………」

「クロエちゃんは、その…………辛くなかったの？」

「辛かつたわ。アラヤの指示に従つて人を救おうと必死に戦つて殺して、それでも『お前なら救えただろ』って責められる。いつそのこと死んだ方が楽だと思うほどにはね。でも、今は死のうと考えてないわ。…………誰よりも戦つて、殺して…………そして誰よりも戦い抜いて救えるだけ救う、そう決めたから」

そう言つて私は説明を再開する

「そして私があの大きな龍との戦いや戦争や紛争に跳ばされたのも、エクスカリバーの事件に介入したのもアラヤのやつたことよ」

「じゃあクロエちゃんが私達を襲つたのは」

「アラヤの命令を拒もうとしたら、体を乗つ取られたのよ」

「つてことは、クロエお前はアラヤと契約を…………」

「大丈夫だよお父さん、私はまだ死んでないし契約もしていない」

そう言うと、お父さんは何処か安心した様子で息を吐いた

「私がアラヤに指示されているのは、多分だけど私がこの力を使っているからだと思う」

そう言つて私は赤い外套にプロテクターを身に付けた姿に変える

「この姿と力、投影魔術はアラヤと契約し、9を救うために1を切り捨て続けて来たある男の、英雄の力。私はそれを使つてるからアラヤに指示されている……のだと思う」「思うつてことは、ちゃんと分かつてないのか？」

「正直、私も何でアラヤに指示されてるのかは分からぬの。気が付いたらこの力を持つつていてアラヤに指示されていたから」

「なるほどな。ありがとなクロエ」

そう言われてアザゼルお父さんの後ろに戻ろうとすると、突如サー・ゼクスさんが立ち上がり此方へと近付いてくる

他にも朱乃ちゃん達や木場くん、黒歌さんも此方へと来て口を開いた

「クロエちゃん、君があの時二天龍を討伐してくれたお陰で沢山の悪魔達が助かつた。本当にありがとう」

サー・ゼクスさんがそう言つて頭をさげてきた

「あ、頭を上げてください！魔王様に頭を下げられるなんて恐れ多いです！」

「いや、そんなことない。君があのときに二天龍を討伐してくれたから今の僕たちがいるんだからね」

「は、はい」

「そう言つてサーゼクスさんが元の席に戻ると姫島さん達が口を開いた  
 「クロエちゃん、ずっと伝えたかったの。あの時に『お母さんを、救つてくれてありがとう』

「クロエちゃん、あの時は私と娘を助けてくれてありがとう、お陰で楽しく過ごせてる  
 わ」

「朱璃さん、朱乃ちゃん」

何でだろう、凄く胸の奥が暖かい

「私からも言わせて欲しい、朱璃や朱乃を救つてくれてありがとう。お陰で私は家族を  
 失わずに住んだ」

「バラキエルさんまで……」

そう言つて姫島さん達が戻ると次は塔城小猫さんと黒歌さんが前に出る

「貴女があの時に助けてくれたお陰で無事に生きて白音と再会することができたにや。  
 本当に感謝してるにや」

「姉様を助けてくださつてありがとうございました。貴女のお掛けでもう一度姉様と出  
 会うことが出来ました」

そう言うと二人は仲良さそうに元に戻ると木場くんが近付いてくる

「クロエちゃん、君のお陰で僕は生きることが出来た。本当にありがとう」

「で、でも私が研究所に襲撃しなければ他の皆が…………」

頭のなかに木場くんらしき彼を救うために研究所を襲撃したが毒ガスが散布され木場くん以外が死んでしまった光景が甦る

「でも、君があんな状態なのに僕らを救うために動いてくれた。例え抑止力に指示されたからだとしても、僕は君に言うことは変わらない。『助けてくれて、ありがとう』」

そう言われて私は思わず座り込んで涙を流し、自分の両手を見る

「あ、ああ…………私、救えてなかつたと思つてた。…………こんな血に染まつてしまつた私の手でも、こんなにも沢山の人を」

そう言つて私に感謝の言葉を伝えてくれた人達を見る

お父さん、サー・ゼクスさん

朱乃ちゃん、朱璃さん、バラキエルさん

木場くん、黒歌さん、小猫さん

私に救われたと言う人達が沢山いた

「わたし、ずっと勘違いしてた。私は何一つ救えない、死ぬべきだつて思つてて苦しかつた…………でも」

今まで付けていた重荷が取れていく

私は頬を伝つて落ちてくる涙をふかず泣きながら、笑つた  
「こんな私でも、救えてたんだ……」

身体中が何か温かい者に包まれるようなそんな風に感じる  
私、頑張つて……生きてて良かつた

そう思つた次の瞬間

その場の全員が、止まつた

# 剣の丘

クロエ side

目の前の人達の数人が突如としてまるで時の止まつたかのように固まつた  
そして、それと同時に外から何かが爆発するかのような音が響き渡る  
始まつたのだ、禍の団によるテロが

「……………一体何が起こつたんですか!?」

「テロだよ」

何が起きたのか分からぬ様子の兵藤一誠にお父さんがそう答える  
私は窓側に行つて外の様子を見る

悪魔と魔法使いらしき人物達が校舎へと攻撃してきていた

「さて、さつきの感覚が起きたつて事はギャスパーが!?」

「恐らくだがあのハーフヴァンパイアの神器を強制的に禁手の状態にしたんだろうな」  
「そんな、テロにギャスパーを利用されるなんて！」

お父さんがギャスパーの神器に感心するなか、リアス・グレモリーさんはテロにギャ

スパーが利用されたことに怒りを表している

「クロエ、敵は?」

「かなりいるわ。悪魔に魔法使いが沢山、多分だけど簡単には逃がしてくれなさそうね」

「俺らを仕留めるためにはどれだけの犠牲を払つても構わねえって事か」

話しているリアス・グレモリーさんがサーゼクスさんへと歩み寄る

「お兄様、私のギヤスパーの奪還に向かわせてください」

「リアスならそう言うと思つていたよ。でも道中の魔術師はどうするんだい?」

「部室には未使用のルークの駒が一つ保管されています。それを使えば」

「なるほど、キヤスリングか」

キヤスリング、確かチエスのルールで自身の王の駒と戦車の駒を交換することが出来

る技

やつぱり原作の通りに進んでる

「確かに、それなら相手の虚をつくことが出来る。でも一人で向かわせる訳には危険だ、  
グレイフィア、僕の魔力で何人か転移させることは出来るかな?」

「恐らく一人は可能かと」

「一人か、それなら誰を」

そう言つて考える仕草をするサーゼクスさんに向かつて兵藤一誠が口を開いた

「なら、俺が行きます！」

「なるほど、赤龍帝の君ならリアスの事を任せられる。リアスの事を頼んだよ、一誠くん」

「はい！」

「おい赤龍帝、こいつを持つてけ！」

そう言つてお父さんが腕輪を渡す

「こいつを使えば神器がある程度制御出来る、あのハーフヴァンパイアに着けろ」

そう言つてリアスグレモリーケーと兵藤一誠が魔方陣に立つ

「ヴァーリ、外にいるアイツラを相手して来い。白龍皇のお前が行けばある程度は注意を引くことが出来るだろ」

そしてお父さんがお兄ちゃんの方を向いてそう言う

「いつそのこと吸血鬼ごと旧校舎を吹き飛ばした方が早いと思うが…………」

そう言うとリアスグレモリーケーと兵藤一誠さんがお兄ちゃんを睨み付ける

「おいヴァーリ、和平結ぶつて時にそんな事を言うのは辞めろ」「…………了解した」

「お父さん、私も…………」

「いや、俺だけで十分だ。禁手化」

バランス・ブレイク

# 『Vanishing Dragon Balance Breaker!!』

するとお兄ちゃんが禁手化し、外に向かってしまった  
お兄ちゃんはこの後にアザゼルを攻撃するはずだから、私がヴァーリの近くに入れれば  
それを阻止できると思ったがそれを止められてしまった

少なくともまだお兄ちゃんは味方、この窓からなら少しぐらい援護出来る

「トレー・ス・オ・ン  
投影、開始」

私は左手に黒い洋弓を投影し、窓から外の魔術師や墮天使へと狙いを定める  
「クロエすまねえが、ヴァーリの援護を頼めるか? あいつの事なら楽勝だと思うが念の  
ためな」

「うん、分かつてる」

そう言つて右手に無銘の剣を投影し、弓に番える

「サーゼクス様から聞いていましたが、本当に剣を弓で射るなんて……」

グレイフィアさんがそう呟き、珍しそうに此方を見ている

「…………そこ」

私が剣を放つと、高速で剣が射出されヴァーリお兄ちゃんの背後にいた魔術師を貫いた

お兄ちゃんは一瞬驚いたものの、すぐに私を見つけたのか少し此方を見るとすぐに戦

闘に戻り近くの敵を殲滅し始める

私は離れた場所から魔法でお兄ちゃんの方を狙う奴らへと弓を構え、右手に螺旋状となつた剣を持ち弓に番える

「—— I a m t h e b o n e o f m y s w o r d 、  
放されたカラドボルグ I I は真っ直ぐに狙っていた者達の手前へと突き刺さる  
〔壊れた幻想〕

そして刺さったカラドボルグ I I の内包された魔力が爆発し魔術師達を怯ませる、そのあとを高速で接近したヴァーリお兄ちゃんが殴り飛ばす

「—— I a m t h e b o n e o f m y s w o r d 」

また、別の悪魔へと弓を構え赤い剣を三つ投影し一気に番える  
〔射貫け、赤原猶大〕

相手を追尾する三つのフルンディングはそれぞれの方向へと向かい悪魔と魔法使いを射貫く

でもチマチマと射つても減らせる数は少ない、それにお父さんや姫島さん達を傷つけさせるわけには行かない

〔同調、開始！〕

全身に強化魔術を使い、窓から飛び降りる

そして着地した瞬間に干将莫邪を投影し走り出す

悪魔や魔術師の群がつているお兄ちゃんの所へと走りながら詠唱を始める

「トレス・オン・投影開始。憑依経験、共感終了」

両手の干将莫邪で悪魔や魔法使いを通りすぎると度に身を捻りながら攻撃を避けて方や横腹を斬り着ける

鮮血が宙を舞い私の服、肌に付着するが気にせずに駆ける

「工程完了、全投影、待機」

そして目の前にいる沢山の敵へと剣を向け私は最後の詠唱を紡ぐ

「停止解凍、ソードバレル・フルオーブン全投影連続層写!!」

私の周囲に大量に無名の剣が投影され、私の持つ剣の向けた方向へと射出される  
射出された剣は敵へと突き刺さり、複数を殺すことが出来たが更に魔術師や悪魔が現れる

「チツ！きりがないわね！」

そう言つて干将莫邪を投擲し、新たに投影するのは赤い朱槍

かつてイルランドの貴公子、クー・フーリンの使つていたとされる槍  
刺し穿つ死棘の槍を投影し、もう片方の手に洋弓を投影し弓に番える  
「同調開始、I am the bone of my sword」

弓を引く手を更に強化し、狙いを着ける

敵が数人重なつて見える魔法使いに狙いを定める

「同調、開始」

赤い朱槍の形状が剣ぐらいの大きさへと変わる

「トレイスオフ、トレイス、フラクタル  
全程完了、投影、重装」

強化された腕でゲイ・ボルグを構える

「真名解放、連続で貫け飛び<sup>ゲイ</sup>穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ボ</sup>棘<sup>ル</sup>の槍！」

放されたゲイ・ボルクは赤い閃光となり連続で魔術師、悪魔の心臓を貫いていく  
そう呟き、再び両手に干将莫邪を投影して近くの悪魔を斬り着ける

そうしていると、サー・ゼクスさん達との話し合いが終わつたのか

アザゼルお父さんも光の槍を持つて女人の人と戦つていた

更に言えば救出に成功したのかギャスパーを連れた兵藤一誠達が見える

私はお父さん真下に転移して干将莫邪を敵の悪魔へと投擲する

「クッ！邪魔をして！」

そう言つて更に干将莫邪を投影し、投擲する

私は此方へと槍を構える褐色の悪魔に干将莫邪を構える

お兄ちゃん、いやヴァーリがアザゼルの方へと体勢を変えて高速で飛びはじめ、蹴りを繰り出すような体勢を作る

「間に合つて！」

3、私はお父さんの空中のお父さんの隣に瞬間移動する

2、お父さんにタックルする形でその場から離れさせ地面へと、逆手を持つた干将莫邪の側面をクロスするように重ねる

「クロエ?! いきなり何すん——」

1、干将莫邪を強化し目の前に染まつたヴァーリの足へと干将莫邪を構える

0、ヴァーリの蹴りに干将莫邪が耐えきれずに壊れ私の胸が蹴りけられる

声にならない声が吐き出され、地面に叩き付けられる

右肩から血が流れているが、どうにか動かせる

大丈夫。私はまだ、戦える

そう思い、立ち上がつたが喉を何かが遡つてくる感覚

「ゴフッ!」

血を吐き出した、まだ

内臓はやられてないのになんで

「クロエツー……で反旗かよヴァーリ…………」



誰を？

私の家族に、居場所になつてくれた人  
それを見て笑う褐色にメガネを書けた女性

——さない

——許さない

頭のなかに有るのは怒りの感情のみ

お父さんが近くに落ちてきてどうにか着地する

「アハハ！無様ねえ墮天使総督様？」

「ハツ！右手なんぞ無くなたつて……ツ！」

この世界に生まれ落ち、初めて向ける明確な殺意

私は怒る心のまま今もなお血の流続けている左手を掴み構える

「——I a m <sub>体</sub><sup>は</sup> t h e <sub>剣</sub><sup>で</sup> b o n e <sub>出</sub><sup>來</sup><sub>て</sub><sup>る。</sup> o f <sub>ま</sub><sup>い</sup> m y s w o r d.」

それは、世界を作り替える魔術

9を救い、1を切り捨て続けた者の生涯を綴つた

私にとつての英雄の詩

「S t e e l <sub>血</sub><sup>潮</sup> i s <sub>は</sub><sup>て</sup> m y b o d y, a n d f i r e <sub>心</sub><sup>は</sup><sub>は</sub><sup>て</sup> i s <sub>は</sub><sup>て</sup> m y b l o o d.」

体の魔術回路が叫びを上げる

I  
幾  
h  
a  
v  
e  
c  
r  
e  
a  
t  
e  
d  
o  
v  
e  
r  
a  
t  
h  
o  
u  
s  
a  
n  
d  
b  
l  
a  
d  
e  
s.  
—不敗—

微かに残つた理性が止めろと訴えるが止まらない  
止めること等、出来るはずもない

その時だ体に異常が起ころる

怪我した左肩の傷口から剣が突きだし、自身の鮮血が宙に舞う

「おいクロエ！お前、その肩…………このままじやお前が！」

だが詠唱を止めず

Y  
e  
t,  
故  
t  
h  
o  
s  
e  
h  
a  
n  
d  
s  
w  
i  
l  
l  
n  
e  
v  
e  
r  
h  
o  
l  
d  
h  
a  
n  
y  
t  
h  
i  
n  
g.  
—

怒りにとりつかれた私はただその言葉を紡ぐ  
そ  
の  
体  
は  
は  
と  
U  
N  
L  
I  
M  
I  
T  
E  
D  
出  
B  
L  
A  
D  
E  
W  
O  
R  
K  
S.  
—

瞬間、炎が世界を焼き尽くした

# 無限の剣製

クロエ side

炎が世界を燃やし尽くし、世界を埋め尽くす

先程まで叫びを上げていた魔術回路が落ち着いている  
そして先程までの怒り狂っていた思考も落ち着き

目の前に広がるのは先程までの夜とは打って変わり夕方のような明るさの空  
どこまでも続く荒野に刺さっている無数の剣

無名の剣、刀や聖剣、魔剣に妖刀

それらがまるで墓標のように突き立てられ、剣の丘が出来上がりつていた  
「いつたい何が起こったの!?」

まるで何が起こったのか分からぬ様子の敵

カテレア・レイヴィアタン

私はゆっくりと荒野の無銘の剣へと歩く

宙には火の粉が舞い、空に浮かぶ大きな歯車が大きな音を立て回る

「固有結界。この世界においてあの英雄と同様に9を救い1を切り捨て続けた先に得たモノ。この世界は全ての剣を内包し、世界は剣で出来ていて。」

無銘の剣を引き抜き、剣の先をカテレア・レビイアタンへと向ける

「貴方が挑むのは剣の極地…………逃れることなど無いと思え」

「ハッ！ 固有結界だかなんだか知らないけど、あんたなんか直ぐに殺して上げるわ」

そう言つて光の槍を形成するカテレア・レビイアタンへに対して

私は持つていた無銘の剣を宙へと向ける

するとと近くに刺さった無数の剣を操作し宙へと浮かび上がる

「言つたはずよ、逃れることなど無いと思えつて！」

宙へと向けていた無銘の剣をカテレア・レビイアタンへと向ける

すると宙に浮かぶ無数の剣がカテレア・レビイアタンへも射出されていく  
カテレア・レビイアタンはそれを光の槍を使い弾くが、背後から放たれた剣によりそ  
の二翼の翼が切り落とされる

「あがっ!? よくも!!」

私の左手は肩が剣になつてしまつている為に少し動かしにくい

〔トレス・オン 投影開始〕

私の手には馴染んだ感覚が表れる

干将莫邪を投影した私は宙に浮かぶ剣を射出しながらカテレア・レビイアタンへと接近し右手で干将を振り下ろし、左手で莫邪を横に振るう  
だが、カテレア・レビイアタンはそれを光の槍で弾いて逆に斬り着けてこようとして、横風に振るわれる光の槍を屈んで避け再び投影した干将莫邪を逆手に持ち上に斬り上げる

「なッ!?

カテレア・レビイアタンの両肩を下から上に軽く切り上げ、先程までいた場所に転移する

そして再び干将莫邪を投影し背後へと瞬間移動して斬り着け、転移して斬り着けを繰り返す

鮮血が舞う

腕を、体を、足を次々と斬りつけ続ける

「がツアアアアアアアアアアアアアアアアア?!?」

体から血を流し座り込むカテレアに対し私は転移してカテレアの目の前に大量に無銘の剣を宙に浮かばせる

「ヒツ！ば、化け物！？」

「……………」

カテレアは此方をまるで化け物をみたかのような目で見てくる  
宙に浮く剣を一斉に射出する

「あ、ああ……………」

そして突き刺さる寸前で止めた

「貴方なんて、殺す価値もないわ」

固有結界を解除し元の世界に戻る

大きな歯車や剣の丘は消え、元の駒王町の学園に戻る  
体から大量の魔力が消費されたからか、体が怠い

まるで体に重りを背負っているみたい

周りを見渡すと、兵藤一誠が気絶しているのを見るにヴァーリ・ルシファーは回収さ  
れたのだろう

他にも全員軽傷ですんでいるようだつた

そこに私と戦意喪失した様子のカテレアが現れたのだからみんな驚愕していた

バラキエルさんや朱乃ちゃん、木場くん達は安堵した様子で此方を見ていた

そしてアザゼルお父さんだけは切り落とされた手が繋がつており私は安堵した

「お父さん、腕が……」

「まあ、なんだ。研究用フェニックスの涙が一つ残つててな。それでどうにか治つたん  
だ。お前こそ、その左肩」

私の剣となつてしまつた左手肩を見つめている

「無理に魔術を使おうとしたから、魔術回路が暴走したの。もう戻ることはないわ」  
「ツ！ そうか…………」

「でも、みんな無事で良かった」

どうにか、みんなを死なせずにすんだ  
もう、大丈夫なんだ

その時だつた

「ガフッ!?」

後から血を吐く音と同時に聞きなれてしまつた剣が肉を裂く音が聞こえ、急いで振り返る

するとカテレアレビアタンの胸から黒い剣が生えていた

いや突き刺されていた

そして、その剣を私は知つてゐる

「あゝあ、せつかく苦しまないよう殺して上げようと思つたのに。汚いなあ……消え  
てよ」

かのブリテンの王の i f の姿、聖杯の呪いに侵され非道に徹しきつた側面の持つてい  
た聖剣

エクスカリバー・モルガン

「あがつ!?.たす、け……………」

その声と共に黒い剣の等身から黒い極光が放たれカテレアは闇に飲み込まれ、消

えた

「ダメだよクロ、敵はちゃんと殺さなきや」

黒い極光がやみ、その姿が現れる

恐らくはエクスカリバー・モルガンを使つたであろう人物が

嘘だ、この世界に彼女は…………

現れたのは綺麗な銀髪に魔法少女を彷彿とする服装、そして先程カテレア・レビイアタンを葬つた聖剣を手に持つた琥珀色の瞳の少女は真っ白なその肌を返り血で染めていた

この世界に存在するはずがないのに、なんで

「やつと見付けたよ、クロ」

そこには約束された勝利の剣を持ち、まるで探し物が見つかったかのような笑顔を向ける少女

「イリ、ヤ?」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンが目の前に佇んでいた

# 真実

クロエ side

「イリ、ヤ?」

私は目の前に佇む少女、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンに驚きを隠せなかつた

そう、だつて目の前の存在はこの世界

ハイスクールD×Dの世界に存在するわけがない

あり得るとするならば、私と同じ転生者かカレイドステッキで別の次元から魔法で跳んできたのか

だが、目の前の少女はカレイドステッキらしきものを一切持っていない

「クロエの知り合いか?.....」

「それに、あの剣は.....聖剣!」

「クロエちゃんと.....似てる?」

目の前の少女に対し、後のお父さん達が困惑の声を上げる

「イリヤ、お待たせ」

すると更にもう一人少女が現れる

その少女の姿は黒髪に、私と同じ赤い外套にプロテクターを身に付けていた  
「ミ、ミユ？」

なんで、なんで美遊までこのハイスクールD×Dの世界に

それに、なんで私と同じ『アーチャー』のクラスカードをインクルードしているの？

頭の中が真っ白になる

「やつと見付けたよ。ねえ、何かいつたら？ ク～ロ？」

「な、んで……なんでこの世界にイリヤとミユがいるの！」

私がそう言うと、イリヤとミユは何で知らないのとばかりに頭を傾げ、そして面白そうに笑つた

「へえ、覚えてないんだー。」

なんで？

なんで私がこの二人と接点があるの？

私はこの世界に転生したときにはもうクロエ・フォン・アインツベルンとして生まれ直して…………あれ？

この世界に生まれたなら、何で私は身分証明書や親が居ないの？

そもそも、神様が転生したとしたら私はどうして赤ちゃんからでは無く最初からこの体だつたの？

神様が私の生前の体を作り替えた？

いや、神様はそんな事を言つてなかつた  
頭が、ズキズキする

思わず頭を抑えて膝を着いてしまう  
頭の中にノイズが走る

わたしは…………ぼくは何かを、忘れている？

『僕が、転生？』

『そうだ。お前の転生特典はクロエ・フォン・アインツベルンの能力、容姿だ。精々俺を  
楽しませてくれよ？』

いや、違う

私はこの容姿も、こんな力も望んでない

「おい！クロエ大丈夫か！？」

そうだ、そもそも私の特典は既に決定されたような物だつた

お父さんがそう叫ぶなか、イリヤは笑いながら近付いて口を開いた

「アハハ、ねえクロ？最近、なんか変な事が無かつた？」

「な、何の事よ……」

頭のなかに浮かぶのはここ最近で私の身に起こつていた原因不明の吐血妙な体の重さ、怠さ

「例えは、突然血を吐いたり、とか？」  
「ツ！」

「図星、だね」

ミユが悪戯が成功した子供のように笑いながらそう言うと、イリヤはまるで謎解きの答えを教えようとする子供のような笑みを浮かべる

「なんですか、教えて上げよっか？」

何でだろうか、この先を聞いてはいけない

直感がそう叫んでいるが、私は耳を塞ぐ余裕なんて無かつた

「クロはね…………クロエ・フォン・アインツベルンって言う架空のキャラクターを作られたクローンだからだよ」

頭を金属バットで殴られたような衝撃を受ける

「クロエちゃんが、クローン!?」

「架空のキャラクター？ どういう事だよそりや…………」

「あの子は一体、何者にや？ クロエの事をクローンって」

目の前の少女はなんと言つた？

私が、人間ではなく…………クローン？

嘘だ、私は人間に転生したはず…………

それに、何故イリヤは自信の事を架空のキャラクターだと知つてゐるの！？

「そして私とイリヤも同じ。私はクローン第2製作体S型2017『Sakatuki Miyuu』

「私はクローン第1製作体E型2025『Iillya Feel von Einzbern』

「私達はある男に作られたクローンの最高傑作。でも、クロは違う。クロの正式名称は、  
クローン 第2製作体E型257-II-K『Chloe von Einzbern』  
まさか、この世界には私達を知る人物が

転生者がわたしの他いるの！？

「私達を作つたのは天使の男。ソイツは私達をこの世界に誕生させようとした、たくさ  
んの人を誘拐しては殺し、細胞やDNA、内蔵を入手し私とミュは作り出された。」

「そしてクロは作られる際に元のキャラクターに似せようと天使の男が入手した英靈工  
ミヤと思われる人物の血痕……DNAが組み込まれ完成間近と言つた時、天使の男は抑  
止力により死にクロは不完全の状態で放置され、私達は逃げ出した」

私の体に、英靈工ミヤの血が……だから私はアラヤに守護者として動かさせられた  
だから最初からアラヤとの繋がりがあった  
でも、何故私が、吐血をするかの理由にはならない

「そして、作られたクロは寿命に関する処置が終わってない、製作から二年で死ぬ体となつたまま、研究所から突如として消えた」

「え？」

頭の中で自信の吐血の原因に一つの予想が浮かびあがる  
「まさ、か…………」

「そう、そのまさか。クロが作られたのは二年前の明日。つまり、明日でクロは死んじやうつてこと！」

まるで、時が止まつたかのような錯覚がした  
イリヤの言葉が私には理解できなかつた  
いや、理解しているが理解したくなかった  
「うそ、だろ…………クロ工が、明日死ぬだと」

私は、死ぬ

なんで、私は何のために此処まで生きたの?  
せつかく、居場所が出来て

救えた人がいたのに

何のために私は毎日を必死に生き抜いてきた？

いつかは、お腹いっぱいご飯が食べられて

温かいお家で、優しい家族と暮らすため

せつかく、叶えられたと思ったのに

そう思い膝を着いたまま二人を見る

い」

「そして、私達はクロ……貴方を殺しに来た。私達とは違い、本物の力を得た貴方が憎意が宿つていた

「私達のこの力は、あくまでもその男の産み出した偽物」

「エクスカリバー・モルガンとアーチャーのクラスクードが、偽物？」

「そしてもう一つ、ここのお偉いさん達に言わせて貰うけど。私達はね、この世界が憎い。自ら望んで生まれたんじゃない、作ってくれなんて望んでない。今でも聞こえるの、あの子達の声が」

そう言つてイリヤが持つエクスカリバー・モルガンを握る手からは血が流れていた  
『死にたくない』『なんで私が』って。私とイリヤが、どれだけの人の死の上に生まれた

のか。天使が人外が、そんな人外を産み出したこの世界が憎い』

『だから、私達は今からこの世界を壊す』

イリヤやミユが私を殺し、この世界を壊す？

そしたら、お父さんや私の救つてきた人達もみんな死んじやう  
頭によぎるのは、今までの記憶

幾度も戦場へと駆り出され、9を救うために1を切り捨て続ける  
救えたと思えた存在から言われ続けてきた罵倒された  
大事なナニカを救おうとしても、この手から何かがこぼれ落ちて  
また、私は罵倒され独りになる

そんな世界はとても醜くて

『お前なら守れただろ！』

『何故助けなかつた！』

『アイツこそが悪魔だ！滅殺すべき悪だ！』

苦しくて

『おねえちゃん！おかあさんをたすけてくれて、ありがとう！』

『ありがとう！君のお陰でアイツが死なずにすんだ！』

『貴女があの時に助けてくれたお陰で無事に生きて白音と再会することができたにや。

本当に感謝してゐるにや』

『姉様を助けてくださつてありがとうございました』

『あの時に、お母さんを、救つてくれてありがとうございます』

『あの時二天龍を討伐してくれたお陰で沢山の悪魔達が助かつた。本当にありがとうございます』

『朱璃や朱乃を救つてくれてありがとうございます。お陰で私は家族を失わずに住んだ』

でも、私にありがとうつて言つてくれた人がいた

この世界は醜いだけじやなかつた

寒い日や暑い日、空腹に耐えながらも毎日を必死に生きてきた

『生きるがいいマスター。必ず、お前の帰りを待つてゐる存在がいる』

『居場所がないのなら俺がなつてやるよ。俺の居る所がお前の居場所だ』

こんな人殺しの私にも手を差し伸べてくれた人達がいた

「——ない」

だから私はあの時、誓つたんだ

「？」

「どうしたのクロ?」

誰よりも戦つて、殺して戦い抜いて……救えるだけ救う

私に手を差し伸べ、一時を家族として接してくれた人達を守る

だから、今ここにいる人達を取り零さずに救つてみせる

「させない、この世界を……お父さん達、大切な人達を殺させはしないッ！」

そう言つて立ち上がり、両手に干将莫邪を投影する

「私の居場所を壊させはしない、例えそれがイリヤやミユだつたとしても。」

これが、私の最後の戦い

「へえ、いいよ？じゃあ殺すね、行くよミユ」

「うん、絶対に……殺す。手加減なんかしない！」

そう言つてエクスカリバー・モルガンを構えるイリヤと干将莫邪を構えたミユ

両手の干将莫邪を握る手に力を込める

私は一度視線を後ろにいる皆に向ける

泣いている朱乃ちゃんや、悲しそうな顔のバラキエルさんと朱璃さん

ボロボロなのに、剣を握つたままの木場くん

手を繋ぎ此方を見る黒歌さんと小猫さん

そして、お父さん

「お父さん、みんな……行つてきます」

そう言うと直ぐにお父さんの声が帰ってきた

「ああ、必ず……帰つてこいよ！お前の居場所は俺がいる場所なんだからよ!!」

その声に思わず私は頬が緩むが気を引き締め、干将莫邪を構える  
現在の時刻は、11時48分

タイムリミットは  
……  
残り12分。

# 決着／天へと昇る光

クロエ side

今は夜の11時30分を過ぎた頃

この一人に勝つには、短期決戦しかない

「トレイス・オン  
投影、開始」

私は指に挟むように両手に干将莫邪を二つ追加で投影し、イリヤとミュへと投擲し駆け出す

そして干将莫邪が彼女達の目の前に迫った瞬間、壊れた幻想で土煙と爆煙で視界を

奪う  
トレイス・オン  
停止解凍、全投影連続層写!!  
ソードバレル・フルオーブン  
フリーズアウト

そして駆けながら私は宙に剣を投影し射出する

すると向こうで剣のぶつかる音が聞こえたので、恐らくは剣を叩き落としたのだろう

トレイス・オン  
投影開始、全工程投影完了！投影、装填!!  
トリガーオフ

左手に大きな石斧剣を投影し、地面に引きずるようにして駆けながら土煙へと振り抜

く

が、ガキイン！と言ふ音と共に左手に持つた石斧剣に黒い聖剣がぶつけられ叩きおられてしまう

「ツ！」

「フッ！」

そして横からミユが干将莫邪で攻撃してくるのを避け、後へと跳躍しながら洋弓を投影する

「I 我 am 骨 the bone は of my 狂 sword、偽・螺旋剣Ⅱ！」

そしてカラドボルグをつがえて引き絞りミユへと放つ

「トレースオン、カラドボルグ！」

が、ミユの投影したカラドボルグとぶつかり消滅する

「投影の精度は同じ……なら！」

地面に着地した瞬間に私は干将莫邪を投影しミユへと斬りかかる

「これで！」

斬りかかる瞬間に私はミユの背後へと瞬間移動し横凧に干将を振るう

「あぐッ！」

相手が同じ投影精度でも、戦闘経験ならわたしの方が一步先へ行く

次に転移し、イリヤの真横に転移して回し蹴りで蹴り跳ばす

「ぐう!？」

吹き飛ばされるのを見て私はミユへと視線を移す

「行くわよ、ミユ。」

そう咳き、干将莫邪を三つ投影し投擲して駆け出す  
「山を抜き、水を割り」

「つ!?させないっ！」

ミユは此方が何をしようとしているのか感づいたのか持つていた干将莫邪で跳んで  
くる干将莫邪を弾いてしまう

「くっ！」

「今度はこっちの番！」

そう言つてミユは干将莫邪を投擲してくるのを強化した干将莫邪で弾こうと  
「ブローケンファンタズム！」

「まずッ!？」

ミユの投影した干将莫邪が爆発し剣の破片が飛び散る

爆発により高速に飛び散る剣の破片が私の左目を斬り裂いた

「ツ!？」

思わず左目を抑えて後退する

右目で見ると左目を抑えていた手には血が着いていたが、左目は真っ暗なまま左目からは激痛が走るが、戦闘は続行出来る

まだ、私は戦える

「左目が……でもやるしかない。投影開始！」  
トレイス・オン

私は血が目から滴る感覚を無視し干将莫邪を投影しては投擲する  
「<sup>ロールアウト</sup><sup>バレット</sup><sup>クリア</sup><sup>フリースアウト</sup><sup>ソードバレル</sup><sup>フルオーブン</sup>工程完了、全投影 待機、停止解凍、全投影連続層写!!」

更に空中に無名の剣を投影し射出しながら駆ける

「山を抜き、水を割り、なお墜ちることなきその両翼！」

するとミユはさせまいと干将莫邪を叩き落とすが、私は元から鶴翼三連なんて放つつもりはない

「させない！トレース・オン！」

するとミユは向かってくる干将莫邪へと自身の干将莫邪を投擲し壊れた幻想で破壊

し私へと干将莫邪を振り下ろす

トレース・オン  
同調、開始

基本骨子、解明。構成材質、解明。

基本骨子、変更。構造材質、補強。

全行程、完了『トレース オフ』。

——  
トレス  
投影、重装

ミュが振り下ろした干将莫邪が私の強化された干将莫邪にぶつかり、碎ける自身の干将莫邪が碎けたことに驚いたミュはバックステップで下がる私とミュの距離は、干将莫邪がもうひとつぐらいあれば刃が通るぐらい

「干将莫邪、オーバーエッジッ!!」

そう言つて私は片手に持つた干将莫邪の片方をミュへと向ける

干将莫邪の刀身がまるで翼のように広がりそして、ミュの胸を突き刺した

「ガフツ……なん、で……」

突き刺された干将莫邪をミュの血が滴たり腕に着くのを気にせず、彼女の言葉に耳を傾ける

「私、だつて貴方と同じカードの力の筈なのに……」

「その力の元の英靈は別世界で貴方の、遡月美遊の兄の物だつた。私はそれを知つていて、この力の使い方を知つていた」

そう言うと、悲しそうにミュは口を開いた

「私は、この力を知ろうとしなかつた…………只の力だと思つて。やっぱり私は、オリジナルにどれだけ似せようと…………所詮は偽物、なんですね。」

そう言つてミユは片手で自信の胸に突き刺さつた干将莫邪を握る私の手を掴む  
「でも、私は本物になつた貴女を許せない。だから!!」

「ツ!」

見ると、もう片方の手で私の肩を抱くように掴んでいた

「イリヤ、私ごと殺つて!!」

後を見ると、エクスカリバーを袈裟懸けに構えたイリヤが立っていた  
「つ！」

不味い、ミユを相手にしてイリヤの行動に気付けなかつた  
拘束されたせいで身動きが取れない

「わかつた、じやあね。クロ、ミユ。」

そう言つてイリヤが手に持つたエクスカリバー モルガンを振り下ろす  
〔約束された勝利の剣〕

黒い極光が私達へと迫つてくる

私は手に持つた干将莫邪を手放して、ミユの前へと転移する

もう避けられない、どうにか防ぎきるしか無い  
〔I am the bone of my sword〕

私は迫り来る極光へと右手を構える

「熾天覆う七つの円環!!」

目の前に七枚の花びらのような光の盾が展開される

そして、一枚目の盾が貫かれる、二枚三枚と貫いていく

魔力を回す、もう残りの魔力なんて関係ないから残りの四枚の盾へと魔力を注ぐ

「止まれええええええええ!!!」

叫ぶなか、残酷にもまた一枚の盾が破られる

お願ひだ、この世界を壊したくない

守りたいから、お願ひだから

歯を食いしばり、右手に力を込める

そして、ようやく黒い極光が止まつた

「はあ、はあ……止まつた」

ふと後を見ると、干将莫邪が消え地面に倒れているミユ

「どうか、来世は幸せになつて」

私はそう呟いてからエクスカリバー・モルガンを構えたイリヤに駆けながら洋弓を投影して跳躍し、無名の剣を三つ番えて放つ

「フツ！ ヤアッ!!」

するとイリヤはそれをエクスカリバー・モルガンを駆使して弾き跳ばす

私はイリヤの近くに着地しながら両手に干将莫邪を投影して振り下ろす  
「そんなの！」

「ツ!?なら！」  
イリヤの振るうエクスカリバー・モルガンに碎かれてしまう

後へとバックステップで下がり干将莫邪を三つ投擲する  
「じゃま！」

その一言で干将莫邪を叩き壊される、その瞬間  
「壊れた幻想!!」  
ブローケンファンタズム

エクスカリバー・モルガンと干将莫邪がぶつかる瞬間に干将莫邪が爆発し煙幕の代わりになる

「投影開始！」

左手に大きな石斧剣が投影される  
トレイス・オン  
「投影、装填」  
トリガー・オフ

「これで決める、イリヤから此方は見えてない筈！」

「全工程投影完了、是、射殺す百頭!!」  
セツト、ナインライズブレイドワーカス

私は煙幕へと駆け左手に持った石斧剣を振り抜いた

石斧剣の振り抜いた風で爆煙が晴れる、そこにはイリヤの姿がなかつた

「何処!?

私は慌てて回りを見回す、だがイリヤの姿がみえない  
まさか、逃げた?いや、そんな筈は

「油断したね、クロ」

「つ!?

その声が聞こえた瞬間に、私は聞こえてきた空を見ると

恐らくはジャンプして私のナインライブスブレイドワークスを回避したイリヤが此  
方へとエクスカリバー・モルガンを構えて落ちてきていた  
氣付いたころには、直ぐそこまでエクスカリバー・モルガンの切っ先が私の胸、心臓へ  
と迫ってきていた

転移は間に合わない、かといって今から剣を投影は遅すぎる

まだ、終われないのに

守らないと、行けないのに

戦わないと言えないのに、

お父さん、みんな…………ごめんなさい

思わず目を瞑る

その時、イリヤのエクスカリバー・モルガンで何をかを貫く音が、聞こえた

299 決着／天へと昇る光

音が聞こえたと言うのに一向に痛みが訪れない

肉体を貫いた筈の鉄の感覚がない

恐る恐る目をひらき目の前を見る

「マス、タ━…無事か?」

そして目を見開いた

目の前にはエクスカリバー モルガンに貫かれながらも立っている白髪で、大きな槍を持つていたお兄さんがいた

「チツ、殺し損ねたわ」

そう言つてイリヤが血に濡れたエクスカリバー モルガンを引き抜いて後ろに下がる  
いや、このお兄さんを、私はこの人を知つてる

頭にノイズが走る、目の前には【F a t e G r a n d O r d e r】と書かれた画面  
【■■】も言つてたし、やつてみようかな】

そして、目の前にはカルナと書かれた白髪で大きな槍を持つたお兄さんが映し出され

る

『カルナって言うのか! カツコいいな、これからよろしくね』

画面が代わり、靈基再臨と書かれた画面が移つている

『最終再臨終わり、長かつたな。これからも頼むよ、カルナ！』

そうだ、この人はカルナ

施しの英雄だ、前世の私の初めてのガチャで召還された

僕の最初のサーヴァント

すると彼から金色の粒子が舞い始める

恐らくは先程のエクスカリバー・モルガンを刺されたことで靈核が……：

「カルナ！」

私は思わず彼の名を叫ぶ

「初めて、真名を呼んでくれたな」

そう言つてカルナは胸から血を流しながら振り向く

「なんでこんなことをしたの!?」

「サーヴァントがマスターを守るのは、英靈として当然のこと」

体から零れる金の粒子、カルナを形成する物が段々と消えていく

「それに、お前は俺を最後まで育て最高のサーヴァントと言つてくれた」

それは過去、前世のゲーム中に私が呟いた一言

右目から涙が流れ、頬を伝う

そんなその時出たような言葉を覚えて……

「だから、そんなお前を守れて俺は良かつた。さよならだ、マスター」

そう言つて優しげに笑つたカルナはそのまま、金の粒子となり天に昇つていった  
「カルナ……ありがとう」

なんでこの世界に限界していたか、私の記憶を持っていたのか分からぬけど  
この世界で、私に手を差し伸べ

暴走した私を救いだし、命を救つてくれた貴方はやつぱりカルナはわたしの最高の  
サーヴァントだよ

ありがとう、貴方の救つてくれたこの命で  
この世界を守る、みんなを助けて見せるから  
見てて、カルナ。私の、最後の戦いを

——タイムリミットは残り1分——

「決着を着けるわよ、イリヤ」

そう言つて私は右手を前に構える

我が英雄エイギョウ<sup>エミヤ</sup>よ、力を借りします

I am the bone of my sword.  
I am the bone of my sword.

心臓がドクンと鳴る

私が何をしようとしたのか理解したのか、それとも何かをする前に殺そうとしたの

か、イリヤは此方へと駆け出してくる

「<sup>血</sup><sup>潮</sup>Steeel is my body, and fire is my blood.」

そうだ、固有結界は術者的心を形にする魔術

なら、これを私の魔術に変える  
「Unkn<sup>少</sup>own to Death. Nor known to Life.」

真似ることしかできない、偽物のクロ工に出来ること

「Have withstood pain to create many weapons.」

大丈夫だよ、お兄ちゃん

ちょっと変えるだけ、詠唱を私の言葉に変えるだけ

「Yet, those hands will never hold anything.」

賭けるのは、私自信の命と残りの魔力全て

「You can still do it.」

あの誓いを今果たす、戦い抜いてみんなを救う

「So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.」

その瞬間、大地に日々が入り炎が大地を燃やし尽くしていく

火の粉が舞う黄昏時の空

空に浮かぶ歯車には血が付着し、錆びながらも動き続けている

大地は所々に血で染められており、その上に様々な剣が立てられていた

「固有結界。私がこの世界で生き、戦い続けて得た答え」

自信の命を燃やし、駆け抜けた戦場

「誰より戦い抜き、救えるだけ救う。例え私がどれだけ傷付いても、私はこの世界を守るために戦い続ける」

それが絶望しかない、儚くて綺麗なこの世界で私の至つた思い

私は丘の上の剣へと手を伸ばし剣の柄を握る

すると柄を握る私の手が燃え上がる

「イリヤ、貴女が挑むのは英靈エミヤとクロエ・フォン・アインツベルンの力を持つた紛い物である偽者よ」

炎を気にせず剣を引き抜いてイリヤへと切つ先を向ける

「クロ、貴女……」

この世界に驚くイリヤは私へと嫉妬と憎しみの籠つた瞳で私を睨み付けながらエクスカリバー・モルガンを構える

クローンだつた私が本物の力を得たことが許せないのだろう  
風が吹き、土煙が舞う

「ツ！」

私は地面を踏みしめて加速する

イリヤはエクスカリバー・モルガンを持つて此方へと駆ける

私の右手に持つた剣がエクスカリバー・モルガンとぶつかり、碎ける

左手を剣の方に向けると近くにある刀が私へと向かってくるので柄を掴みそのまま横に廻払うように振るう

そして一步下がり剣を大量に中に浮かせて射出する

イリヤはそれをエクスカリバー・モルガンで弾き碎く

その内に私は持つた刀を地面に刺して干将莫邪を投影し投擲し横に飛びながら洋弓を構え手元にあつた剣を射る

イリヤは干将莫邪を弾くが私の射つた刀で横腹を切り裂く  
「グツ？…………なんで」

イリヤの呟きに私は思わず足を止める

「何で、何でクロは本物の力を得たのに私には何もないの!? 私だつて、イリヤなのに!! 何で！ 何でクロは戦うの!? クロだつてクローンなら、この世界が、悪魔や天使、堕天使が憎いはずなのに！ この世界の為に戦うなんて間違つてゐるのに!!」

そう言つて私へと叫ぶイリヤのクローンはまるで何かが爆発したかのようにそう叫

ぶ

「確かに私はクローン。この世界を憎んだ時もあった」

「なら！」

「でも、私がお父さん達を守りたいと言う気持ちは変わらない。の人たちは人殺しの私に、一人だつた私に居場所をくれた。お父さんを、皆を……この世界を守りたいと言うこの思いは、例え私がクローンだとしても、決して間違いなんかじやない」「もう、絶対に許さないんだから!!」

そう言つてイリヤはエクスカリバー・モルガンを袈裟懸けに構える

エクスカリバー・モルガンが黒いオーラが纏う

「決着を着けるわ！」

そう言つて私は近くに刺さつた黄金と青の剣を手に取り同じように袈裟懸けに構える

この剣はかつてブリテンを納めていた騎士王、アルトリア・ペンドラゴンの引き抜いたとされる選定の剣、カリバーン

「約束された勝利の剣!!」

イリヤがエクスカリバー・モルガンを振り下ろし黒い極光が迫る

それは先程な放つていた物とは違い、より強大で強力な極光

「勝利すべき黄金の剣!!」

私も手にもつたカリバーンを突き出す

エクスカリバー・モルガンとカリバーンの極光がぶつかり合う  
「アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その時、イリヤの叫びと共に極光の威力が上がる

「ぐっ!?」

そして私のカリバーンにヒビが入り砕け、私へと極光が迫る  
まだ、まだ終わらない！

私は直ぐに別の剣へと手を伸ばして掴み、振り上げる

その剣は、かつてブリテンを納めていた騎士王アルトリア・ペンドラゴンが使つてい  
たとされる聖剣

「約束された勝利の剣!!」

イリヤのエクスカリバー・モルガンの黒い極光と私のエクスカリバーがぶつかり合う  
私のエクスカリバーが僅かに押し返すがイリヤのエクスカリバー・モルガンが優勢

頭に思い付くのは、エクスカリバーの十三拘束

「これは己よりも強大な者との戦いである」

気のせいいか少しだけエクスカリバーの威力が上がった気がした

「これは精霊との戦いでない」

優勢だったエクスカリバー・モルガンの黒い極光がエクスカリバーの極光が同等にな

る

「これは邪悪との戦いである

これは私欲なき戦いである

これは一対一の戦いである

私のエクスカリバーの極光がエクスカリバー・モルガンの黒い極光を押し始める

あと少し、あと少しで押しきれる

「これは世界を救う戦いであるッ!?」

そう言つた瞬間、私の手にもつたエクスカリバーにヒビが入り砕けた

「投影、開始」

私は瞬時に最後の力と魔力を込め一振を投影する

それは英霊エミヤの作り出した理想の一振

「この光は永久に届かぬ王の剣……」

青と黄金色の剣を持ち、袈裟懸けに構え降り落とす

「エクスカリバー・イマージュ  
永久に遥か黄金の剣!!」

先程のエクスカリバーよりも大きな極光がエクスカリバー・モルガンの黒い極光を押し返し霧散する

私はイリヤの目の前に転移し、エクスカリバー・イマージュ 永久に遙か黄金の剣をイリヤの胸に突き刺した

「ゞつふツ」

イリヤが吐血し、私の顔に血が跳ねる

「負け、ちやつた……」

そう言うとイリヤはすごく穏やかな笑顔を浮かベロを開く

「やつと、聞こえなくなつた……」

「ツ…………」

「クロ…………終わら、せてくれて……あり、がと。」

そう言つてイリヤは私の頭を撫でる

頭から頬へと伝い、頬に手の血が着く

私の頭を撫でるイリヤ手はとても弱々しくて優しかった

「まつててミユ…………私も、一緒に……」

そう言つてイリヤはゆっくりと目を閉じ私の頭に乗せられていた腕がだらりと落ち

る

私はそつとエクスカリバーイマージュを引き抜いてイリヤをゆっくりと地面に寝か

せた

やつと、終わった

そう思つた瞬間、目の前の固有結界が崩れしていく  
もう魔力がない

左肩は剣になり、左目は見えなくなつたけど  
勝てた

やつと、私は

——タイムリミット、残り0分——

s i d e o u t

世界が戻り、  
クロエは校庭に姿を表した

左肩は剣になり身体中に切り傷が大量に出来ており、左目からは血が流れており両手をダランと下がっていた

それと同時に胸を貫かれたと思われるイリヤと言う少女が地面に倒れた状態で現れた

そんな状況に黒歌や朱璃、朱乃は涙を流しながらもクロエが生きていた事を喜び

木場やアザゼル、サー・ゼクスやミカエル、そしてグレイフィアやセラフオルーもクロエの生きて帰ってきたことに緊張を解いた

その時だつた

クロエの体から、光の粒子が零れ始めた

そう、今の時刻は0時

クロエの生まれた日にして、死ぬ日

その事を思い出した全員は思わず涙を流すなか、クロエはゆっくりとアザゼルの元へと歩き出した

ふらふらとしながらも、ゆっくりと歩いてくるクロエにアザゼルは驚いていた  
そしてとうとうアザゼルの目の前へと迫った時、体が傾き倒れそうになる  
アザゼルはそれを支えるように受け止める

「クロエッ！」

それを見てサー・ゼクス、ミカエル、セラファルーは思わず目を疑つた  
何の偶然か、彼が初めてクロエと会つたとき、同じようにして倒れそうになつたクロ  
エをアザゼルが支えた

あの時と同じ光景だつたから

アザゼルがクロエの顔を見ると、クロエは眠そうな目でアザゼルを見つけると笑つた  
「おと、さん……ただ、いま……」

「つ!? ああ！ 良く帰つてきたな、クロエ」

「えへへ……」

そう笑うクロエだつたが、その体は人と思えない程に軽く冷たかつた  
そんな事実に思わず、アザゼルはその瞳から涙を流す

クロエの体から零れる粒子が、クロエの終わりを告げていた

そう今彼女から出ている粒子はアラヤの干渉ではなく彼女が死ぬ際、この世界への介  
入の証拠を消すために

クロエの肉体を残さないよう、彼女を転生させた神の力による物だつた

そんな様子にその場にいた全員がその瞳から涙を流す

するとクロエの瞳がだんだんと閉じていき、体から零れる粒子の量が増える  
「おと……さん、私……頑張つたよ。だからさ、少しだけ、休んでも、いいよね？」

家や家族、身分証明書やお金がない

毎日を必死に生きながらもアラヤによる指示で戦場にて戦い  
アザゼル達を救つてきた彼女が、唯一ちゃんと休む事ができたのはアザゼルと過ごし  
たあの数日のみだった

アザゼルは、目の前で死んでいく少女にもつとたくさんの事をして上げたかつたと悔  
しく思いながらも、優しい笑みを浮かべた

「……ああ！お前は本当に良くやつた。お前は、俺の自慢の娘だ。だから……ゆっくり  
休んでくれ」

「おや、すみな……さい」

そうして、アザゼルの腕の中

クロエはゆっくりとその瞳を閉じた

するとクロエの体が完全に粒子となり、空へと昇つてくる

粒子が空へと昇つっていくのを、アザゼル達はただ黙つて見ていた

## 【最終話】HAPPY BIRTHDAY

「私の居場所は此処にある！」

クロエ side

目の前には綺麗な森が広がっていた

草木が風に吹かれ花が揺れる光景はどこか神秘的にすら見える

「ここは…………何処？」

確かに私はお父さんや朱乃ちゃん達が生きるあの世界を守るために、同じクローンのイリヤとミュと戦つて殺して、それで死んじやつたんだ

私のクローンとしての寿命で

「短い人生だつたな…………」

でも、お父さんや朱璃さん達を助けられたらし、最後はお父さんの腕の中で死ねたから、

もう未練はないかな

ああ…………ようやく休める

『本当にそうですか？』

頭の中に、聞いたことない女の人の声が響く

……………違う、私は本当は生きたかつた

あの世界のお父さん（私）の居場所達のいる場所でずっと、笑つて暮らしたかつた  
お腹いっぱいご飯を食べられて、ふかふかの布団で眠れて

お父さんがいる、あの家で

私、後悔ばかりじやない……………

まだメロンパン沢山食べてない

朱乃ちゃんや朱璃さん達とちゃんと話せてない

お父さんに誕生日を祝つてもらつてない

私は……………まだ、生きていたかつた

『良かつた。貴女ならそう言つてくれると思い、ここに呼んだのです』

「私を、呼んだ？じやあここは？」

『はい、一応天界の一部になるんですけど……貴方の死後に魂を回収してここに運んだ  
のです』

「どういうこと？」

『呼んでおいて、申し訳ないので私のもとへと来ていただけませんか？道は花達  
が教えてくれます』

すると、突如として風で花びらが舞い宙に漂い森の前の方へと進んでいく

恐らく、あの声の花が教えてくれるつてのはこう言う事ね

私は漂う花びらを歩いて追う

でも、やっぱり右目だけだと少し見辛いな

それに左肩が剣になつてるので木に擦つて傷付けてしまう

こんなに綺麗な森は傷付けたくないんだけど

そんな風に花びらを追いかけ、森を歩き続けていると少し開けている場所が出来ていた

そこには湖が広がっていて、目の前にはテーブル、二つある椅子の片方に座りお茶を入れていて、水色の髪でショートカットで翡翠色の瞳の女性がお茶を入れていた  
ケーキスタンドには様々なお菓子が盛られていた

そんな光景は、凄く綺麗だつた

まるでその女性が森から祝福されているような、そんな気がする

「いらっしゃいましたね、クロエ・フォン・アインツベルンの転生者さん」

その女性はお茶を入れていたティーポットをテーブルに置きそう言つて私の方を向いた

「貴女、は？」

「取り敢えずお座り下さい、森を歩いてきて少し疲れたでしよう」

「そう言われ、私は流されるまま水色の髪をショートカットにした翡翠色の瞳の女性の向かい側のイスに座る

「よかつたら、お茶をどうぞ。お菓子もご自由に食べて頂いて構いません」

「そう言われ、取り敢えず私はケーキスタンドからマカロンを2、3個取りお茶の入ったティーカップの近くに置かれた皿に置き、取りあえずお茶を一口飲む

「…………美味しい」

「良かつたあ、いつもは一人で入れて一人で飲んでるので、少し不安だつたんです」

「そう言つて手を会わせ嬉しそうに微笑む女人

「えつと、貴女は?」

「申し遅れました、私は第96転生神をやらせていただいております。ノアと申します」

「そう言つて女人の人、ノアはそう言つてお茶を口に含む

「えつと、あの……第96転生神? つて何ですか?」

「はい、実は天界に置いて転生を司る神様は沢山いるんです。私はその中の96番目でして、特に数字の桁で偉いとかの位は関係無いんですよ?」

「はあ?」

相槌を打ちながらマカロンを一つ口に含む

初めて食べたけどサクサクして甘くて美味しい

お茶と凄く会う

「それで、貴女をここに呼んだ理由なんですけど。まずは謝罪を、本来なら貴女はもつと生きられたのですが、こんな事になつてしまい申し訳ありません」

そう言つてノアさんは頭を下げた

「え？ ど、どういうことですか？」

すると、ノアさんは頭を上げて口を開いた

「実は、貴女を転生させた神は自身の暇を潰す娛樂として死んだ人の魂に勝手に力を与えては転生させていまして。先日、天界から追放になつたのです」

「え？ つまり私は被害者ってこと？」

転生特典としてクロエの姿と力を押し付けられたのも、家も身分証明書も家族も居なかつたのはその神のせいなの!?

「はい、その認識で間違ひありません」

「なるほど、それで謝罪するためにノアさんは私をここに呼んだの？」

「はい。それもありますが、本題は別にあります。実は貴女に個人的にお話がありまして

「個人的に？」

「はい、クロエさん。貴女は過酷な状況下で生き抜き、沢山の人を救うために戦い続けました。それは大変評価されるべきものです」

「評価されるべきじやないわ、結局やつてることは人殺しなんだから」

「……そう、ですね。本題ですが、クロエさん先程も貴女に問いましたが、生きたいですか？あの世界で」

「ええ。生きたいわ、そして私に居場所をくれたお父さんの元に帰りたい」

その問いに私は即答した

「実は私は貴女をハイスクールD×Dの世界に生き返らせてさし上げようと思つています」

それを聞いて私は驚いた

てつきり、私は地獄へと行くかと思つていたから

もう一度あの世界に生き返る事が出来るなどと考えたことも無かつたから

「いいん、ですか？」

「はい。貴女は、十分頑張りました。幸せになるべきなのです」「で、でもそれじゃ貴女にメリットなんてないわよ？」

「実は貴女が生き返るに当たつて、少しお願いがあるんです」  
やつぱり、何か目的があるの？

うまい話しには裏があると言うし

「貴女には、私の眷族となつて頂きたいのです。」

「眷族？」

「あくまでもお願ひですので、断つて頂いても構いません」

「えつと、眷族？になると、私はどうなるの？」

「まず、貴女とアラヤとの繋がりを切り、私との繋がりをもつて貰います。そして私からの依頼を受けることが可能な場合に受けてほしいのです」

「アラヤとの繋がりをツ!?、まつてその依頼？つて？」

アラヤとの繋がりを切つて貰うのは正直凄く嬉しい

でも、その依頼がどんなものか分からぬから安易には領けない

「もちろん強制ではありませんが、世界の破壊を招くような事をしようとする転生者の魂を回収、別世界にて特定の条件を満たすために行動と言った物です。まあ、ごく稀にしか、起きませんよ」

「なるほどね、それは私が向こうで生き返つてから?」

「はい、貴女とはここで私の眷族となる契約をして貰います」

うーん、正直

凄くわたしにとつて美味しいお願ひだ

何より、アラヤとの繋がりを切ることが出来るのは助かる

それにノアさんからの依頼は参加が自由

「基本的には、私は自分の世界で暮らすつて感じでいいの？」

「はい。必要な時は私から念話を飛ばしますので、それで眷族の件はどうでしようか？別に断つたからといつてもとの世界に生き返れなくなるとからありませんからね？」

私が生き返る事が出来るつて事は決定なのね……

「分かったわ。」

「良かつた！なら早速」

そう言つてノアさんは私のおでこの辺りに手を翳す

すると、私の奥にある何かが切れたような気がした

「今、アラヤとの繋がりを削除しました。次は契約なのですが、イスから立つてこちらに跪いて貰えますか？」

私は言われた通りに立ち上がり、ノアさんの前で膝を着く

すると、再びノアさんが私のおでこに手を翳す

「我、転生を司りし神ノア。汝は今、自らの今後の運命を選ぼうとしている。この注告を

聞いてもなお、我の眷族となることを誓うか？」

そう言うノアさんはさつきまでの優しそうな女性から真面目な顔になり、私にそ

言つて來た

「私、クロエ・フォン・アインツベルンは貴方の眷族と成ることを誓います」

そう言うと、私の中に新しく何かが繋がるような感覚と共に左肩に違和感を感じた試しに右手で私の左手をふれてみると、剣に成っていたはずの肩が元に戻っていたそしてまだ、驚く事があつた

「あれ？ 私、いつの間に……左目が……」

そう恐らくだが、私の切り裂かれた筈の左目が見えるようになつていた

「今、汝は我が眷族となり繋がりが生まれた。汝は我的剣となり我に使えよ」

「イエス、マイ・ロード」

左目が見えるようになつたことに驚いたが、どうにか真剣に答える  
「はい、終わりですよ」

そう言つて元の穏やかそうな笑顔になるノアさん

「あの、私の左目つてどうなつてます？」

「へ？ ああ、少しまつて下さいね」

そう言つてノアさんが見せてきた鏡を見る

そこには切り裂かれた筈の左目が治り、お父さんと同じ黒色になつている  
いわゆるオッドアイになつた私が映つていた

「一応、治療する際に貴方のお父さん。アザゼルさんと同じ瞳の色にしましたよ。父娘なんですかから、この方がいいかと思いまして」

「お父さんと、同じ……」

私は思わず黒くなつた左目に振れる

「それと、ある子達から伝言とある物を預かつてるので、お渡ししますね」

そう言つてノアさんが空中に手を翳すと一振の剣が現れる

黒い刀身に血のように赤い血のような装飾の剣

イリヤが私との戦いの時に使つていた聖剣だ

「エクスカリバー・モルガン」

「はい。これを貴女に渡してくれと頼んだ彼女からの伝言です。『私を止めてくれてありがとう、クロには辛い事をさせてごめんね。ノアさんから貴女がもう一度生まれ直すチャンスを貰えると聞いて、この剣を託すことにしたよ。きっとクロの力になつてくれると思うから、どうか幸せになつてね』と」

イリヤ…………ありがとう

大切に使うよ

「そしてもう一人貴女に伝言と預かつてる物を」

そう言つてノアさんがまた空中に手を翳すと二つの物が現れる

それは黒と白の剣が着いた銃

FGOにてエミヤオルタの使用していた武器

「銃剣の、干将・莫邪？」

「はい。そしてを渡してくれ頼んだ彼女からの伝言です『私とイリヤを止めてくれてあります。どうか幸せになつて』と

ミユ、この干将莫邪……ありがとうございます

大事に使わせて貰うね

「この武器達は私が貴方の固有結界『無限ノ剣製』に追加しておきます。」

そう言つてノアさんが手を翳すと武器達が光の玉のようになり私の体に吸い込まれていった

「投影出来るので、もとの世界に戻つてから試してくださいね」

「はい、ありがとうございます マイ・ロード。…………あのイリヤとミユは、どうなつたんですか？」

「実は、あの二人も私が担当しているんです。一応、彼らも被害者ですから、転生して幸せに暮らして頂く予定です。」

「そうですか。よかったです…………あの二人にありがとうございます。大丈夫、これから私も頑張る

から、二人も頑張つてねと伝えてくれませんか?」

「そう言うとノアさんが少し驚くと、頷いた

「分かりました。それでは、そろそろもとの世界に送り返します」

「そう言うとノアさんが私の方へと手を翳す

「はい、色々とありがとうございました!」

「そう言つて頭を下げる時、ノアさんは穏やかその笑みを浮かべながらもう片方の手で手を振つた

「それでは今度こそ良き人生を過ごして下さいね」

「そう言われ私は温かな光に包まれた

目が覚めて両目に飛び込んできたのは葉のついた木と空を羽ばたいて行く鳥達  
体を起こし、回りを見渡す

私が最初に転生して目覚めた公園だ

そして私は赤い外套や猫耳のパークーでもなく、最初に着ていたワンピースと靴  
「なんか、懐かしいな」

そう思いながら立ち上がる

考えてみれば、私はお父さんの目の前で死んだ訳だし、ワンチャン家にいれて貰えな  
いんじゃ？

お、お父さんならきっと私を優しく招き入れてくれるはず

そんな不安が頭をよぎりつつ、私はお父さんの家へと駆け出す

お父さんと車で通った道を駆け抜けていく

通りすぎる人々は私の方を振り向く

恐らくだけど、私の目

黒目と琥珀色の瞳のオツドアイが珍しいのだろう  
そう思いながら走り、私のお家に着いた

「はあ、はあ……着いた」

走つたことで息が上がる中、私はインターほんを押した  
心臓が早く動き、額から汗が垂れる  
ガチャと音と共に扉が開く

「はいよ。どちらさ、ま……」

扉から出てきたのは、黒いコートに金髪に所々黒髪の混じった男の人  
「あ……」

私の居場所に……家族になつてくれた人で恩人で  
今、一番会いたい人

改めて目の前にいる人の元に帰つて來ることが出来た事に想わず瞳から涙が流れる  
私は思わずその人に飛び付き、ぎゅっとだきしめる

「お父さん、ただいま！」

アザゼル side

た

和平締結が終わつた次の日、俺は一人しか居ないこの家に帰つてきた  
3種族による和平締結の日は、こういつちや何だが俺にとつて最悪の日になつちまつ

そうだ、クロエが死んじまつた

俺の腕の中で消えていった

もしかしてと思い、家のクロエの部屋を開けたりしたが、誰も居ない

あるのは、アイツの使つていた布団と数着の服

そして小さなテーブルとクッション

それを見ていて、俺は後悔しかなかつた

アイツを拾つてから僅か数日、俺はアイツと過ごした  
今考えるとクロエは俺と過ごした数日しか、時間が無かつたのだ  
もつと色々な事をしてやりたかつた

アイツは今まで、身を削り毎日を空腹に耐え、どうにか生きてきた  
アイツは自分に得になることをしてこなかつた

アイツにもつと色々な飯を食べさせてやりたかつた。  
もつと色々なところに連れていつてやりたかつた

アイツは、俺と居られて本当に幸せだったのだろうか？

そんな思いと後悔が出ては消えていく  
思わず目から溢れそうになつた何かを腕で擦つて拭う

「はは、大の大人が情けねえな」

そう思い、手に持つたマグカップに入つたコーヒーヒーを飲み干す

そういうえば、本当なら今日の今ごろはアイツの誕生日を祝つてたんだつたな  
まさか誕生日だつた筈の日が命日か

天国に届くか分からねえが、ケーキ……買つてくるか

それが、今俺がアイツにできる唯一の事だ

そう思い、財布と車の鍵を持ち出かける準備を終えたとき玄関からインターほんが鳴る

今は午前、10時こんな早くに一体誰が？

そう思い俺は玄関の扉を開く

「はいよ。どちらさ、ま……」

その先を、俺は言うことが出来なかつたのだ

「あ…………」

目の前には小学生ぐらいの少女が立つていた

色の抜けた銀髪、褐色の肌に真っ白なワンピース

金属の生えていた左手は元通りになり、怪我していた筈の左手は元々の琥珀色ではなく黒目

そんな、昨日目の前で消えた筈の少女が

クロエが目の前に立つっていた

まるで時が止まつたかのような感覚がした

そして少女は琥珀色の瞳と黒目となつた瞳から涙を流し、俺に飛び付いてきた

俺はそれをどうにか受け止める

そこには、あの時冷たくなつた筈の体は温かくなつていた

「お父さん、ただいま！」

「そう言つてさらに抱き付く力が強まる

「クロエ、なんだよな…………幽霊とか、幻覚じやなくて。本物、なんだよな!?」

「うん、うん！お父さん、私だよ…………クロエだよ」

頬を何かが伝う感覺

なんでお前が生きているのか

その目と肩はどうしたのかも気になるが

今はどうでもいい

今は俺の前に再び戻つて……いや、帰つてきてくれた

クロエに、この言葉を送らねえとな

「クロエ、お帰り。」

「…………うん。ただいま、お父さん」

そう言つて俺はクロエを先程より強く抱き締めた

午後、駒王学園の会議室にはオカルト研究同好会のメンバーの他にも沢山の人が集められていました

会議に出席していた魔王、サーゼクス・ルシファーそしてセラフオルー・レヴィアタ

ン

天使長ミカエル

その他に姫島朱璃、バラキエル、黒歌

紫藤イリナ、紫藤トウジ

いすれもクロ工に救われた者と、クロ工と面識のある人物である

そしてその全員が集められた会議室は様々な物で飾られ、中央に置かれたテーブルには沢山のご馳走が並び、大きなケーキが置かれている

涙目で話す人もいれば、笑顔で話す人がおり

その皆は手にクラッカーを持ち、この会場の主役へと向ける

『『『クロ工お誕生日

おめでとう!!』』

その声と共に大きな音と共に紙テープと紙吹雪が舞う

私は想わず涙が出そうになるのを我慢して、笑顔を浮かべた

「お父さん、みんな……ありがとう」

私は今、この世界で一番の幸せ者だと

初めて、そう感じた

私は、生きてきてよかつた

あの時、生きることを諦めていたら私はきっとこの光景を見ることが出来なかつただ  
ろう

この後、みんなで写真を撮つた

そこには、少し涙を流しながらと笑う私を囲むようにして皆が笑っていた

## 番外編【F a t e / G r a n d O r d e r】

### 鮮血の妖精、カルデアへ

吹雪の吹く南極に1つの大きな建物がある

人理継続保障機関ファニス・カルデア

そこでは、世界最後のマスターである少女、藤丸立香とそのサーヴァントであるマシュー・キリエライト

そして偶然か必然か爆発にて生き残り、カルデアでの指示をしている所長オルガマリー・アニムスフィア

そしてカルデアの職員のロマニ・アーキマンや沢山の英靈が人理を守るため戦い続けている場所

少し前に藤丸立香はある特異点を修復した

今までの時代とは異なり、かなり今の時代に近い特異点にて、藤丸立香は魔法少女と出会いう

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、クロエ・フォン・アインツベルン、美遊・エーデフェルトと出会い、その原因を打倒することでその特異点を修復

そしてその次の日、見事カルデアに3人は召喚された  
3人は戸惑いながらもカルデアに協力することになり、カルデアでの生活に慣れてきていた

そんな中、カルデアの廊下を人類最後のマスター藤丸立香とそろデミ・サーヴァント  
「先輩、今度はどんな英靈が召喚されるのでしょうか。楽しみですね」

「そうだねマシユ、今度はどんな人が来るのかなあ」

「マスターさーん！」

「うん？」

見ると、立香達が歩いている廊下の向こう側から三人の少女が走つてきていた

「先輩、彼方からイリヤさんが走つて来てますよ」

「ちよつとイリヤ！ 急に走らないでよ！」

「イリヤ、クロ待つて！」

「あれ？ クロエちゃんに美遊ちゃんも？」

「いったい一体どうしたのでしょうか？」

「うーん、何かあつたかな？」

そう言つて首を捻るマシユに続いて立香は顎に手を当てて考えるなか、イリヤ達は立香目の前で止まつた

「もうイリヤ、急に走らないでよ。ビックリするじゃない」

「えへへ、ごめんごめん。マスターさん、あの！英靈召喚するんですよね！私、見てみて  
くて!!」

「そう言つて興味津々といった様子のイリヤに思わず笑みを浮かべるマシユと立香  
「そう言えば前に召喚したときは皆さんが召喚されたので、皆さんは召喚するのを見た  
ことがないんですね」

「なるほど！じやあ三人とも、召喚しているのを見ていいけど邪魔しちゃダメだよ」  
「はい！それじゃ行こう！ミユ！クロ！」

クロエ「クローン」side

あれから、数日後にマイ・ロードに呼ばれ  
私は神界の森に来ていた

「人理修復、ですか？」

「はい。一応、クロエちゃんも手伝いに行つてくれないかなと」

「一応、構いませんが。人理修復だと数十日いや、数年かかると思いますが……」

前世でやつてたけど、5章中盤まで二年ぐらいかかったよ？

「そこは大丈夫よ。クロエちゃんがカルデアに向かつた次の日に帰つてくるよう設定してあるから、どれだけ向こうにいても大丈夫よ」

「なるほど。第96転生神ノアが眷族クロエ・フォン・アインツベルンは人理修復のため、カルデアへと向かいます。」

「はい。頑張つて下さいね」

マイ・ロードがそう言つて手を翳すと、突然意識が消え何処かに引っ張られるような感覚に襲われ、目を開くと私は何もない部屋に立つており、目の前には五人の少女が立つっていた

「すごい、本当に召喚されたよミユ!!」

「うん、そうだねイリヤ」

「改めてみると、本当に凄いわよね。英靈召喚つて……」

「そうでしょ、私も今でも凄いなうって思つてさ」

一度私の姿を確認すると、白いワンピースの上から外套を羽織り、フードを深く被つている姿だった

改めて目の前の人たちを見る

一人は恐らくは私を召喚したであろう少女、ゲームの女主人公アバターの少女、藤丸

立香

銀髪でメガネをかけている少女、マシユ・キリエライト

そして残りの三人は、私の恐らくは一番知つてる

私の、私たちクローンの元であるオリジナル

今の私は口元だけが見えている状態だから恐らくまだ私がクロエだと認識されていない

一度目を閉じて自分のステータスを確認し、口を開く

「サーヴァント、フォーリナー。召喚とマイ・ロードに応じ参上した。はあ、こんな偽者を召喚するなんてよっぽど運がないのかしら?」

そう言うと、目の前の少女

いやこの世界の主人公、藤丸 立香が口を開く

「私は藤丸 立香！よろしくねフォーリナー！」

「私はマシユ・キリエライトと申します。フォーリナーさん、よろしければ真名の方を」さすがに、オリジナル達がいる場所で私の事を話すわけには行かないわね

素顔をさらすのも得策じやない

アルトリア・ペンドラゴンのように反転したや、自分のオルタナティイブなら受け入れられるかもしねりないが、自分はそんなものじやない

i f の姿でもなければ、クロエ・フォン・アインツベルンと言う少女の姿をした何かでもない

彼女を模して作られたクローン、そんな事はきっと受け入れられない  
どころか、ショックを受ける可能性もある

自分達が生まれたせいで、と。

「そこの三人がこの部屋から出ていくなら話すわ。悪いけど必要最低限の人にはしか素顔と真名は言えない」

そう言うと、オリジナルのイリヤ、ミユが目を見開き、私のオリジナルが納得の行かない様子だ

「ちよつと！ 何でマスター達は良くて私達は駄目なのよ！ 別にいいじゃない真名くらい教えてくれても！」

「クロ、落ち着いて！ すいません、家のクロが」「英靈ならこうなることもある、のかな？」

そう言うと、イリヤに私は首を振る

「まあ、まあ。マスターさん、私達は部屋から出るね」

「失礼しました」

そう言つてイリヤとミユがクロ工を連れて外に出る

部屋の前から去つていったのを確認し、私は口を開いた

「まず、マイ・マスター。そしてマシユ・キリエライトさん、私の素顔と真名を伝えるにあたつていくつか約束が欲しいことがある。一つ、私の真名と素顔は誰にも言わないで欲しい」

「えっと、実は所長とロマニ、ダヴィンチちゃんに報告しなきや行けないんだけど……」

所長つて事は、つまりこの世界軸だとオルガマリー所長は生きているのね  
「なら、マイ・マスターとマシユさん、そして先程の三人以外には極力、バラさないで欲しい」

「うん、分かつたよ。取り敢えず三人を呼んだ方がいいかな？それなら後から話さなくて良いし」

「分かりました。今すぐに連絡をしますね」

それから僅か数分でその3人が集合した

ロマニ・アーキマン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、オルガマリーアニムスフイアが集合した

「えっと、君が立香の言うサーヴァントだね？僕はロマニ・アーキマン。皆からはDr.ロマンと呼ばれているよ」

「私は万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチ。気軽にダ・ヴィンチちゃんとでも呼んでくれ」

「私はオルガマリー・アニムスフイア。人理継続保障機関フィニース・カルデアの所長よ」「さてさて、我々の自己紹介も終わつたことだし、君の真名を教えてくれても良いんじゃないかな？フォーリナー君」

そう言われ、私は取り敢えず口を開く

「真名の前に、他の人の前では私は『C.<sup>シ</sup> C.<sup>ツ</sup>』と呼んで。真名と私を表すのに、その方がバレない」

C.C.は私の名前であるクロエ、そしてクローンである粉と事の頭文字を取つて思

い付いた仮名だ

そう言うと、その場の全員が頷いたのを確認しフードを脱ぎ戦闘服の赤い外套に黒いプロテクターを纏つた姿に戻る

「え!」

「うそ…………」

マシユと立香が驚いているなか、私は口を開いた

「改めて、サーヴァントフォーリナー。真名、第二製作体E型257-II-K, Chilo e von Einzbern。さつきの『クロエ・フォン・アインツベルン』を模して作られたクローンよ」

そう言うと、立香とマシユ以外の三人がまるで苦虫を噛み潰したような顔を浮かべる

「クローン?」

「しかもサーヴァントであるあの子を元に作りたクローンだつて!」

「そんなこと、あり得るのでしょうか?」

「まあ、困惑するのも分かるわ。取り敢えず、あの三人やそれ以外に隠すのは、私と言う偽物をバレないようにするためよ。」

そう言って、元の姿に戻りフードを再び深く被り直す

「なるほど、貴方の事は理解しました。だけど、もし誰かにバレたらどうするおつもりで

すか？」

「そのときは、仕方なく姿を素顔を見せるわよ？」

「その時はその時つて奴ね

「それじゃ、C. C.! 早速カルデアの中を案内するよ! 良いですよね所長?」  
「好きにしなさい、私達は仕事に戻るわよ」

「よし、着いてきてC. C.!」

そう言われ、私は立香の後に着いていった

サードアント、ステータス解放します

【真名】第二製作体E型257—I—K  
 『Chloé von Einzbern』

筋力：B

耐久：A

敏捷：B

魔力：EX

幸運：C

宝具：B+

出典：ハイスクールD×D（IF）

地域：日本、駒王町

属性：混沌・善

性別：女性（外見）

【クラス】フォーリナー

【他のクラスでの現界する可能性】

アーチャー—orアベンジャー

【クラススキル】

・転生神の加護

最初のターン攻撃を回避

・鮮血の妖精

コマンドをクロエで統一すると攻撃力UP

・雪と月の加護

どんな攻撃でも必ずHPが1だけ残る

【保有スキル】

・投影魔術A+

アーツ、クイック、バスターの攻撃力上昇

・抑止の代行者EX

全員に攻撃力強化、スター20獲得

・生存A

5ターンの間、仲間と自身に持続回復&amp;ガツツ。

【宝具】無限ノ剣製

無銘の剣を掃射しつつミユの銃剣『干将・莫邪』で銃撃後、イリヤのエクスカリバー

モルガンを放つ。

ごく稀にエクスカリバー・モルガンを持つクロエの手に手を添えている少女達が見られるらしい

※某有名剣アニメの絶剣と閃光みたいな感じです

### 【戦闘】

#### 『Arts』

銃剣【干将・莫邪】での射撃、斬りかかり

#### 『Quick』

通常の【干将莫邪】で転移して斬りつける

#### 『Buster』

エクスカリバー・モルガンでの斬撃

#### 『ExAttack』

木場の聖魔剣【双霸の聖魔剣】で斬りつけた後には、射殺す百頭で攻撃する

### 【ボイス】

#### 『召喚』

「サー・ヴァント、フォーリナー。こんな偽者を召喚するなんて、よっぽど運がないのかしら。ま、呼ばれたからにはしつかりやることはやるわよ。」

『戦闘開始』

「マスターの指示（オーダー）を確認。mission start……」  
「私も……戦う」

『戦闘終了ボイス』

「私は、生き抜かないと行けないの」

「敵の殲滅を確認。マスター、次の指示を」

『スキルボイス』

「投影、開始（トレース・オン）」

「待つてて、直ぐに終わらせるから」

「私は、生きる！」

「マイ・ロード、私に勝利を」

『宝具ボイス』

「これは、私の得た“答え”——」

「イリヤ、ミユ……力を貸して」

『マイルームボイス』

「何で私が偽者かつて？そんなの私があの子のクローンだからに決まつてるでしょ」「はあ、まさか私もここに来ることになるなんて……思ったことも無かつたな」

「マスター、貴方は過酷な運命を乗り越えて進んできた。これからもそうなる、だから1つだけ。諦めないで、そうすればきっと道は開けるから」

### 『カルデアにプリヤ組がいる場合』

「私はあの子達とふれ合う権利なんてないわ。私は、あの子達を殺したのだから」

### 『イリヤスフィール・フォン・アインツベルンを所持』

クロエ「話しかけないで。私は、偽物で穢れてるから」

イリヤ「え…今、クロが向こうに？あれ！こっちにも！いつたいどうなつてるのー！」

### 『クロエ・フォン・アインツベルンを所持』

Chloe「何故貴方と同じ姿か？悪いけど、聞いてて良い話しじゃないから、答え  
るつもりはないわ」

クロエ「貴方、なんで私と同じ姿を……そ、なら別にいいわ」

### 『朔月 美遊を所持』

クロエ「“話しかけるな”と注告はしたわ。これ以上私に近付かないで……また傷  
付けたくないから」

美遊「貴方は、一体誰なの？」

### 『カルナ（槍）を所持』

クロエ「あ……なんでもない。なんでも、ないから」

カルナ「なんだろうか、あの少女は。何故時折俺の方を見る?」

### 《シトナイを所持》

クロエ「そつか……そつちの方も居たんだ。貴方なら本当の事を……いや、何でもないわ」

シトナイ「何? 相談か何か? それなら任せて! これでも私、お姉ちゃん何だから……つて、行つちやつた」

### 《エミヤ(弓)を所持》

クロエ「貴方には感謝しかないわ、貴方が力を貸してくれなかつたら……何も出来なかつたから。だから、ありがとう。」

エミヤ「以前に私の座にアクセスしてきた者がいたのを覚えているが、君だつたのか」

### 《千子・村正を所持》

クロエ「うそ、村正? 実装されてた、いや召喚されてたのね……ほしかつたなあ」

村正「ん? なんだ、お前? それに欲しかつたつて、儂の刀の事か?」

### 《カルナサンタを所持》

クロエ「お願ひ、少しでいいから……今は一緒に居て……」

カルナサンタ「俺はサンタだ。それをプレゼントとして望むなら、お前の気が済むまで共に居よう。元、マスターよ」

## 《絆レベル》

絆レベル1

「マスター、何か用？私の様子を見に？なんでそんな無駄な事をするの？」

絆レベル4

「マスター、悪い事は言わない。私なんかよりも魔法少女達の方に構つてあげて。私は  
独りでいいから。」

絆レベル5

「なんで、マスターは偽物の私なんかに構うの？」

絆レベルMAX

「お父さん……私、変われたかな？鮮血の妖精から正義の味方に。うん、そうだね……忘  
れてた。私も自由に、幸せに生きないとね。マスター、私は偽物だけど、一緒に頑張つ  
ていいかな？うん、改めてよろしくね」

サーヴァントステータスの更新

変化の可能性あり

# 買作者の貴方と偽物の私

C. C. side

マスターの案内で、カルデアの様々な部屋等を案内してもらっていたゲームでは中々見れなかつた場所を見れてのは少し心が踊つたわ

そんなこんなで、最後に私は食堂に来ていた

みるとFGOで見た沢山のサーヴァント達が食事を取つていた

奥の厨房らしき場所では、ブーディカに紅闇魔

そして英靈エミヤが忙しそうにしていた

「…………すごい、英靈がこんなに」

「はい、ここではカルデアの職員やスタッフの他に召喚されたのサーヴァントの皆さん  
が食事をしています」

私の呟きに答えたのは、隣にいるマシユさん

なんか、改めて見ると凄いな

沢山のアルトリアさん達が1つのテーブルで食事をしており、他には三人の英雄王が一緒に座つていたり

シトナイとヘラクレスが一緒にご飯を食べ、村正と武蔵が雑談しており  
イシュタルとパールヴァアティー、エレシユキガル、カーマはのんびりのお茶をして話  
している

てか、村正実装……じやなくて召喚されたんだ

私の前世だと、まだ実装される前に死んじやつたから少し悔しいな

他にはジャック・ザ・リッパー、ナーサリーライム、ジヤンヌ・オルタ・サンタ・リ  
リイ・ランサー、アナ、バニヤンのカルデアロリ組が楽しそうに話しているのを遠くか  
らアタランテが眺めており、プリヤ組の近くにはエミヤ（殺）とアイリスフィール「天  
の衣」が座つてる

近付かないでおこう、彼女らにもし私の正体がバレたら、色々と大変そうだし  
何よりアイリスフィールさんの場合は面倒な事になりそう

その時だ、先程まで黙っていた立香が大きく息を吸い込んでいた

「みんな聞いてーー!!」

立香がそう言うと、食堂の全員がその手を止めてマスターの方を見る  
厨房の人達も一度手を止め此方を眺めてきていた  
す、少し気まずい

「新たに召喚されたサーヴァントだよ！さ、自己紹介して」

そう言われ、私は大きく音を立てていて心臓を落ち着かせてから口を開いた  
 「サーヴァント、フォーリナー。素顔と真名は明かせないから、C.C.と呼んで下さい」

そう言うと食堂の全員スタッフやサーヴァントから『よろしく』といった感じの人もいれば、つまらなそうな顔をしている人もいる

オリジナルの私は、あの部屋での態度が気に入らなかつたのかムスツとしていた

「ちょうどお昼だし、何か食べよつかマシユ」

「そうですね先輩。C.C.さん、カルデアの案内はこれで終わります、基本的に用事がありましたら放送でお呼びしますので、それまではご自由になさつてください。それで

は

そう言つて二人が去っていくのを見送る

さて、何処に座ろうかしら。

一応、お腹は空いているので何か食べようかと思っているが食堂のほとんどのテーブルが埋まつていて座れそうな場所はない

自分の部屋に持ち帰れる物を作つてもらおうか考えていると、いつまにか目の前に赤い外套に色の抜けた髪の男、英靈工ミヤが目の前まで来ていた  
 「C.C.、だつたな」

まさか、私が英霊エミヤの力を使つていた事がバレた?

それとも私の体にエミヤの血が流れていることに勘づいたのか?

そんな事を考えていると、エミヤが口を開いた

「失礼、ずっと辺りを見ている君が少し心配でね、声をかけさせてもらった。」  
どうやら、バレてはいないようだ

「そう、感謝するわ」

「私は厨房を任せられている。サーヴァントアーチャー、真名は」

「知ってるわ、英霊エミヤ」

そう言うと、エミヤは目を見開いて驚く

「む? 失礼、何処かであつたことがあつたかな? 私の事を知つているとは」

「ええ、貴方がどんな存在で、どんな魔術を使い、どのような過去を持つているのか」

そう言うと、エミヤの目がピクリと動いた瞬間、彼は先程までの柔軟な笑みではなく  
殺氣のできる物へと変化する

きつと私の事を警戒しているのだろう

でも私の力や体の事は、この人に話さないといけないと思う

だって私の力は貴方の力が元なのだから

「貴様、何者だ?」

それに、エミヤのこの殺気は回りの事を考えて少ししか出ていない

恐らくエミヤが本気で殺気を飛ばしても私は耐えるだろう

殺氣なんて、何度も感じた事がある

戦場での経験のせいなのか私の感覚が壊れているのだろう

「別に、ただの偽物よ」

「偽物？ どう言うことだ」

「後で話すわ。ここで話すわけには行かないからね」

そう言って私は失笑する

「そうか、暫くしたら厨房の方が落ち着く。話せるのはその時だ」

「そう。それじゃ私はそれまでは……」

——ぎゅるるるるううう——

その時だ、私のお腹から空腹を告げる音が鳴りもわず両手でお腹を押さえ呟いた  
「お腹、減った……」

「ツ!?

その時、エミヤは目の前の新たに召喚された少女らしきサーヴァントが  
一瞬だが、ボロボロの服を見に纏い  
酷く痩せ細り、生氣のない濁つた瞳をした少女の姿を幻視した

そして一度目を瞑り、開くと先程までと同じ少女らしきサーヴァントが映つている  
「まあ、なんだ……空腹なら何か作ろう」

「……お願いするわ。」

「了解した。料理に何か希望はあるかね？」

「うん、じゃあお任せで」

「おまかせ？」

「私、まだ料理を沢山食べたことないから何の料理が好きなのか、ちゃんと分かつてない  
のよ」

そう言うと、エミヤは少し戸惑った様子だつたが何を作るのか決まったのか頷くと此  
方を向く

「メニューは決まった。何処かのテーブルに座つて待つているといい」

そう言つてエミヤが厨房に入つていくのを見送る

さて、何処に座ろうかしら

辺りを見回すと1つだけ誰も座つていないテーブルがあつたのでそこに座る

何だろう、なんか落ち着かない

そういうえば、お腹が鳴つたのつて凄く久しぶりね

お父さんの家だと、よく外に食べに行つたり出前を取つたりで少し食べられる物が固

定されてしまう

まあ、美味しいから良いけど。

それに、ご飯を食べられること自体が嬉しいし好きだから自分にとつての好物なんて考えたことなかつた

そう思いながらフードを更に深く被る

そう言えば、これマイ・ロードからもらつたけど

もし英靈工ミヤと戦うのであれば、彼の力ではなく私の力であるこれを使うことになるのかしら

いや、そもそも私がクロ工だとバレない為には、戦闘はその方が良いのか？  
うーん、どうなんだろ？

「ねえねえ！」

「？」

そんな事を考えていると、私の目の前に料理の乗つたお盆を持ったアストルフオが立つていた

「ここ空いてるー？空いてるよね！」

アストルフオの勢いに思わず頷いてしまう

「マスツッじやなくてジーク！こつちこつちー！」

そう言うと、アストルフォの近くに銀髪で黒い服を来た少年が手に料理の乗ったお盆を持つて此方へと歩いてきていた

「すまない、ここに座つても良いだろうか？」

「…………」

見ると、F a t e / A p o c r y p h a のジークがいた

取り敢えず黙つて頷くと、向かいの席にジークとアストルフォが座つた

「ねえねえ！君、確かさつき呼ばれたんだよね！ボクはアストルフォ！ほら、ジークも！」

「オレはジーク、ただのホムンクルスだ。貴方のような英靈程強くはないが、よろしく頼む」

「真名と姿顔は見せられない。なのでC. C. と名乗つてるわ。それとジーク、例え貴方がホムンクルスでも、歩んだ道は英靈そのものだつたと思うわ」

これは、F a t e のA p o c r y p h a を詳しくない私がネットで得たあらすじを見て思つた事だ

「君もそう思うよね！ジークつてばいつつもこうだからさ！実際は凄く強いんだよ！」  
「やめてくれ二人とも、何と言うか……少し戸惑つてしまふ」

そう言つて少し恥ずかしそうに笑うジークを見てアストルフォが微笑む

それを見て、私はどうしても思つてしまふ

ホムンクルスのジークさんは立派な英雄と言えるが、私はクローン  
沢山の人を殺し、恩人に、そしてたつた二人の家族とも言える存在にも刃を向けた  
結末や経緯はどうであれ、その事実は変わらない

「貴方と違つて私は、偽物……人殺しだもの」

「ん？ 何か言つたか？」

「別に……」

そう言つた時、私の目の前に料理

鳥の唐揚げとご飯と味噌汁の乗つているお盆が置かれた

「注文の品だ、取り敢えず子供の好きそうな物を選んでみた」

おいこら、それ私の見た目が子供だと言いたいの？

まあ肉体年齢2歳か3歳だけど、そう思い手を合わせる

「いただきます」

そう言つて橋を使つて料理に箸を伸ばすして口に入れる

うん、美味しい。何と言うかお店で食べるのと違つて何処か温かいそんな氣がする  
そう言えば鳥の唐揚げつて衛宮さんちの今日のごはんでやつてたつけ？

それに、エミヤのご飯が食べられるのつて凄く貴重な体験よね

そう思い、食事を続いている

「「…………」「」」

「…………何？」

「いや、なんだ。その…………」

「C・C・さ、なんか凄く美味しそうにご飯を食べるね。ジーク」

「ああ。オレの知識だと子供は好き嫌いが多いと聞くが、違うのか？」

この時、三人には少女が先程まで出していた声をかけにくい状態から

回りにポワポワと何かが浮かぶような幸せそうな状態で食事をしているのに驚いて  
いた

「食べ物の好き嫌いなんか言つてられなかつた、これを食べてから直ぐまたご飯を食べ  
られるとは限らなかつたし」

そう言うと、三人が黙り込むので無視して食べ続ける

うん、美味しい。鳥の唐揚げ、好きな食べ物に成りそうね

そう考えながら、食事を食べた後に英霊工ミヤの部屋での話をする事になつた

ベットとテーブルとイス以外何もない部屋に工ミヤが入つた後に入ると自動でドア  
が閉まつた

「さて、聞かせてもらおうか。貴様が、何者なのかを」

そう言つて此方を睨み付けるエミヤ、その立ち姿からいざ戦闘になつても直ぐに動けるようにしているのだろう

私は瞳を閉じて被つていたフードを取つて、ワンピースだけの姿になる

「その姿は!？」

赤い外套に黒いプロテクター、腰のベルトには青と黄色の配色に球体の埋められた機械のような何かを着けた姿に変わる

「英靈エミヤ。貴方に私の真名を話すわ」

そう言つて私は目を開き、英靈エミヤに視線を合わせる

「第2製作体E型257-II-K, Ch10e von Einzbern」

その言葉に、エミヤはただ驚愕した様子だつた

「貴様、いやクロエだつたな。お前は、まさかホムンクルス、なのか?」

「いいえ、私はとある人物が製作した『クロエ・フォン・アインツベルン』と言う人物を元に作られた、クローン。最高傑作よ。」

「クローン、だと!？」

「私の製造されていた施設は抑止力により壊され、残されたクローンは私、そしてあと二人

そう言つて私は恐らく自分がこの後に消されることを考え口を開く

「クローン第1製作体E型2025『I l l y a F e e l v o n E i n z b e r n』、第2製作体S型2017『S a k a t u k i M i y u u』」

その事にエミヤは驚きながらもそう聞いてくる

「イリヤと、美遊もか……その二人は、どうなった？」

「殺したわ…………私が」

そう言うと、私を信じられないものを見るような目で見てくるエミヤ

そう、なるよね

クローンだとしても、彼にとつては姉だ

私にイリヤが殺されたことが、彼にとつてよほど驚く事なのだろう

「殺すしか、なかつた。彼女達は私の住む世界を壊そうとした、沢山の子供を生け贋に自分達を生み出した男を、世界を壊そうとしたから。

それに、私だつて殺したくなかった。できるのなら家族として過ごしたかつた」

「後からなら何とでも言えよう。貴様が殺したことは変わりない」

クローンとはいえ、イリヤを殺されたのが彼の怒りを刺激したのか

言葉遣いが少し棘のある感じに変わつた

「それもそうね。私の話が終わつたら、貴方は私を殺すと良い。私はクローンの最高傑作と言われた、その理由が分かる？」

その問いに首を横にふる彼に私は告げた

「男が何処からか手に入れた“英靈エミヤの物だと思われる血痕”を、貴方のDNAと男の製作した擬似的なアーチャーのクラスカードを組み込まれたからよ」

「俺の、血だと……」

「その結果、荒れ果てた研究所で目覚めた私は貴方の力を。投影魔術や戦闘技術を手にした、そして抑止力、アラヤとの繋がりも」

そう言つて私は自身の胸に手を置く

「私は、数々の戦争地帯や紛争地帯に送られ多くを救うために人を殺しつづけた。時には自身を救つてくれた恩人にも刃を向けた、全てはアラヤの指示のままに。苦しかつた、家がない、家族もない、お金もない。そんな私は、どうにか毎日を空腹と寒さに耐えて過ごした」

エミヤはさつきの血の事でよほど驚いているのか、私の言葉に耳を傾けるだけ

「そんな時だ、私は自殺しようとしていた所をある男に拾われ、数日を過ごした。そしてその人を守るために向かつた戦場で、私はクローンであることを、おなじクローンであることを彼女達から告げられた。」

今でもあのときの事を思い出すことができる

「でも私はその世界を守りたくて、彼女らを止めようとして、無理で……殺して、死ん

だ

そう言うと、エミヤは膝を着いた

その顔は酷い後悔と悲しみが籠つていた

「すまない。私の、俺のせいで……君には、辛い思いをさせてしまった……」

「そして死んだ私は、転生を司る神様に誘われ神の眷族として世界を守るために戦うことを選び、ここへと来た」

彼の言葉を受け止め、それでも尚続ける

「私はね、貴方に感謝しているの」

そう言つて膝をついて下を見る彼に歩みより、膝をついて彼の顔を見上げる

エミヤは私を見て、先程の言葉に困惑していた

「貴方が私にクラスカードを通じて力を貸してくれたから、私は私を助けてくれた恩人を助けられた。イリヤとミユを止めることが出来た」

そう言つて私はエミヤに向けて、優しげに微笑んだ

「だからさ、エミヤ。私を、みんなを救つてくれて、ありがとう」

私が彼に、ずっと言いたかつた感謝の思い

それを、告げるとエミヤは瞳から涙を流した

そのあと、エミヤは元の様子に戻つたので、私がカルデアの特定の人物以外に真名を伝えていない理由を話した

「なるほど、だから君はC.C.と名乗っている訳か」

そう言われ、私は頷いて返す

「確かに、彼、彼女らに君の正体がバレたら面倒な事になりそうだ」

「でしょ？ そう言えば、私って貴方の血から生まれたわけだし、一応私も貴方の妹、な  
のよね？」

「む、確かにそうだが」

「なら、私は貴方の事をこう言おうかしら。兄さんって」  
ふと思つたことを口に出してみた

だつて、そうじやない?

私にはエミヤの血が流れているわけだし

「に、兄さんだと!? それだと回りから誤解されるし、何より正体がバレるだろ戯け!!」  
「どうかな?」

そう言うと、エミヤは大きなため息をすると、口を開いた

「はあ、分かつた。兄さんでいいが、奴らにバレても私は知らんからな。」

「えへへ、ありがとう。兄さん♪ それじや、私は自分の部屋に戻るわ」

そう言つて服装をワンピースに外套を羽織つた姿に戻り、フードを被る

「そうか、なら送ろう。このカルデアにはお前のような奴に手を出すような輩がいるからな」

うわあ、なんか頭に一人しかそう言う人が浮かばない

たぶん、あの人何だろうなあ

黒い髪でデュフフな人なんだろうな

そう思い、兄さんと部屋を出た

「あ」

部屋の目の前には青い全身タイツのような服を着た男、アイルランドの貴公子  
クー・フーリンがいた

「あ」

その場に数秒間、沈黙が流れる

「お前、まさかそんな嬢ちゃんと部屋で……そんな趣味があつたのか……」

「誤解だランサー！」

「すまんって、別にとやかくは言わねえがその、まあ、なんだ……大事にしてやれよ、じや  
あな！」

そう言つて、クー・フーリンが走つていくのを、私は呆然と見ていた  
「ごめん、兄さん。早速迷惑かけちやつて」

そう言うと、エミヤは外套の上から私の頭に手を置いて撫でた  
「気にするな。まあ、ランサーの事は私が今から話して誤解を解く」

「そつか」

そう言つて私はエミヤに私の部屋まで送つてももらつた  
クー・フーリンの誤解、直ぐに解けるといいけど

# おうどん美味しい b y クロエ (C. C.)

C. C. side

クー・フーリンに誤解された後日

朝、私は部屋にあつたベットから起きた

「やつぱりこれらがあればよく眠れるなあ」

そう呟きながら投影した掛け布団とお父さんにかつてもらつた枕変わりにしている

肉球のクツショーン、パジヤマ変わりのペンギン（リヴィアイアサン）服を見る。

考えてみれば、用事がなければ私はここから出なくても良い訳よね？

なら、話しは簡単

私は再び熱が少し残つたベットに潜り肉球のクツショーンに頭を預けて布団に籠る  
二度寝である

ついてだが、私は自室では流石に何時もの猫耳パークーか戦闘時の服か何時ものワン  
ピースを着ている

流石に自室でも姿隠してたら疲れるし

それじゃ、お休みなさい♪  
そん感じで布団に潜り目を閉じた

エミヤ side

「そう言えばさ、C. C. つてまだ起きてないのかな？」

厨房で料理していた俺はそんな会話を聞き、手にした作業を止めた  
「そう言えばそうですね、食堂にもいらっしゃらないようですし。寝坊でしようか？」

クロエ……C. C. が起きてきていない?

「うーん、もしかしたら寝坊かな?」

「たくさん寝る方なんでしょうか?」

それを聞いて、頭の中で昨日の会話が頭に甦る

もしかしたら、例の過去の夢を見て魘されているのではと考えながら時計を見る  
時刻は朝の9時を過ぎたと言つたところ

他のサーヴァントは一部を除き、ほとんどが起きてくる。その中には勿論だが

C. C. ; 彼女のオリジナルであるあの三人もきちんとした時間に起きてきている  
流石に起こした方が良いか

だが、今厨房を離れるわけには……いやアルトリア達がまだ来ていない今の方が良い

か

「ブーディカ、少しここを任せて良いか?」

隣で同じく調理をしていたサーヴァント、古代ブリタニアの女王ブーディカ。

「エミヤがそんな事を言うなんて、なんか珍しいね」

「少しな。寝坊している奴を起こしに行くだけだ」

「寝坊? まだ大丈夫だけど、早めに戻ってきておくれよ? 私だけじや騎士王様の相手は  
無理だからさ」

「了解した」

そう言つて厨房をブーデイカに任せ、C. C. の元に向かう  
俺がC. C. と始めてみた時に幻視したあのボロボロの服を見に纏い酷く痩せ細つ  
た、生氣のない濁つた瞳をした少女の姿

あれは恐らくはC. C. が言つていた家もなくご飯も食べられなかつたときの彼女  
なのだろう

なぜ幻視したのかは分からぬが、俺は出来るなら彼女にたくさんの料理を食べて貰  
いたいと思つた

それに、いくらクローンとはいへ彼女は子供だ

朝にちゃんと起きて、食事を取つた方が良いだろう

そう思い部屋の前に着く

「C. C. 、入るぞ」

そう言つて部屋に入る、ベット以外に何も置かれていな部屋

何故かベットの上に掛け布団がかけられ、枕らしき場所には猫の肉球と思われるデザ  
インのクツショソンが置かれている

布団の一部が盛り上がつてゐるので恐らくはそこに寝てゐるのだろう  
ベットに近付き、掛け布団を捲る

すると何処かで見たことがあるようなペンギンらしき服を来たクロエが猫のように丸まつて寝ていた

起きているときは違い、見た目らしい姿に少し笑つてしまふ

「クロエ、そろそろ起きろ」

肩を揺すりながら声をかける

するとクロエは目を擦りながら薄く目を開け、私の方を向きふにやりと笑つた

「にうに？」

「ブツ!?」

あまりの予想外な発言に思わず口を片手で押さえる  
一方クロエは寝ぼけているのかボーッとして伸びをした

「んー、と。あれ？ 兄さん、なんでここに？」

そう言いながら目を擦りクロエがベットから降りる

「寝過ぎも良くないと思つたのでね、起こしに来たと言う訳だ」

「ありがとう兄さん。それじゃ着替えてから食堂行くね」

「ああ」

そう言つて俺はクロエの部屋を出て厨房に戻つた

C.  
C.  
s i d e

兄さんに起こして貰い目を覚ました私はいつものワンピースに外套の姿に戻り、私以外誰もいないテーブルで兄さんの作つたご飯を食べていた

朝御飯は、海老天うどん

うどんの汁がたっぷりと染みて更に美味しくなった海老天を齧り、モチモチとしたコシのあるうどんを啜る

「あー！ クロー！」

「ツ?」

体がビクリと動く、バレないようにそっと声の聞こえてきた方を目で追う

そこではオリジナル組の恐らくはイリヤの皿からクロエが主食の何かを取つて食べたのか喧嘩が怒つていた

一緒にテーブルに座つているカルデアロリ組がアワアワしている  
「もー、ちょっとぐらいいいじゃない！お・ね・え・ち・や・ん♪」

「こういう時だけ姉の座を譲るの!?」

「落ち着いてイリヤ、私のあげるから」

「ありがとー美遊大好きー!!」

即落ち2コマかしら？

それにも元気ね、子供って凄い

そんな事を思いながら安堵し視線を戻す

すると私の前で白い服に金色の装飾がされたドレスを来た銀髪の女性  
「切嗣の所はもう埋まつてるし、エミヤオルタ君の所も駄目、イリヤちゃん達はお友達と  
食べてるし……」

アイリスフィール「天の衣」が料理の乗つたお盆を持ってうろうろしていた

そう、私のオリジナル達の母親で私が一番正体バレを恐れ、会わないように避けてい

た人だ

「あら？ 貴方一人？ 良かつたら、一緒にしてもいいかしら？」

流石にこれ以上料理を持つてうろうろするのは可哀想

それにせつかくの料理と冷めてしまってるので領いて同意を示す

「ありがとう、助かつたわ！」

そう言つて私の向かいに座るアイリスフイールさん

「あ！ C. C. ーーー！ おつはよーーー！」

そう言つて私たちの席にアストルフオが走つてきた  
凄い、料理が全く崩れてないままだ

「あれ？ もう一人いた？ ねえねえ！ 貴方はだれ？」

「私はアイリスフイールよ、アストルフオ君……でいいのかしら？」

「うん！ ねえねえ、僕達も一緒にご飯食べてもいい？」

「私はいいけど、貴方は？」

そう言つてアイリスフイールさんがこちらへと向くので領いて同意する

「ジーク！ こつちこつち！」

すると、ジークも向こうから料理を持つてこちらへと歩いてきていた  
「待たせてすまないライダー。すまない、オレもここにいれて貰つても良いだろうか？」

「あらあら、勿論良いわよ」

アイリスファイールさんがそう言うとアストルフォがアイリスファイールさんの隣、私のとなりにジークが座る

カルデアの食堂のテーブルは普通より少し長いので1つのテーブルに6人ぐらいは座れるので幅も余裕だった

「それにしても一気に賑やかになつたわね」

そう言つて嬉しそうにする微笑むアイリスファイールさんを余所に私は黙つてうどんを啜る

取り敢えず話さずにいれば私が声でクロエだとバレることはない

それにもしても流石兄さんね

天ぷらもうどんも汁も全てが完璧で美味しいわ

それにしても、転生したてのときじやエミヤ兄さんのご飯が食べられるなんて考えたこと無かつたな

そう思い食べている中、ふと視線を感じアイリスファイールさんの方を向く

アイリスファイールさんは自分の料理を食べながら私が食べるのを見てニコニコしていた

私は何がなんだか、分からず頭を傾げる

「あ、いいのよ。気にしないで続けて続けて」

そう言われ、私は取り敢えずうどんを食べるのを再開する

「はあ♡癒されるわあ♡」

「だよねだよね！C. C. がご飯食べる時つてさ、凄く幸せそうで可愛いんだよね！ジーグもそう思うでしょ？」

「ああ、普段とはまるで違い、小さな女の子みたいだ」

そんな話を聞き、顔が熱くなるのを感じて急いで残りのうどんを平らげ汁まで飲み干し、一息つく

私はうどんの入っていた椀の乗ったお盆を持って席を立ち、軽く会釈して返却口に向かうとちょうど兄さんが対応していた

「兄さん、ごちそうさまでした」

そう言つて返却口にお盆を置くと、私の隣にも食べ終わつたらしき食器が乗せられたお盆が置かれた

ふとそちらを見る、青いタイツのような服を来た男、クー・フーリンだつた

「お、昨日の嬢ちゃんじやねえか」

私は取り敢えず軽く会釈をしてみる

「昨日は悪かつたな、ちよいと早とちりしちまつてよ」

「別に、気にしてないわ」

そう言つて食堂から出て自室に向かおうと足を進め  
「待て、そこの駄作」

「っ!」

そんな声が聞こえ、私は足を止めて振り向くとそこには黄金の鎧に身を包み、赤い目  
をした男

英雄王、ギルガメッシュが立っていた

クロエが何故ギルガメッシュに呼び止められたのか?

クロエの持つこれとは?

その二つの謎が明らかになる

次回

『決戦、人類の裁定者VS■■』

お楽しみに

# 決戦、人類の裁定者ＶＳ天使

C. C. side

私を呼び止めた英雄王に私は警戒しつつ答える

「駄作？私の事がしら」

取り敢えずそう言つて私は外套を深く被る

ふと周囲を見回すと、英雄王が私に話し掛けたのが原因かほとんどの人が食事を止めて私達の方を見ていた

「戯け。人間でもホムンクルスでもない貴様は雑種以下、故に駄作としか言えまい」

なるほど、私がクローンつて事はバレてるつて事ね

「で、そんな駄作にかの英雄王サマは何のようかしら？」

「ふん、今の我是機嫌が良い。故に我に対するその言葉遣いと態度は許そ、我の寛大さに感謝するが良い」

「そう言つて英雄王は私いや、正確には私の腰に指を刺した  
駄作にしては、面白い物を持っているようだな？」

そう言われ私は思わず腰のベルトに付けたこれを右手で押さえて下がる

恐らくはこの世界に存在しないこれにギルガメッシユは興味を持ったのだろう

当然だ、これはマイ・ロードから賜つたモノで言うならここでは無い世界のモノなのでから

「貴様には過ぎた代物だ、それに我の知らない、宝物庫に存在しない宝具。それを我に献上せよ、駄作」

「断るわ」

これは私がマイ・ロードから与えられた

クロエの偽物、クローンである私が

クロエではなく私であるという証明

そんなモノ、絶対に他人に渡したくなんてない

速攻で拒否すると、ギルガメッシユの眉間にピクリと動いた

ギルガメッシユは額を片手で押さえる

「聞かなかつた事にしてやろう、それを寄越せ。駄作」

「何度も言われても駄目よ。諦めな——」

その続きを言うことは出来なかつた

ギルガメッシユの後ろに現れた黄金の波紋から射出された武具が目の前まで迫つて

いたから

私はとつさに投影した干将莫邪で直撃を防ぐが、射出された武具の勢いでそのまま後ろに吹き飛ばされてしまう

「かつはつ!?」

壁に叩きけられ、肺の空気が吐き出され地面に倒れる

「C. C. !? どういうつもりだ！英雄王！」

厨房の兄さんが慌てて出てくると直ぐに英雄へと向き直り叫ぶ

「黙つていろ!フェイカ」  
「作者、私は貴様ではなくそこに倒れている駄作と話している」

先程食べた物が上がってくるのを感じるが、どうにか押さえ咳き込んでしまう

「ゲホッゴホッ!?」

口元を片手で押さえる、前みたいにクローンとしての寿命で咳き込んで血を吐くことはないが苦しいのは慣れない

「ふえ!?!だ、大丈夫ですかー!?!」

「昨日の奴！生きてるんでしようね！」

そう言つて倒れた近くの席に座っていた二人イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとクロエ・フォン・アインツベルンがそう言つて近寄つて来て、途中で止まつたいや、外套で隠れているはずの私の顔の部分を見て驚いていた

そして食堂のサーヴァントも私を見て止まつていた  
私は立ち上がりながら自身の体を見下ろす

「つ！」

恐らくは先程の英雄王の攻撃を防ぎ吹き飛ばされたせいで被つていた外套が外れ、素顔が晒されていた

「えつ！？うそ、クロが二人……」

「わた、し？」

私の、クロエ・フォン・アインツベルンと同じ顔、容姿の私に食堂の全員が驚いたのだろう

「ほう、どんな顔をしているかと思えば、貴様はそこの雑種の事を模様した駄作であつた  
か」

「チツ」

思わず舌打ちして遅いとは思うが、もう一度外套を被る

「英雄王、貴様まさかこの為に……」

「違うぞ賤作者。フェイカ」 我は奴がもつその腰に付けた神造兵装を寄越せと言つたが、我の誘いを奴が断つたので攻撃しただけだ

そう言つてギルガメッシュは私の腰に着けた青と黄色のガジエットのようや見た目

のアイテムを指差す

「神造兵装だと!?」

「あんた、なんで私と同じ見た目なの!?」

私の近くに来ていたオリジナルのクロエが私に向かってそう言つた

「何故貴方と同じ姿か? 悪いけど、答えるつもりはないわ」

そう言つて私はギルガメッシュへと歩く

「C.C.! 何を!」

「ギルガメッシュ、貴方にこれは渡さない。これは私がクロエでなく私であるという証明、欲しいなら」

そう言つて私はギルガメッシュを睨み付け

「私に勝つて奪い取つて見なさい」

そう言つて私はギルガメッシュへの喉元と無名の剣を向けた

「ふ、ふはは……フハハハハハ! 思い上がつたな駄作、貴様のような駄作がこの我に挑むとは、面白い。ならばシミュレーションルームとやらで貴様と戯れるとしよう、待つているぞ、駄作」

そう言つてギルガメッシュが食堂を出ていくのに続き私も食堂の外へと向かうが、そ

の前に私のオリジナルや兄さんの方を振り返る

「クロエとイリヤスファイール、そしてこの場のサーヴァントに隠していたことは謝るわ。  
そしてクロエ、私は確かに貴方の容姿をしているけど、私は貴方とは全く違う、瞳の色  
……違うでしょ？」

そう言つて私はフードを軽く脱いで見せる

「本当ね、黒と赤……」

「まあ、少し前までは両目とも赤だつたんだけどね。それじゃ、私は行くわ」

そう言つて食堂を出てシユミレーションルームへと向かう

C. C. (クロエ) side

「待たせたわね、英雄王」

「そう言つて戦闘フィールドに入ると、マスター達の前に私とギルガメッシュを囲うようく結界のような物が張られる

「さあ、我にソレを献上する準備は出来たか? 駄作」

「悪いけど、献上する準備なんかしてないわ。これは私のモノよ」

「そう言つて被つていた外套をはずし腰のベルトに付いている青と黄色のガジエットの中央に埋められた透明な宝玉に手を翳す

「ピピッ! ジヤツチメントの起動を確認。

『Chloé von Einzbern』適正ユーモアです』

「ほお、ソレを使うか」

「ええ、この体はクロエの力であり宝具は英靈エミヤと同じ。なら私は私の**宝具**で貴方に

勝つ

すると何かのロックが外れたような音がしたので私はそのアイテム……ジャッチメントとなつたアイテムの柄となる部分をスライドさせ、右手で持ち胸の辺りで横薙ぎにするよう構える

〔Standing by〕

その音声と共に待機音のような物が流れる

「これは 我が主神より賜りし神の剣。

真名解放、起動せよ！

生命を司る神ノ剣！」

そう言つてジャッチメントを横薙ぎに振るう  
〔生命を司る神ノ剣、起動〕

とジャッチメントから光の刀身が展開され剣の  
となる

「で、準備は整つたか駄作？」

「まだよ」

そう言つて私は目をつぶり、生命を司る神ノ剣の宝玉に左手を翳す

〔封印、解放。〕

シャル、リリース

我が身は贋作を越え天へと至る

モードセラフ  
熾天使状態

そう言うと私の体の魔術回路が開き、ジャッチメントを通して何かが背中と頭へと流れれる

すると背中の何か……三対の翼が解放されバサツ！と広がる

それは神の眷族の証、輝く黄金色の翼

眷族となり天へと至つたモノの純白の翼

自身の父から受け継いだ漆黒の翼

頭部の上には光輝く光輪が現れ浮かび上がる

私はジャッチメントを片手で刃を英雄王へと向けて構え瞳を開く  
「降臨、完了。さあ、始めるわよ英雄王……覚悟はいいかしら」

そこには、3対で金、白、黒の翼を生やし色の抜けた銀髪の上には光輝く天輪が浮かんでおり光輝く剣を持った天使が立っていた

s i d e   o u t

三人称

シミュレーションルーム、普段は英靈が鍛練等を行う場所そこには戦闘フィールドに一人のサーヴァントが佇んでいた  
黄金の鎧を身に纏い、腕を組んでいる男性

## 古代ウルクの王、ギルガメッシユ

彼がこの部屋を使う事はまずあり得ないため、この部屋を使っていたマシユと立香は不思議に思っていた

そんな中、シミュレーションルームの扉が開き入ってきたのは外套を羽織りフードで顔を隠した少女、C・C・

そしてC・C・は立香に気付き、口を開いた

「マイ・マスター、私の正体……バレたわ」

「え!?

「だ、大丈夫だつたんですか!?

「ええ、姿が見られただけ。後でドクターや所長達に伝えておいて」

そう言つて少女はバトルフィールドに向かつた所で再びシミュレーションルームの入り口が開き、エミヤ、イリヤスフィール、クロエ、美遊、アストルフォ、ジーク、アリスフィールが入つてくる

「マスターさんもいた!?

「どうしたんですか皆さん?」

「皆がのここにくるのはまだ先の時間じゃなかつた?」

「マスター、私たちは彼女の……C・C・の戦いを見に来たのだ。実は——」

そう言つてエミヤから先程食堂で起きたことを聞いた立香とマシューはまずC. C. が神造兵装を持つていることに驚いた

「なるほどね、話しあだいみたい分かつたよ。大丈夫、もしもの時は令呪を使つてギルを止める。」

「なら一安心と言つたところか」

そして今、人類の最古の王と作られた存在であるクローンによる宝具をかけた戦いが始まろうしていた

『真名解放…………起動せよ！ 生命を司る神ノ剣！』  
Start up ジャッチャント

バトルフィールドのC. C. が青と黄色のガジエットを振るうとアイテムの先から光の刀身が現れ剣としての姿を表した

「何あれ!? 特撮!? ルビーより魔法少女っぽい!!」

「ひどいですよイリヤさん！ 私より魔法少女っぽいアイテムなんて古今東西あるはずありませんよ！」

「何なの、あれ…………」

「うおー！ あれがC. C. の…………なんだつけ？ とにかくカツコいい！」

「神造兵装だ、ライダー。それにしても前からあの持ち物が何なのか気になつていたが、まさか神造兵装だつたとは」

「それにしても、あの人にあの神造兵装1つで勝てるのかしら？」

「わからん。だが、今はC・C・が勝つ事を祈るしかあるまい、問題はこの後だ」

「そう言うエミヤにマスターが少しより小声で話す

「エミヤは知つてたんだね、C・C・の事」

「ああ、彼女が召喚された夜に話があると言われてね。驚いたよ、アルトリア達やイリヤ達で耐性は付いてたつもりだつたんだがね」

「エミヤ、もしクロエやイリヤ達がC・C・の過去を知れば、一体どんな風になつちやうんだろ」

「…………恐らくだが、C・C・は話すことは無いだろうな。」

「え？」

「それほどに、彼女が抱えているものは大きいと言う事だ……ツ!?」

その時だ、クロエは手にした剣に埋められた何かに手を翳す

するとC・C・の魔術回路を通り、持つていた剣から何が伝い背中にたどり着くのを

エミヤは見た

『封印、モード  
シール、セラフ  
解放。 我が身は贋作を越え天へと至る、熾天使状態』

そして次の瞬間、C・C・の姿が変化した

頭に天輪が浮かび、三対の金、白、黒の翼を広げまるで天使のような姿へと

その姿にその場にいた全員が息を飲んだ

「先輩……あれは一体!？」

「嘘、だよね…………てん、し?」

ギルガメツシユと向かい合うC. C. にその場の全員が同じ言葉を頭に思い浮かべるなか

「あの私は、一体何なのよ…………」

困惑したような、複雑そうな様子のクロエの声が静かに消えていった

クロエ「C・C.」side

「思い上がつたな、駄作」

そう言つてギルガメッシュが背後に黄金の波紋、<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>王の財宝が現れ、武器が数個程射出される

「ハア！」

私は即座に生命を司る神ノ剣を振るうと、<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>王の財宝から射出された武器が弾かれ碎ける

この剣は例えるなら特撮の剣のおもちゃくらい軽く刀身の威力は高いため軽々く振り回せるために使いやすく、捌きやすい

「ほう、駄作にしてはやるではないか。だが、これは捌ききれまい」

それを見たギルガメッシュは更に黄金の波紋を増やし、大量に武器が射出されてくる  
私は即座に地面を蹴り真上へと飛翔する、すると先ほどまで私がいた場所には大量の

剣が刺さっていた  
エルキドウ

「天の鎖！」

すると、即座に私の元へと黄金の鎖の先に槍のついた宝具。

天の鎖が私を捕まえようと飛来してくるのを体を捻り回避しそのまま飛び続けるが、  
エルキドウはずつと追いかけてくる

「なら！」

私はスピードをあげて飛び、急停止して上昇する

すると私の居た場所を天の鎖が通り抜ける

「こーーー！」

私はそれを生命を司る神ノ劍を振り下ろして上から斬りつけ、鎖を切り離す  
ジャッ チ メン ト

ギルガメッシュの射出する武具を弾いては身を捻り避ける事を続ける

私の宝具は、あまり戦闘向きでは無い

戦闘はこなせるし、やろうと思えば人を殺すことだって出きる

でもそれは生命を司る神ノ剣として扱つた場合だ、宝具として扱うならあまり意味はない

なら短期決戦のみ、ギルガメツシユの持つ宝具である乖離剣エア

あれを抜かせずに私に勝つしか道はない

私は天井へと上昇しながら、私へと向かつてくる武具を生命を司る神ノ剣で斬りつけ、上昇する

そして体を捻り足を天井へとつける、そして天井を蹴りつけ加速しながらギルガメツシユへと向かう

「なっ!?

今の私の飛行速度は先ほどの倍、天井を蹴つたことによる勢いで更に速さが上がつている

ギルガメツシユの射出してくる宝具を最低限の動きで避けスピードを出来るだけ落とさずに向かう

そして私はギルガメツシユの喉元にあと数センチで届くと言つた場所に  
生命を司る神ノ剣を向ける

「チエツクメイト。私の勝ちよ、英雄王」

「なにも言うまい、貴様の勝利だ。誇るが良い駄作よ、貴様はこの我に、英雄王である我

に勝つたのだ』

するとフィールドの結界のような物が消えていく

「てっきり、諦めずに向かってくるのだと思つたのだけど」

「ハツ、もう良い。それにただの神造兵装ではなく神の剣だと? そんなもの我には不要だ。」

そう言つて英雄王、ギルガメッシユはシミュレーションルームから去つていった

〔真名〕第二製作体E型257—I—IK

『Chloë von Einzbern』

〔キャラクター詳細〕

異世界にてクロエ・フォン・アインツベルンをも模して作られたクローン。他にも『アーチャー』『アヴェンジャー』の適正がある。それは彼女の過去によるものであり、彼女の過去を知るものは少ない。

〔筋力〕：B      〔耐久〕：A

〔敏捷〕：B      〔魔力〕：EX

〔幸運〕：C      〔宝具〕：B+

〔出典〕：ハイスクールD×D (IF)

〔地域〕：日本、駒王町

〔属性〕：混沌・善

〔性別〕：女性

〔クラス〕フォーリナー

〔クラススキル〕

〔転生神の加護〕

最初のターン攻撃を回避

〔鮮血の妖精〕

コマンドをクロエで統一すると攻撃力UP

〔雪と月の加護〕

どんな攻撃でも必ずHPが1だけ残る

〔保有スキル〕

〔投影魔術A+〕

アーツ、クイック、バスターの攻撃力上昇

〔抑止の代行者EX〕

全員に攻撃力強化、スター20獲得

〔生存A〕

5ターンの間、仲間と自身に持続回復&amp;ガツツ。

※幕間の物語クリアで解放

〔抑止の代行者〕 → 〔熾天使状態B〕 に変化

2ターンの間モードセラフになり、宝具が『生命を司る神ノ剣』に変化する。

〔宝具〕

〔無限ノ剣製 《むげんのけんせい》〕

無銘の剣を掃射しつつミユの銃剣『干将・莫邪』で銃撃後、イリヤのエクスカリバー モルガンを放つ。

ごく稀にエクスカリバー モルガンを持つクロ工の手に手を添えている少女達が見ら れるらしい

※某有名剣アニメの絶剣と閃光みたいな感じです

※第4再臨、幕間の物語クリア後に解放

〔生命を司る神ノ剣 《ジャッチメント》〕

C.C. の手にした剣で味方のサーヴァントを刺し全員復活させ、毒なども回復する 第96転生神ノアがクロ工の事を信頼し与えた。主人公を転生させた元転生神の 使っていた剣、普段はクロ工が腰のベルトから下げているアイテム。まるで特撮やアニ メを思わせるような剣。クロ工が再転生した後日にクロ工の元にこれが届いており、クロ工が持つ投影品ではなく神造兵装で彼女の第2の宝具である。

『待機形態』と『戦闘形態』『熾天使状態』が存在する

戦闘形態で「裁定、生『ジャッジメント アライブ』」と宣言することで剣で刺した相手が生きている限りは、例え瀕死や毒等を抱えていたとしても奇跡と言えるような完全治癒を行う事が出来る。

### 【熾天使状態】

クロエの背中から金と黒と白の翼が三対、計六翼が現れ頭上に天使の輪が浮かんでいる状態へと変化する。身体能力が強化され飛行することが出来るようになるが、ジャッジメント以外の武装（投影等）を扱うことは出来ない。

『靈衣』『お父さんとの思い出』

C・C. を引き取った人物がその店で似合うものを買い与えた時の服。

とある黒猫が悪戯で0・8%の確率で語尾に『にや』が付く仙術をつけたとか、付けてないとか。

発動すること事態が稀である

### 【戦闘】

『Arts』

銃剣【干将・莫邪】での射撃、斬りかかり

『Quick』

通常の【干将莫邪】で転移して斬りつける

## 『Buster』

エクスカリバー モルガンでの斬撃

## 『ExAttack』

木場の聖魔剣【双霸の聖魔剣】で斬り着けた後には、射殺す百頭で攻撃する。

## 【ボイス】

## 『召喚』

「サー・ヴァント、アーチャー。こんな偽者を召喚するなんて、よっぽど運がないのかしら。ま、呼ばれたからにはしつかりやることはやるわよ。」

## 『スキルボイス』

## 「投影、開始（トレース・オン）」

「待つてて、直ぐに終わらせるから」

「私は、生きる！」

「マイ・ロード、私に勝利を」

## 『宝具ボイス』

「これは、私の得た“答え”——」

「イリヤ、ミユ……力を貸して」

『戦闘開始』

「マスターの指示（オーダー）を確認。mission start……」

「私も……戦う」

『戦闘終了ボイス』

「私は、生き抜かないと行けないの」

「敵の殲滅を確認。マスター、次の指示を」

『敗北ボイス』

「マスター、ごめん、なさい」

「イリヤ、ミユ……いま、いくね」

『レベルアップ』

「…………なんで私を？別に、なんでもないわ」

「私よりも、魔法少女達の方を強くしてあげた方が良いんじゃない？」

『靈基再臨1』

「悪いけど、何をしても私はこの姿のままよ？」

『靈基再臨2』

「はあ、私なんかを育てるなんて……物好きなのかしら」

『靈基再臨3』

「はあ、バレちゃつたら仕方ないわね。外套は取るわ、もう意味はないし」

『靈基再臨4』

「降臨…………マイ・マスター、貴方はバカね。こんな偽物にここまでしてくれるなんて。

ありがとう」

『靈衣解放』

「どう、マイ・マスター。この格好、どこか変だつたりしないかにや…………／＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

!?…………後での黒猫しばくわ。」

『マイルームボイス』

『会話』

「何で私が偽者かつて？そんなの私があの子のクローンだからに決まつてるでしょ」「はあ、まさか私もここに来ることになるなんて……思つたことも無かつたな」

「マスター、貴方は過酷な運命を乗り越えて進んできた。これからもそうなる、だから1つだけ。諦めないで、そうすればきっと道は開けるから」

『カルデアにプリヤ組がいる場合』

「私はあの子達とふれ合う権利なんてないわ。私は、あの子達を殺したのだから」

『イリヤスファイール・フォン・アインツベルンを所持』

クロエ 「話しかけないで。私は、偽物で穢れてるから」

イリヤ「え……今、クロが向こうに？あれ！こっちにも！？いつたいどうなつてるのー！」

《クロエ・フォン・アンツベルンを所持》

Chloe「何故貴方と同じ姿か？悪いけど、聞いてて良い話しじやないから、答えるつもりはないわ」

クロエ「貴方、なんで私と同じ姿を…………そ、なら別にいいわ」

《遡月 美遊を所持》

クロエ「『話しかけるな』と注告はしたわ。これ以上私に近付かないで…………また傷付けたくないから」

美遊「貴方は、クロじやない。一体誰なの？」

《カルナ（槍）を所持》

クロエ「あ……なんでもない。なんでも、ないから」

カルナ「なんだろうか、あの少女は。何故時折俺の方を見る？」

《シトナイを所持》

クロエ「そつか……そつちの方も居たんだ。貴方なら本当の事を……いや、何でもないわ」

シトナイ「何？相談か何か？それなら任せて！これでも私、お姉ちゃん何だから……つて、行つちやつた」

### 《エミヤ（弓）を所持》

クロエ「貴方には感謝しかないわ、貴方が力を貸してくれなかつたら……何も出来なかつたから。だから、ありがとう。」

エミヤ「以前に私の座にアクセスしてきた者がいたのを覚えてあるが、君だつたのか」

### 《千子 村正を所持》

クロエ「うそ、村正？ 実装されてた、いや召喚されてたのね…………ほしかつたなあ」

村正「ん？ なんだ、お前？ それに欲しかつたつて、儂の刀の事か？」

### 《カルナサンタを所持》

クロエ「お願い、少しでいいから……今は一緒に居て……」

カルナサンタ「俺はサンタだ。それをプレゼントとして望むなら、お前の気が済むまで共に居よう。元、マスターよ」

### 《紺レベル》

紺レベル1

「マスター、何か用？ 私の様子を見に？ なんでそんな無駄な事をするの？」

紺レベル3

「マスター、悪い事は言わない。私なんかよりも魔法少女達の方に構つてあげて。私は独りでいいから。」

## 絆レベル4

「なんで、マスターは偽物の私なんかに構うの？」

## 絆レベル5

「お父さん……私、変われたかな？鮮血の妖精から正義の味方に。うん、そうだね……忘れてた。私も自由に、幸せに生きないとね。マスター、私は偽物だけど、一緒に頑張つていいかな？うん、改めてよろしくね」

## 《好きなこと》

## —絆レベル1—

「私とはあまり関わらないで」

## —絆レベル5を越えている場合—

「うーん、ご飯をお腹いっぱい食べる事と……あとはお風呂に入る事と家族、かな。これしか好きな物……知らないから」

## 《嫌いなこと》

「嫌いなもの？私の居場所を奪う人、それと何も出来ないくせに文句だけ言つてくる人かな」

## 《靈衣について》

「この服、お父さんが初めて一緒に出掛けた時に買つてくれた服なんだ。凄く大切なんだけど、あの黒猫のせいで少し着ずらいんだよね、語尾に『にや』なんて……恥ずかしすぎる」

### 《聖杯について》

「住む場所と美味しい飯と家族がいれば、他に何も要らないわ。へ？もつと夢を見るべき？…………じゃあメロンパンを沢山、お腹いっぱい食べたい」

### 《イベント開催中》

「何だか騒がしい、何かあるのかな？」

### 《誕生日》

「お誕生日おめでとうマスター。今日は誕生日は最高に楽しい日にしてね、そうだ！兄さんよりは劣るけど誕生日プレゼントにケーキ焼いてみたよ、私のプレゼント、受け取ってくれる？」

### 《絆礼装》

### 〔私の生まれた日〕

真ん中にはその瞳に涙を浮かべながらも幸せそうに笑う少女がいる。

そんな少女を囲むように茶髪の元気そうな少年

優しそうな顔をした金髪の少年、無表情に見えるが僅かに口角が上がっている白髪の

少女

金髪のロングヘアで可愛らしい少女、赤髪でどこか高貴さを感じる少女  
ネコミミと尻尾を生やした和服を着た女性

他にもツインテールで神官服の少女や魔法少女のコスプレをした少女  
和服を着てクロエの肩を抱いて笑っている黒い髪が所々見える金髪の男性  
赤髪で高貴な服装の男性と、そんな男性に寄り添っている銀髪のメイド  
優しそうな顔だが鎧を身に付けたロングヘアな男性

日本人らしい見た目の二人の女性に並んでいる体格の良い男性  
等の個性豊かな人物たちが笑っている。

そんな彼らの後ろの大きなホワイトボードには『クロエ、お誕生日おめでとう』と書  
かれている

これは夢く絶望しかなかつた世界で生き延び続けていた少女が得た初めての幸福  
そして家族や友達達と撮つた思い出の写真の一枚

奥の方では少女へと手を小さく振つて いる二人の少女が小さく写つている。

# 暖かい場所

C. C. 「クロエ」 side

「まさか、英雄王に勝つとはな」

兄さんの声が聞こえ、聞こえてきた方向を見るとエミヤの他にもマスター・ジーケ、そして私のオリジナルのクロエ達がいた

「この剣、渡すわけにはいかないから」

私は生命ジヤツチメントを司る神ノ剣シントの持ち手をスライドして仕舞い待機形態に戻して腰に着ける  
〔形態解除〕  
Deformation

すると生命を司る神ノ剣からそのような音声が聞こえると、背中の翼が私を包み込む

ようにしてから光の粒子のなつて消え、頭上の光輪も粒子となり消えた

「なんなの貴方は？私と同じ姿で、さつきの姿はなんなの？」

オリジナルのクロエはもう何が何だか分からぬと言つた様子で私の方を見つめる

「大丈夫、クロ？」

そんなクロエを心配したのかイリヤがクロエの手を握っている

「C・C・ 教えてくれないか。何故君がそこの少女と同じ姿なのか」

「大丈夫だよ、例えクロエがどんな過去を持つてもボクの友達には変わらないよ!」

「私も、知りたい」

ジーク、アストルフォ、オリジナルの美遊がそう言うのを聞き、もう隠すのが無理だとそう思った

「私が神靈の依り代にクロエを選んだ……何て言えたら、どれだけ楽だつたでしょうね」

そう言って私は少し笑つて話すこととした

「こことは違う世界、ある所に一人の科学者がいた」

きつともう後戻りは出来ないのだろう

私の先程のセラフを、私と言う存在を知られてしまったのだから

「C・C・?」

突然そんな事を言い出したマスターやみんなが不思議そうに私を見つめる

「その科学者はとある架空のキャラクターに心を奪われた」

「とにかく、聞いてみる他は無さそうだ。黙つて聞いてみようマスター」

「その科学者は狂っていた。その科学者は様々な人間の少女を拐つては解剖し各部位事に研究し、やがて一人の少女が作られた。

雪のようないき、琥珀色の瞳を持つた銀髪の少女……『イリヤスフイール・フォン・アインツベルン』と言う架空のキャラクターを模したクローンを

「…………え？」

「イリヤのクローン？」

「そして次に男はもう一人の少女を製作した。架空のキャラクターである『イリヤスフイール・フォン・アインツベルン』の友達キラであり謎の多き不思議な少女『遡月美遊』を模したクローン」

「え？…………ミユも？」

「やがてもう一人の少女が作られた。なるべく架空のキャラクターである少女に似せるため科学者はあるものを少女の体に入れた」

そう言うとエミヤの眉がピクリと動く、恐らくはあのときに話したことを思い出したのだろう

「あるもの？」

「どある紛争地帯にて入手した英霊エミヤの物と思われる血痕、少女の体に入れられた少女は科学者の最高傑作となるはずであった」

そこで一度言葉をくぎる、オリジナルのイリヤ達が自分達が架空のキャラクターになっていたことがよほど衝撃的だつたのか

ずっとぶつぶつと話し合っている

「はずつて事は完成しなかつたの？」

藤丸立香がそう呟いたのを聞き、私は話を続けることにした

「ええ、完成はしたが最後の処置が取られておらず未完成のままとなつた。クローンを作成していた科学者は抑止力により消され、その時に目覚めた2人の完成したクローン達は科学者の研究所から逃げ出し、研究所には一人のクローンが残された」

「イリヤと美遊のクローンのこと？」

「ええ。そして一年間放置されていたクローンの少女が何の偶然か目を覚ました。何が何だか分からぬいそんな混乱した少女の頭のなかにある情報が入つてきた。英霊エミヤと言う存在、投影魔術の使い方に戦闘技術。そしてその世界に存在する悪魔、天使、堕天使による三つの陣営の存在、人や悪魔に宿るとされる神器と呼ばれる力」「ほえくな、なんかクラスの友達が見てた異世界アニメみたい」

「そういうえばそんなのあつたね」

「天使と悪魔と墮天使の陣営……エミヤは聞いたことある？」

「いや、聞いたことがない。ましてや神器などと言う力も」

「その世界ではそのような種族が入るのか、不思議な場所だな」

「うん。なんかボク行ってみたくなってきたよ」

「そして少女と抑止力であるアラヤとの繋がりがあつた。少女は抑止力の指示に従い戦争地帯へと転移させられ大を救うため小を切り捨てる事を強要され、戦い続け一年。少女は生きることを諦めず行き続けていた」

その言葉を聞きエミヤは何処か思い当たる事があるのか右手で額を押さえている  
 「家もお金も身分証もない少女は路地裏で過ごしていた。毎日鳴り響く腹を押さえ、空腹を眠ることで誤魔化し、雨や雪の寒さに外套一つで耐え眠る。戦場では助けたはずの相手から罵倒され、少女は精神は弱り一つの幻覚を見た。少女は、やがて一つの答え行き着いた『自分は死ぬべき』だと」

急に先程より何処か感情のは言つた言い方になつてしまふ  
 その事に気付いたのは兄さんのみ

兄さんに説明したときはあまり細かくは伝えていなかつたため、酷く驚いている  
 他のメンバーも何処か悲しそうな表情で私の話を聞いていた

「そんな時、少女に手を差しのべた男がいた。その人物は墮天使の陣営のトップの男性。少女はそんな男性に拾われ1日を過ごした、そんな時、少女のいる町をとある事件が襲い少女はそれを退けるため、アラヤからの指示を受けて戦い向かつた。そしてその数日後、三種族が和平のため会談が開かれた。三種族による和平締結の為の会談、でもその場に和平を良く思わないもの達によるテロ集団が現れた。そこで少女は拾つてくれた

恩人を守るため戦い、英霊エミヤの固有結界を発動させみんなを守りきったとき、新たに2人の少女が現れた」

「私の固有結界を!」

「ええ。その少女はエミヤのDNAにより、宝具は貴方と同じ無限ノ剣製」

そう言つて私は話を続ける

「そして現れたのはクローンである少女イリヤスフィールとミュ。少女にこの世界を破壊する事を宣言、それをさせまいと少女はその2人と戦い、同じクローンである2人を殺した。だが、それと同時にその少女も寿命が尽きて死んだ」

「え? なんで、いくらクローンでも寿命が少なすぎるよ!」

「少女はクローンとしては未完成、少女には寿命に関して完璧な処置がされておらず短命だつた。最後に世界を救つた少女は死後、とある女神に少女の生き方を評価され、女神の眷族となつた」

そう締め括り私は、全員の顔を見る

恐らくはここにいる全員は今の話が誰の話かを理解したのだろう

「みんなも気付いていると思うけど、さつきの話の最後のクローンの少女が私、『クロエ・フォン・アインツベルン』を模して作られたクローン、真名は第二製作体E型257-1

II-K『Chloë von Einzbern』

「それじゃあ、C・C・がこの子達を避けてたのって」

「ええ、姿と名前が同じ少女を私は殺している。そんな私とは関わらない方が良い、ましてや仲良く話す権利なんて私には無い。だから私は貴方達を避けていた、これで分かつて貰えた?」

そう言うと皆が黙つて頷く

「じゃあ、ツーちゃんはこのまま私達と話さないでいたいってこと?」

「つ、ツー!? え、ええ、そうよ。」

アイリスファイールさんの質問に思わずそう答えた

「イリヤちゃんにクロエちゃんはどう? ツーちゃんと話さないのは?」

そう言うとイリヤスファイールが前に出る

「私は、C・C・ともつとお話ししたい。ずっと一人なんて寂しいよ? 私はC・C・の事は受け入れる。だってクロの時もなんかそうだつたし、C・C・が例え別世界の私を、似た人を殺していたとしても、私にはなにもしてない、だから大丈夫だよ!」

「あんた、さつき言つてたわよね。なら私達だって貴女の言う人とは別人なんだから、貴方が氣を遣う必要はないわ。イリヤと同じで私も貴方を受け入れる」

「2人が良いなら私も大丈夫」

オリジナル達はそう言つて私へと優しい笑顔を向ける

「つて事は……ツーは私の妹な訳よね？ツー、お姉ちゃんって呼んでも良いのよ？」

「あらあら。なら私はママかしら？」

「ちよつ!? クロだけじや無くて私もお姉ちゃんって呼んでよ!?」

そんなやり取りを見ていると、何故か心がポカポカと暖かくなるのを感じる

本来なら私という偽物が入ってはならないそんな場所に、私は入ろうとしている

私は、良いのだろうか

偽物の私が、本物の彼女らと仲良くするなんて、本当に良いのかな I l l y a 、 M

i y u u

貴方達を殺した私が本物の貴方達と仲良くするなんて、きっと

『もう良いんだよ、クロ。だから』

『私達はもう大丈夫。だから』

『幸せに、自由に生きて』

そつと、誰かに背中を押された気がした

私はみんなの方を向く

な、なんか自分の口から言うの、少し恥ずかしい氣がするけど

「マスター、兄さん、アストルフオさん、ジークさん、クロエ姉さん、イリヤ姉さん、か

：母さん……その、改めてよろしく…お願ひします」

そう言つていて私は何だか恥ずかしくなり外套のフードを急いで羽織る

「な、なんで……クロと同じ見た目なのに、なんか変なスイッチが入っちゃいそう

……」

「恥ずかしがつちやつたのかしら？うふふ♪」

「どうミユ！私もお姉ちゃんつて呼ばれたわ！」

「そう、良かつたね？」

「改めてよろしくねC・C・！」

「ああ、改めてよろしく頼むC・C・」

「良かつたな、C・C・」

「ふう、一件落着ですね、マスター」

「そうだね、マシユ」

少し恥ずかしくてなりながらも、私は笑つた

この何処か暖かくてずっと居たくなる友達や家族がいる場所で。

マイ・ロード、人理修復が終わつても暫くはこつちで暮らしてもいいかな？

天界の森、小さな粒子を体から溢しつつ消えていく2人の少女がいた  
「クロの事はもう大丈夫そうだね。ようやく、安心して逝ける」

「うん、次会うのは、また死んでからかな?」

「そうだね、ノアの眷族の件は保留にしちゃったから。それに、もしかしたら転生した先  
でまた会えるかも知れない」

「そうだつたらいいね、イリヤ」

「うん、ミユ」

「それじゃ、待たね」

そう言つて少女達は天へと昇つていった  
さて、遙か先の未来で彼女らがクロエと再び出会う日が来るのか?

それを知る者はまだ誰もいない

# 幕間の物語『イリヤスフィールの受難』

イリヤスフィール side

朝、私はとある戦いに勝ちC. C. こと

クロのクローンのツーちゃんを起こすためツーちゃんの部屋へとやつて来ていた  
部屋の扉を開き、部屋の中を確認する

まだツーちゃんは寝てる、よし！ ラッキーだよ私！

そう思いながら部屋に入りツーちゃんの寝ているベットへとゆっくりと忍び寄り  
布団の盛り上がっている所まで布団を捲る

そこにはまるで猫みたいに丸くなつて眠つているツーちゃんがいた

「……………ハツ!? あぶない、また前みたいに添い寝しちゃうところだった」

そう、少し前にツーちゃんが自分の正体を明かして、私達がツーちゃんを受け入れた

後日

寝ているツーちゃんを起こした私、クロ、ミュはこのように丸まつて眠るツー

ちやんに釣られ

ふらふらと布団に入りツーちゃんを囮るように寝てしまつていた  
で、結局はお兄ちゃん（エミヤさん）に起こして貰つちゃつたんだよね  
それで、どうして私がツーちゃんを起こすためにここに来たか？  
それは……

「ツーちゃん、朝だよ。起きて」

私は猫のように丸まつて寝てるツーちゃんをゆする  
「んう……」

……………ハツ！？

あぶない、なんか変なスイッチが入つちゃうところだつた  
するとツーちゃんが薄くを開いて眼を擦りつつ体を起こす  
でも、いつもとは違ひどこかボーッとした様子のツーちゃんが私の方を向く

「ねうね？」

「はう！…………はあ、はあ」

だめ、落ち着いて私！

変なスイッチ入つたらだめ！絶対にだめ！

そう、私やミユ、クロが朝にツーちゃんを起こす役をしているのは、この寝惚けたと

きのツーちゃんと触れあい、愛でるため

そう、ツーちゃんは朝起きたばかりの時は幼くなり、その時の記憶がないのだ  
たぶんツーちゃんが昔のあんな状態から、こうして普通に寝れるようになつたから  
なんだよね

「ね～ね、ぎゅー！えへへ」

と、いつものキリッとした感じの顔ではなくほにやあつとした笑顔で私に抱き付いて  
笑うツーちゃん

「はう……ツーちゃんが可愛すぎるよお」

こうして普段のツーちゃんじや絶対にやつてくれないハグや笑顔が見れるんだよ？  
そんなことを考えながらツーちゃんを抱き締め返して頭を撫でる

これは毎朝のツーちゃんを起こす人を決めるじやんけんで勝つた人しか獲られない  
特権！

じやんけん勝つてよかつたー！

それにしても、ツーちゃんつてクロのクローンだけど性格がまるで違うんだよね

前にこうなつたツーちゃんを見てクロが顔を真つ赤にしていたつけ

今じや、この状態のツーちゃんを見てても赤くならないけどね

ただ魔力供給しようとしたときは私とミユで止めた、全力で。

「…………あれ、イリヤ姉さん？」

「あ、おはようツーちゃん。朝だから起こしに来たんだよ?」

「そつか、ありがとう姉さん」

あ、戻っちゃった………

「ルビー」

『バッヂリ撮れでましたとも、イリヤさん!』

「ルビーグッジョブ!』

「YES!マイマスター!』

「何の話?』

「ツーちゃんには関係ないことだよ!』

「そう、なら良いけど……………』

そう言つて2人で部屋を出る

そういえば、カルデアではツーちゃんとクロを見分けるとき、腰のベルトにツーちゃんの宝具が付いているか付いてないかで判断してゐるらしいよ  
所長さんやドクターさんもたまに間違てるんだよね

# 少女の涙と英雄の追憶

C. C. 「クロエ」 side

「ほらほらツー、あーんして？お姉ちゃんが食べさせてあげるわ」

「クロエ姉さん、自分で食べられるよ」

「そんな事言わないでほら！あーん」

そう言つて私に卵焼きを差し出してくるクロエ姉さん

私はそれを頬張りゆつくりと噛んで食べる

やつぱり兄さんの卵焼きは美味しいなあ

「はあ♡この笑顔……癒されるわあ」

「つ、次は私のあげる！ほらツーあーん！」

「ツー、私のも」

そう言つて美遊姉さんとイリヤ姉さんもそれのおかずを私にも一口ぶん箸で摘

まんで寄せす

そんな様子を見守る厨房の2人工ミヤとブーディカ

「なるほど、やけにメインのおかずを小さく分けて欲しいと言われたが、あれが目的だつたか……」

「でも、あの子達の気持ちは分からなくはないね、なんでも美味しそうに食べててくれるし、作る側からすればあの顔ほど嬉しい事はないね」

「確かに。さて、そろそろ次のが出来るぞ」

「はいよ」

そうして厨房の2人が元の作業に戻る

「ほらほらツーーーあーん？」

「ひ、1人で食べられるよ姉さん達」

姉さん達と食堂でご飯を食べていると、1人の男が食堂に入つて來た

その男は白髪の男性で、背中には羽のような物を身につけている

「あ…………」

思わず、声をあげそうになるのを堪える

「どうしたのツーー？」

そう、入つて來たのはカルナ

私を、助けて目の前で消えた

私に、ボクにとつて最高のサーヴアント

ランサー、カルナ

私は食べていたご飯を食べ終え、食器を片付けすぐに1人でご飯を食べているカルナへと歩み寄る

「ちよつ！ツー！」

そんな声が聞こえるが私はどうしても話さなきや行けないと想い無視してカルナの元へと歩く

「カルナ……だよね？」

私はそう言うと、カルナは食事を止め私の方を向いた

「確かに、オレの名はカルナだ。だが、何故オレの名を？」

「…………え」

「すまない、オレはお前との面識がないはずだ。聖杯戦争の時にオレに、会った事があるのか？」

その時、ボクはふとF a t eに詳しい友達から聞いた話を思い出した

『■■、普通なら英靈召喚は基本的に召喚された時には前の聖杯戦争とかの色々な記憶がない状態で召喚されるから、こんな感じの二次創作の話つてさ少しあり得ないんだよ。それこそ奇跡でも起きない限りね』

「ごめんなさい……なんでもないわ』

「そうか？ならいいが」

そつか、あの時

私を救つてくれたカルナは…………もう

居ない、会えない

目の前で、消えたんだ

そう思い、私はふと頬に何かが伝うのを急いで拭い部屋へと走る

「ツー！？どうしたの、え？泣いてる！？」

「イリヤ、ツーがどうかしたの！？」

「さつきツーちゃんが泣きながらあっちに走つて行つて…………」

「すぐに追うわよ！ミユ、イリヤ！」

部屋に入り、誰も入つてこないよう鍵をかけ  
布団へと倒れ込む

涙が止まらない、胸が痛い

クツシヨンに顔を埋め、声を殺して泣く

この感情は、一体なんなのだろうか

カルナのあの言葉が、まるで私の胸を刺すよに痛む

悲しい、苦しい私は胸を手で押さえる

こんなこと、始めてだ

感情を押さえ込むことが、涙を止めることが出来ない

その後も私は泣き続けた

布団を被り、部屋を閉め一人で、泣き続けた

???  
s i d e

オレには、いつからかは思い出せないが  
マスターに従い、共に人理を修復するため

様々な特異点、様々なイベントとやらを切り抜けてきた

『カルナつて言うのか！カッコいいな、これからよろしくね』

オレやアサシン達しかいなかつた場所は、いつしか沢山の召喚されたサーヴァントで  
溢れていた

オレより遙かに強く、素晴らしいサーヴァントがいると言うのに、マスターはオレを

ずっと使つてくれていた

『最終再臨終わり、長かつたな。これからも頼むよ、カルナ！』

ああ、オレはお前に従おうマスター

オレは何処までも、共に行こう

そんなある日だ、オレ達のマスターは突如として現れなくなつた  
毎日現れるわけではない、時には数日を置いて現れることがある  
オレ達はそんな風に考えた

その後、数日、一週間、1ヶ月

マスターが現れるることはなかつた

オレはマスターの身に何かがあつたのではと考えたとき

突如として、目の前の建物、人、サーヴァントが次々に、光の粒子となり消えていつ

た

オレ達も同じように光の粒子となり消えた

それからどれだけ時間が過ぎたのかわからない

他のサーヴァント達はどうなつた？

マスターは無事か？

そんな時だ、頭の中で銀髪で琥珀色の瞳の少女が虚空を見つめる風景が見えた

オレは少女を、クロエ・フォン・アインツベルンと何度か共に戦つたことがあるが少女には違和感を感じた

いつもの小悪魔のような雰囲気が消え、あるのはただ孤独と悲しさ

『お腹、すいた……』

そう言つて腹を鳴らす少女にオレは懐かしいものを感じた  
いや、懐かしいモノではないこれは繋りか?

その時だ、頭のなかにある光景が浮かぶ

男性と思われる人物と、あの日消えたマスターが話していた  
『僕が、転生?』

『そうだ。お前の転生特典はクロエ・フォン・アインツベルンの能力、容姿だ。精々俺を楽しませてくれよ?』

『ふざけるな! ボクはそんな事を望まない! そんな転生をするぐらいなら、もう一度死んだほうがいい!』

そう叫ぶマスターだったが、男が手を翳した瞬間、何処かへ消えた

どうか、あの違和感を感じる少女はお前だつたのだなマスター

その時、オレはどうにかマスターを救いたい

そう思いが通じたのか、オレはいつの間にかマスターの眠る近くに現界した

「マス!……」

マスターへと向けた手からは光の粒子がこぼれていた  
恐らくは無理に現界したのが原因か、靈基に多大な負担がかかり、短時間しか顕現出来なくなつてしまつたようだ

マスター、いまお前を救うことは無理のようだ  
すまない、

すぐにオレは靈体化した

こうすることで少しだがオレが現界を靈基を保つ

そしてどうにか戦闘は無理だが動けるぐらいにまでは体を保てるようにし、後は働き  
マスターへと食事を与えよう

そう思い、オレは靈体化したままその場から離れた  
スーリヤよ、どうかオレのマスターを導いてくれ

どうにか、オレは活動拠点となる喫茶店で働くことになつた  
オレは店主に頼み、スープを作りマスターの元へと向かう

ここ数日、雪が降つた

この世界は何処までマスターを苦しめる

この世界の全ての不幸を背負つてゐる、

思わず錯覚させるほど、この世界でマスターは傷付き続けてゐる

そうして路地裏には入ると、いつものように外套に身を包み木箱に座るマスターがい

た

マスターはオレの、いやマスターだった頃の記憶がない

恐らくはこの少女の姿になつた混乱から一時的に忘れてゐるのだろう

「少女よ、生きているか？」

そう言うとマスターがオレに気が付いたのか外套の置くからオレを見る

外套から見えるマスターの顔は酷く曇り、瞳は濁り、体は酷く痩せ細つていた

マスターは受け取ったスープを少しづつ飲む  
前に菓子パンを渡したときは、マスターの胃が弱っていた為か吐き出してしまってい  
た

だが、スープなら胃にも刺激が少ないはずだ  
マスターの瞳から涙が零れ、地面へと落ちる  
大丈夫だマスター、いつかお前は必ず笑顔になれる筈だ  
それまで、オレはお前を救おう

何度もスープを、食べ物を施そう  
可能な限り、共にいよう

いつか、お前が幸せな日々を掴むその日まで

体を……靈基を貫かれ、体が崩壊していく

マスターと同じ容姿をした少女、イリヤスフィールのクローン、そしてその友である  
ミュウと言うクローン

マスターまでもが作られたクローンと言う真実

その事を知ったマスターは、どれほど大きなショックを受けただろう  
だがマスターは、そのショック乗り越え

今もなお、闘志を燃やして武器を握っている  
あの時、1人だつた彼女には多くの友  
帰るべき場所を得た

「カルナ！」

恐らくは、オレの事を思い出したのかマスターがオレの真名を呼んだ

「初めて、真名を呼んでくれたな……」

「なんでこんなことをしたの!?」

オレは、そんな彼女を先に向かわせるため、ここで失わせないため自身の体を使い、マ

スターを守った

「サーヴァントがマスターを守るのは、英靈として当然のこと。それに、お前は俺を最後まで育て最高のサーヴァントと言つてくれた」

そう言つてオレは涙を流すマスターの顔に触れ、涙を拭う

「だから、そんなお前を守れて俺は良かつた。さよならだ、マスター」

そう言つてオレは笑う、せめて彼女に心配をかけぬよう  
体が光の粒子となり、体が消えていく

……マスター、オレはお前を救うことが出来たのだろうか？

出来るなら、オレはお前がこの先で笑う姿を見ていたかつた

恐らくはこれは我儘だつたのだろう

どうかマスター、お前の手で自信の運命を切り開き自らの幸せを掴むことを、オレは  
願つている

だから、恐らくこれは奇跡なのだろう

偶然などと言う言葉は、二度三度と続けばもはや必然と考えられる

「俺の名はカルナ。クラスはサンタだが、ボクサーの可能性もある、1人前のサンタになれるよう、これからトレーニングに励む予定だ。よろしく頼む」

この場にて、少女との繋りを感じるのはきつと奇跡だ  
ああ、オレは恵まれている

元マスター、お前がここにいるなら

記憶を持つたまま召喚されたオレは恵まれている

すぐお前と出会う時を来るはずだ

待つていろ、元マスターよ

# 再開、英雄の帰還

クロエ〔C. C.〕

どうも、私は泣きつかれて眠つてしまつていたらしい  
なんか、私らしくなかつたな

そんな事を考えながら外套を被り自室の鍵を開ける  
するといつも通り通路に出るのでそのまま食堂に向かう  
お腹、減つたなあ

んだ

そう思いながら、食堂の端を歩き兄さんの元へと向かう

姉さん達はもう起きてるのかな？

そう思い、辺りを見回すと思つたよりサーヴァントの数が少なかつた  
なんですか？

もしかして私が眠つてる内に特異点でも見つかつた？

そう思いながら食堂の受付まで向かう

「兄さん、朝ごはんお願ひ」

「む？ C・C・、昨日はどうした？ 急に泣き出したと魔法少女達が心配していたぞ」

「そつか、後で謝らないといけないわね

「もう、大丈夫……平気へつちやら」

「そうか、それにしてもこんな朝早くに起きるとはな」

「え？」

「カルデア内は常に明かりが着いているから分かりづらいとは思うが、今は君が普段に起き出してくる二時間ほど前だ」

「どうりで姉さん達がいなかつたわけね

「と、取り敢えずご飯をちようだい」

「分かつた、いま用意する。何が良い？」

頭の中にカルナが私にカツブにスープを入れて持つてきてくれた事が頭の中によぎる

「じゃあさ……暖かいスープ、それとパンをお願い出来る？」

「了解した、すぐに用意しよう」

あはは……やっぱり私、諦めきれてないのかな

カルナの事

すると兄さんがお盆にコンソメスープの入った皿と、パンが二つ乗せられた皿を乗せて持ってきた

「注文の品だ、スープは熱い内に飲むことを勧める」

「ありがとう、兄さん」

そう言つて、近くの誰も座つてないテーブルに座る  
「いただきます」

そう言つて手を会わせ、スープを掬つて一口飲む

温かい

思えば、あの日も寒かつた私の体と心を温めてくれた  
のは、この食べ物だった

パンをちぎつて、口に運ぶ

ふと、頬を何かが伝つて落ちたのに気付いた

「…………」

私は黙つて頬の涙を拭い、またスープを一口飲む

そしてパンを食べる

まだ、また目から涙が伝うのを拭う

私、こんなに涙脆かつたつけ？

厨房にて調理の手を止めたブーディカはテーブルに座り朝食を取る少女を見た  
ステップとパンを交互に食べながら涙を流す、いつもなら姉たちに囲まれあれやこれや  
と世話を焼かれていたはずの少女がだ

「ん？ エミヤ、あの子供…………泣いてない？」

「む？ C・C・か…………彼女にも色々とあるんだろう。そつとしておいた方が良い」  
そう言つて何処か心配そうな目をするが、調理の手を止めずエミヤは口を開く  
「でも、ねえ…………」

「どうした？」

「普通ならちつちやい子は困つたことがあつたら親や大人の人相談するのが普通じやないのかい？」

その言葉にエミヤは思わず手を止めた

……彼女のいた環境ではその様なこと無理だつたのだろうな

思わずそう考え、止めていた調理を進めるエミヤ

彼女の過去を知り、彼女が頼るべき物は自分だけだつた

自分の身だけで戦い生き延びてきた事を知つた彼には、そんな相手はいなかつたんだろうと考えたからだ

その時だ、食堂の入り口に見たことのない1人の男が入ってきた

真っ黒なフードローブ、肩にサンドバックを担いでおりフードから時折白い髪が見えてた

「ん、彼は？」

「ああ、彼は昨日召喚されたサーヴァントだ。まさか、アルトリアと同じようにサンタに、変わるサーヴァントがいたとはな」

少し見ていると、此方ではなくC・C・の方へと歩きだした

「C・C・に何をする気だ？」

「？」

あれから、どうにか涙を拭いながらご飯を食べきつた  
でも、涙は止まらないままだつた  
ふと、近くに人の気配を感じ振り向く

そこには、昨日とは違う格好のカルナが此方を見下ろしていた  
フードローブを見にまとい、肩にはサンドバッグを担いでいる  
確か、カルナサンタだつけ？  
カルデアで恐らく昨日にでも召喚されたのかな

このカルナなら…………きつと

頭を振りそんな甘い考えを霧散させる

あり得るはずがないのだ、きっとこのカルナも私と過ごした事なんて覚えてるわけない

その時だ。突如としてカルナが膝を付いて私と同じ視線の高さを会わせると手に持っていたサンドバッグを開け片手をその中に入れれる

そして取り出したのは黄色くて丸い食べ物

メロンパンを取り出して私へと差し出した

「メリーカリスマス、クリスマスプレゼントだ。受けとれ」

「…………え」

そうだ、きっと偶然だ

あり得ない、こんなことあり得ないんだから

私は震える手でメロンパンを受け取ると、カルナは私のフードを取る  
どうみても、あの日カルナから渡された同じ商品

「泣くな。目を腫らした顔より、笑顔の方がお前には似合っている」

そう言つてカルナはあの時、私を守つて消えていつたときと同じような笑顔を浮かべ

る

優しく、冷たい私を温かく包み込んでくれるように  
そうだ、きっとこのカルナは泣いてる私を見て泣き止まそうとしてくれたにちがいな  
い

「なあ、元マスターよ」

耐えるのは、無理だった

溢れ始めていた悲しみが嬉しさに変わり、感情を押さえていたダムが決壊する

私は思わず彼に抱きつく

ある、しっかりと体がある

夢じやない、ちゃんと私の目の前に

いる、カルナがいる

「カルナ……カルナア……本当に、私の知ってるカルナなんだね!!」

そんな私を、カルナは涙で服が汚れることも厭わず抱き締め返し頭を撫でてくれた  
「安心しろ元マスター、オレは何処にも行かない、オレはお前の最高のサーヴァントだか  
らな」

ああ、心が温かい

カルナといふと、すごく落ち着いて居られる  
もしかして私は…………でも私は…………

あの感情がなんなか分かつた気がした

でも、いまの私は女の子なんだから、普通なのかな

「元マスター、アルジュナや厨房にいる男から酷く冷たい視線を感じるのだが  
もしかしたら、勘違いされてるのかもと頭の中で考えるが今は別だ  
イリヤやミユは私に幸せに生きてと言つてくれた、だから今だけは  
今だけでもいいから

「お願い、もう少しでいいから……今は一緒に居て欲しいの……」

自分でも赤面するような言葉が自分の口から弱々しい声で出てきた  
うう、恥ずかしい

「フツ、俺はサンタだ。それをプレゼントとして望むなら、お前の気が済むまで共に居よう。元、マスターよ」

そう言つてカルナは優しく頭を撫でてくれた  
すごく心がドキドキする

やつぱりこれが“恋”なのかな？

「おはよございまーすつて!?ツーちゃんがすごい恋する乙女の顔してる!?え!?何!?どう  
いう状況これえ!？」

私のお願いを叶えてくれるカルナは

最高に頼りになつて

最高に格好よくて

私の大好きなサーヴァントだ

# 種族共闘戦線 駒王・鮮血の妖精・ Episode : 1 『特異点』

クロエ (C. C.) side

い  
次の日、私はカルナと一緒にご飯を食べていると、突如として所長に呼び出された  
私とカルナ（サンタ）の他にもプリヤ組のイリヤ、ミユ、クロエが呼ばれているらし  
い

呼ばれた部屋に入ると私たちの他にも藤丸立香、マシュー、オルガマリー、ダヴィンチ  
さんが観測室？に集められた

「今回、とある特異点を観測しました。ロマニ」

特異点、この世界の藤丸達は何処まで進んだか分かつていなから何処に向かうとし  
ても、全力で頑張んないと

「はい、所長。みんな、これを観てくれ」

そう言って出された年号は2□○◇年？の日本だった

所々が文字化けしており、年号が2000年と言うことしか見えない

「え、日本？」

「そう言えば、先輩は日本出身でしたね」

「う、うん。」

そんな会話をマシューと藤丸を他所に口マニが説明を続ける

「日本に特異点が生まれたんだけど、分かるのは2000年から今までの時間の何処かに特異点が生まれたと言う事だけなんだ」

「今までと違った感じですね、ドクター」

「うん。凄い危険そうだけど聖杯の反応も確認されたんだ。その特異点を地名だけなんだ……ただ」

「ただ？」

「その街の名前なんて聞いたことがないんだ、いくら検索にかけてもヒットしなくてね。

そこで日本に住んでいた君たちに話を聞こうと思つたんだ」

「なるほど、でも私たちが集められたのは？確かに私たちも日本に住んでたけど小学生的社会で習つた日本の県とかしか分からないですけど」

そう言つてイリヤが申し訳なさそうに拳手する

確かに、プリヤ組は小学生だし知識もすくないんじや

私は一応高校までの記憶はあるからね、結構知識はあるつもりだ  
魚の捌きかた？そんなの知らない

授業で習わないし

「そうかもしないけど、もしかしたらテレビとかで聞いた可能性もあるからね」  
ダヴィンチさんの解決に納得が行つたのか、頷くプリヤ組

「それで、ロマニその地名は何処なの？」

「よっぽど山奥の村とかかな？」

「町外れの館、とか？」

「もしかしたら、前にイリヤが言つてた犬鳴村だつたりして？」

「ええー!? だ、だつたら今回の特異点は遠慮しようかなあ……アハ、アハハハ」

犬鳴村？ 確かホラー映画かなんかの場所で都市伝説としても有名な奴ね

『この先日本国憲法通用せず』って看板があるんだつけ？

まあ、そんな村が特異点にならないと良いけど

「その特異点の名前は、

駒王町だ』

「え？」

私は思わず、口にだして驚いていた

隣に立つカルナも僅かだが同しているように見える

「ツー？ 知ってるの？」

「そう言えば、ツーは別の世界から来ただんだよね？」

思わずカルナと繋いでいる手に力が入る

「C・C・、確かにあの街が特異点として存在しているのは分からぬ。まずは現地に向かい、調べてまた方が良いだろう」

「う、うん。ドクター、私はその町の出身です」

「それは本当かい!?」

「はい、カルナも……サンタカルナも途中までは一緒でした」

「なるほど、なら今回の特異点の探索メンバーにはC・C・、サンタカルナは必須だね。後はイリヤスフイール、美遊、クロエ、君たちに頼みたい」

「「はい!!」」

「マシユには悪いけどこっちでのサポートに回つてもらうよ」

「分かりました。先輩、頑張ってサポートさせていただきますね」

「所長、指令を」

「ええ。これより新たに発見された特異点の調査を行うわ!! 場所は種族共闘戦線 駒王

!!

もしかしたらお父さんや兵藤君達もいるのだろうか

頭の中にみんなで取った記念写真が浮かぶ

なんで駒王街が特異点として現れたのかは分からぬけど、取り敢えず調査しないと分からぬわね

# E p i s o d e : 1 , 5 『もう1つの結末』

鉛色の空、ザーザーと降る雨が

建物を、人を濡らしていく

そんな雨の中、1人の男が肩で息をしながらも走り

建物と建物の間に入していく

薄暗く、目を凝らせば見えると言つた路地裏には人1人が座れるぐらいの木箱と捨てられたガラクタが散乱している

そこには左肩から剣が生やし

光の無くなつた琥珀色の瞳に褐色の肌、色が抜けだ銀髪の少女

そして金髪で所々から黒髪が見えるいい年の男性が向き合つていた

金髪の男性は肩で息をしており、

男性の顔は悲壯と驚愕が浮かび、逆に少女の顔はまるで無だつた

雨に濡れ、冷めた体に震えることも無く

「雨粒が目に落ちる事ですら瞬き1つすらしない  
なにしてんだよ、クロエ!!」

少女の瞳にはもはや光と言えるモノは存在しない  
いや、無くなつたと言う方が正しいのだろうか

「私はやつぱり、生きてちやダメなんだ」

少女が静かな、まるで感情を感じさせない声で口を開く  
「なんでそんなことを言んだよ! お前は生きてて良いんだよ! 居場所だつて、俺の所があるだろうが!」

男性がその少女の発言に対して口を開く、だが

「きっと、私のせいでお父さんは天使と悪魔を敵に回すことになる。全てを救えなかつた私に対する憎悪と惡意が残る彼らの手がお父さんへと向いてしまう、そんなの嫌だから。それに、私はもう……疲れちゃったんだ」

少女はナイフを持った右手をゆっくりと持ち上げ、ナイフの刃を自信の首へと向けた  
「お、おい…………何をして」

その光景を、見たことがあつた男性の脳に少女と出会つた日の出来事が甦る  
1人の少女が自らの命を絶とうとしたのを止めた

「この世界にとつては結果が全て、そこまでは至る途中にどんな思いがあつたとしても、

どんな事が起こつたとしても、彼らは私の結果だけで私を見る。さようなら、お父さん、私はセイギノミカタにも、1人の人間にも成れませんでした。たくさんの人を殺した私が救われちゃいけない」

そう言つて先程とは違い、まるで長年の夢が叶つた年頃の少女のような、触れれば壊れてしまうような笑顔を、涙を流したがら男性へと向けた

男性は急いで少女の元にてを伸ばす

「貴方の娘になれて、幸せでした」

次の瞬間、少女は自信の首をナイフで掻ききつた

鮮血が舞い、少女が地面へと倒れ伏す

首からはドクドクと血が流れ、周囲を真っ赤に染め上げていく

皮肉にもそれは、少女に付けられた異名のよう

男性は両膝を付いて地面に座り込む

少女の体は以前のように光ることはなく、ただ血を流してそこに倒れていた

その事が、男性には分かつてしまつたのだ

彼女は死んだのだと

男性はその場で拳を握りしめていた

少女の苦しみ、悲しみ

一体どれだけの物を一人で背負っていたのだろうか

年端もいかない少女一人に、世界の憎悪と惡意は重すぎる

男性はそつと、人であつた少女の頬に触れる

暖かみのある男性

冷たくなつた少女

男性は涙を流しながら少女の冷たくなつた体を抱き締めた

「俺は、こんな風にお前の笑顔を見たくなかつた……生きてるときに見たかつた……  
なあ、クロエ」

そう言つて抱き締める少女の顔は、まるで全てから解放されたような笑顔だつた  
だからこそ、男性は自身の弱さ  
世界の理不尽さを嘆いた

だからこそ、少女の存在  
行つて いる行為の知らせは男性にとつて  
当たり前に感じたのかかもしれない

# 番外編『F a t e s t a y n i g h t (前編)』

クロエ side

ノア様に頼まれた依頼を受けた私はとある世界に来て いた  
ノア様に頼まれた依頼はたつた今終わらせ

私は剣の刺さった死体の前に立ち尽くしていた

「オーダー、完了しました。マイロード」

『ありがとう、クロエちゃん…………ついでに少しの間その世界での休みを与えます。や  
りたいことをやつて来なさい、例の封印も一時的に解除することを許します』

ツ!?

『気付いてないとでも思ったの? その世界の転生者はもう排除済み。それに貴方にとつ  
ては少しだけ辛い世界だと言うことは理解しているわ』

そう、この世界は型月の『F a t e / s t a y n i g h t』の世界

英霊工ミヤが生まれ、悲しく絶望の運命に選ばれてしまつた人達の戦う場所

だから、私はせめて少しでもあの人達を救いたい

それが今私の、やりたいことであり

マイロードが許してくれた時間、ノア様の情報では聖杯戦争は終盤まで来ている  
なら今からでも行動を起こして救うのは間桐桜、そして姉さん

私の姉の元となる存在で、本当のオリジナル

なら、私の敵はある男しかいない

桜の中にいる臓硯と蟲は、どうにか出来る

計画通りに行くならば、厄介なのは英雄王ギルガメッシュただ一人

姉さんのバーサーカーや、ライダー、セイバーやアーチャー、ランサーが厄介か

この中で一番分からるのはアーチャー、エミヤの存在だ

同じ力を持つ私に対して攻撃を仕掛けるか、私を監視するのか

ライダーは慎二に付いていると考へて

問題は今がどこまで物語が進行しているのか

取り敢えず、まずは冬木に移動する

何時もの外套を来てから全力で駆ける

路地裏から出て屋根を跳んで渡りながら冬木へと向かう

先ほど冬木への看板が向こうを指していたのでこの方向で良いだろう

私は何時もの外套ではなく、何処にでもいる少女のように見えるよう黒の猫耳パークーにチエツクのミニスカート、ハイソツクスに黒のブーツをはいた服に変わる

「ここが冬木、兄さんや姉さんの育つた町……」

そう呟きながら商店街を歩きながら辺りを観察する

今みた限りだと、原作キヤラの姿は見えない

『Fate/stay night』じゃなくて『衛宮さんちの今日のご飯』の時空なら良かつたのに

そう思いながら近くのパン屋で歩きながら食べられそうな物を購入して食べながら進む

すると住宅街らしき場所に入り込み、そして衛宮と言う表札のある家の前にたどり着いた

少しだけ建物から物音が聞こえるのを見るに、恐らくはまだ動かないのだろう

私はパンを食べ終え、包んでいた紙をポケットに入れつつ

この後のプランを想像する

間桐桜の救済と同時にマキリ臓硯とマキリの虫の駆除

次にギルガメツシユと戦う姉さんを助けて終わりね

近くに誰もいないことを確認してから体を強化して近くの家の屋根に乗り、少し先に見える間桐の屋敷へと走る

恐らくライダーは慎二と共にいるのだと仮定するなら、今の桜はノーマークつまりは、チャンスね

目立たないように再び外套を羽織り少しだけ待つていると

間桐桜が歩いて帰つてきていたので気配を消して彼女の後ろを付いていく

そして玄関を通り、桜が自室と思われる部屋に入つたタイミングで部屋の外から中に転移し桜の背後を取る

相手はまだ気配を遮断している私に気付いていない

「つ?」

そして桜の首を片手で喉を閉めるようにして力を込めて頸動脈を閉める  
すると桜さんは直ぐに動かなくなり、腕をだらんと下げ氣絶した

私はそつと地面に桜さんを寝かせてから腰に付けたガジエットのような見た目の宝具を起動し

剣の等身に出現させる

そしてジャッチメントを握つていなない法の手でもう片方の手を翳しジャッチメント

に施された封印の1つを解く  
 「<sup>シール</sup><sub>リリース</sub>封印、解放神威解放」

ジャッチメントは元々は『生命を司る神ノ剣』ではない  
 現在の刃で刺した対照を回復するものとなつてているが  
 可笑しいとは思わないだろうか

生と死は表裏一体、ならば何故この剣に回復しかないのか  
 私とマイロード、そしてジャッチメントの中に封印された四人の天使が危険だと判断  
 し封印した本来の姿が存在する

元々のこの剣の名称は

『生と死を司りし神ノ剣《ジャッチメント》』

生命を司る神ノ剣の本来の姿であり、通常のジャッチメントと違う点は刀身が赤く変化していること

能力は対象を斬る又は差した人物にギルテイ<sup>有罪</sup>又はイノセント<sup>無罪</sup>を選択する事により発動する。

“ギルティ”の場合は刺した対象を絶対に殺す事が出来る

またその差した対象に存在する何かを伝いその体を創作、又は乗つ取つてゐる人物も殺す事が出来る

“イノセント”の場合は剣で刺した相手が生きているの限りは、例え瀕死や毒等を抱えていたとしても奇跡と言えるような完全治癒を行う事が出来る

そう、これだけでもかなりチートだが更にこの剣に封印されている四人の天使の魂が私に力を貸してくれることにより更に強い力になる

### 【知恵の天使ケルビム】

私を転生させた神が遊びに転生者を作ろうとしていた事に未来予知で最初に気付き他の天使に伝えようとするが神により殺され魂と能力がこの剣に封印された

### 【制裁の天使サリエル】

同族である天使が殺されたことに気付き、他の神に伝えようとしたところを神に見付かり殺された

### 【守護の天使エクシスアイ】

私を転生させた神により殺された二人の天使を見せられ絶望したところを殺され同じように封印された

### 【正義の天使メリヒム】

私を転生させた神が自身の遊びのため、転生者を生み出していた事に気付いた天使。神に対して反逆しようとしたが殺され魂と能力がこの剣に封印された。

この四人の力と監視のもと、初めて私は生と死を司りし神ノ剣『ジャツチメント』を

使う事が出来る

「生ジャッと死チを司メリし神トノ剣ス、制裁起動ターボ」

詠唱を終えた途端に、剣の刃の部分が赤く染まっていく

私はその剣を桜さんのお腹へと突き刺す

そしてその剣から桜さんの体と繋がるマキリの虫、そしてマキリの虫からマキリ臓硯への魔術の繋がりを辿る

「対象 „マキリ臓硯“ 及び „マキリの虫“、 „聖杯の欠片“」

『ピピツ、対象を捕捉。有罪ギルティ or 無罪イジセント』

「セレクト、ギルティ！」

ジャッチメントに魔力を込めると、ジャッチメントと桜さんの体を通してマキリの虫とマキリ臓硯へとジャッチメントの力が流れしていくのを感じた

これで良い、これで奴らは恐らくは死んだ

あとは桜さんの体を直すだけ

「ジャッチメント、対象 „間桐 桜“」

『対象を捕捉、有罪ギルティ or 無罪イジセント』

「セレクト、イノセント」

そう詠唱してからジャッチメントを引き抜くとだんだんと桜さんのお腹の刺し傷が

元から無かつたかのように消えていく

ジャッチメントを元の状態に戻したあと、何時もと同じように腰にセットする  
実はジャッチメントって待機携帯は腰にセットする以外にもウルトラマンメビウス  
やヒカリのように腕輪にして身に付ける事もできる  
もちろん腕輪状態で剣を出すことも

私は桜さんが倒れている近くに1つの手紙を残して、即座にその場から離れた

「私は…………つ!?」  
間桐桜が目を覚ましたのは、空が赤くなる時間帯であつた

桜は体に違和感を覚えつつ立ち上がり自信を襲撃したと思われる人がいなか周囲を見回す

ふと、倒れていた場所の近くに手紙のような物が落ちていた  
恐る恐る手紙らしき封筒を取り、中の手紙の文面に目を通す

『間桐 桜さんへ。

初めまして、貴方の家に潜入り貴方を氣絶させると言う事、そして恐怖を与えてしまつたであろう事を謝罪いたします。

貴方を通して蟲とゾウケンを殺すためとはいえ、本当にごめんなさい。』

その文を呼んだ桜は自信の体にあつた違和感の1つであるその事に驚き、急いで他の部屋を確認すると至るところに大量のマキリの虫が死んでいるのが見え、更に目を見開いて驚愕した

そして再び先程の手紙の続きを通す

『そしてもう1つお知らせことがあります。貴方の体を通してゾウケンを殺す際に貴方のお腹に剣を刺し、そして殺し終えた後に貴方の体を直させていただきました。きつとお腹の傷は綺麗さっぱりとなくなっているかと思います』

即座に桜は自分の服をめくり自身の腹を見るが切り傷ひとつなく触つても痛くな

かつた

とてもだが、剣を刺されたとは思えない

『治療時なのですが、その……書きづらいのですが貴方の■■■も治つてあるかと思いま

一応、私は女性ですのでそこら辺は安心してください』

その文面を見た瞬間に顔を赤くする桜はその続きを読む

『どうか、今度こそ貴方の好きな方に捧げてください。

私は貴女が無事にその好きな方と添い遂げられるよう祈っています。

訳あつて私はあなたの方の前に姿を表すことはしません

桜さん、どうか兄さんと姉さんを

士郎とイリヤをよろしくお願ひいたします

鮮血の妖精クロ。』

# 番外編『F a t e / s t a y n i g h t』後編

クロエ side

姉イリヤさんを救う

それは、運命の破壊

一つの物語の破綻、世界の定めの崩壊

例え、そうだとしても目の前のその思いを……意思を変えるつもりはない

そうだ、私は救うんだ

無力で、姉さんを殺すしかなかつたあとの時とは違う

私は力を手にした

私は人でもホムンクルスでもない存在になつた

主神からも許可を得た私は鮮血の妖精から全てを破壊する天使となろう

鷹の目により、目の前に映るのは激戦を終えたのか姉さんが身体中に包帯を巻かれた

状態で眠っている様子が見える

姉さん、待つて

今、貴方を人にするから

私は隠れていたアインツベルン城近くの森の上から飛び降り音もなく着地、即座に走り出す

いくつもの木々を避け、魔術によるトラップはルールブレイカーで破壊し城内に潜入した

考えてみたら私が英靈化したらアサシンのクラスでも大丈夫そうねと思う

セラとリズの眼を盗んでイリヤ部屋へと侵入し、移動しながら詠唱を済ませ、刀身が赤くなつたジャッチメントを構え、姉さんの胸へと

「グッ!?」

突き刺そうとしたとき、横から現れた大きな腕が私の喉を掴み、そのまま持ち上げられた

見れば、恐らくは姉さんが危ないと想い靈体化を解いたとかバーサーカーがそこに立っていた

「■■■■……!？」

私はジャッチメントこそ手に持っているが喉を閉められだんだんと苦しくなつてくる

一方、バーサーカーことヘラクレスは私の見た目に僅かに驚いたのか少しだけ腕の拘

束が緩んだ

それはそうだろう何故なら私はイリヤそつくりなのだから

私はその隙に拘束から抜け出すとジャッチメントを姉さんの腹へと突き刺す

「ジャッチメント！ 対象、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン！」

『対象を捕捉、有罪ギルティ or 無罪イノセント』

「セレクト、イノセント！」

すると刀身から魔力が、姉さんへと伝わり姉さんの体を人間へと作り替えていく  
鎖をつけられた鳥から、自由に空を羽ばたく鳥のように全てを解放して逃げられるよ  
うに

そう言つて即座に刀身を抜くと腹の傷ですら完治していく

私は即座に近くの紙に、ペンで姉さんへとメツセージを残す

何故かは分からぬいけどヘラクレスは私へと攻撃はしてこなかつた

恐らくは私が姉さんに行つた行為が大丈夫なのだと察知したのかも知れない  
さて、後メツセージも書き終えた

「ヘラクレス、貴方もこの剣で刺して回復させる。」

そう言うとヘラクレスは黙つて眼を閉じた

恐らくは了承してくれたのだろう

私は日か続きジャッチメントの力行使しヘラクレスの宝具、ゴットハンドの命のス  
トックを全て復活させる

「次は、黄金のサーヴァントが城に来るかもしだれない。だからもし姉さんに何かがあつ  
たら助けてあげてヘラクレス」

私はそう言つて部屋の窓から出て再びアインツベルン城内の森へと身を隠した

イリヤスフィール s i d e

目が覚めると、体が不思議なほど軽く、そして異様なほどに違和感を感じた

ふと怪我をして包帯を巻いている所に触れるが痛みは無く、包帯をとればそこには一切傷付いていない肌があつた

おかしい、いくらなんでもこんなに治療が早く終わるなんてあり得ない

ふと、枕元に紙が置いてあるのが見える

だれ？セラやリズだつたら直接言つてくるはず

そう思いながらその手紙を開く

### 『姉さんへ』

姉さんへ？もしかして士郎？そんな事を考えつつ続きを読み上げる

『突然で困惑すると思いますが、落ち着いて読んでください。まず今の貴方はもうホムンクルスではありませんです、人間です。』

その一文を眼にして私は眼を見開く

先程から感じていた自身の慣れ親しんだはずの肉体にある違和感の正体

『私の宝具、そして立場からある程度姉さんへの干渉を許されています。貴方の体を人間として創造し直しました、そして貴方のサーヴァントであるヘラクレスの宝具。ゴットハンドの命のストックも増やしておきました。』

私の妹を名乗るこの手紙の主は一体何者なの？

サーヴァントの宝具を回復して、更には私の体を人間に作り替えた？

あり得ない、そんな事を成し遂げるなんてそれこそ魔術ではなくて魔法

『私が今貴方に真実を伝えるため、姉さんの過去にあつたキリツグさんに関する真実を書いておきます』

そこに書かれていたのは第四次聖杯戦争をキリツグが勝利したこと、だが聖杯は汚染され破壊するしかなかつたこと

そして聖杯を持ち帰らなかつたキリツグへとアインツベルンが結界を張り私と会えなくしたこと、キリツグは何度も私を助け出そうとしたけど無理で、聖杯に汚染され寿命で死んでしまつた事が書かれていた

『どうか逃げてください、兄さんの元へ。黄金の英靈は私が止めます。』

全く考えが分からぬ、そもそも私には妹はない

その考え方と共にこの手紙に書かれていることが事実であるとの証拠がない  
『信じられないとは思いますが、どうか私を信じて下さい』

そこで、手紙は終わつている

訳が分からぬけど、体が人間になつた以上

この手紙の内容は信じられる物なのだろう

そう考へ、すぐに家を出ようと考へたが今出ると回りからも怪しまれる  
まず、土郎の所に行かないとね

この手紙の内容も、話した方が良いだろうし  
s i d e o u t

その日、衛宮家には桜、リン、アーチャー、セイバー、イリヤが集まっていた  
突如として衛宮家へと訪問してきたイリヤと桜に凛と士郎は困惑しつつ居間へと通  
した

「あの、先輩に聞きたいことがあります」

それぞれのサーヴァントの元に置いてある飲み物を飲みつつ、今のテーブルを囲むよう位に座っている

「あの、先輩に聞きたいことがあります」

そう言つて桜が手を上げて衛宮士郎へと視線を向ける

「俺か？」

「はい、先輩つて妹いませんよね？」

そう、イリヤは年齢上では衛宮士郎の姉

今まで衛宮家の元に通い、料理を習つていた彼女は妹と思われる存在を全く見ていいのだ

「いなないけど、それがどうしたのか？」

「実は、少し前にこんなものが私の部屋に」

そう言つて桜は一つの紙を取り出す

「何よそれ…………は？」

そう言いつつ、テーブルの中央に置かれた手紙を凜が目にすると即座に固まつた

その内容はとても可笑しく、そして信じられないものだつたからだ

「俺の妹!?」

「肉体の修復!?なんなのよ、しかも鮮血の妖精!?中二病か！しかも桜の体を通してマキ

「リ臓硯を殺した!? 訳が分からない!?

あまりの情報の多さ、そしてあり得ない内容に遠坂凜は頭を抱える

「鮮血の妖精、クロですか。でも、此方に書かれた文の兄さんと姉さんは一体……」  
セイバー、アルトリア・ペンドラゴンはそう言つて手紙に描かれている人物について  
謎を覚える

「多分だけどサクラの手紙に描かれている兄さんは士郎よ。そして、姉さんは私よ」  
「何故ですか、イリヤスフイール」

「おいおい、何でそうなるんだ? そもそも俺にもイリヤにも妹なんていないだろ」  
「だつて私の所にも来たもの」

「は?」

「へ?」

イリヤの発言に間の抜けた声を出す凜に士郎

「そなんですか!?

「ええ。私の場合はサクラよりもっと凄い内容よ?」

そう言つて苦笑いしながらイリヤが取り出した手紙にはイリヤの体を人間として作  
り直した

しかも描かれている文からは、この手紙の差出人はかなり高い立場に居ることがわか

る

次に描かれているのは第4次聖杯戦争の真実、そして聖杯の汚染  
そしてイレギュラーである前回の聖杯戦争にて残つたサーヴァントを殺すと書かれ  
ていた

「なんなのよ、この手紙の差出人は……士郎とイリヤの妹を名乗るわ、さらつと魔法を  
使つてるし」

「一体…何者なんでしょうか……」

そう呟く桜に、その場にいた全員が思考する

その後、いくら思考しても考えが思い付かなかつた

そして夜、運命の時が訪れる

本来ならばギルガメッシュがイリヤを襲撃した場所はアインツベルン城  
だが、今イリヤがいる場所は衛宮家

そして今黄金の英雄は、動き出す

自信の狙いである少女のいる場所へと

そして、それを感知したこの世界へと降り立つた少女もまた、動き始めた

クロエ  
s i d  
e

ギルガメツシユが動き出したことを感知した、いや正確には予知した私はギルガメツシユの向かっている衛宮家へと駆けていた

屋根を、柱を足場に加速していく

そう原作ならばイリヤはアインツベルン城にいる

だが、今は違うつまりは、衛宮家を狙うことになるのだ

私は衛宮家のすぐ側で歩いているギルガメツシユを発見する  
気配は遮断したままジャンプして飛び上がり、即座に弓と剣を投影し弓につがえ、放

つ  
だが、その攻撃はギルガメツシユの背後に現れた黄金の波紋、王の財宝より射出されたした剣にて防がれた

そしてギルガメツシユの瞳が私を捉えると、同時に着地して距離を取る

「貴様、フエイカ贋作ハーモニカ者ではないな。何者だ？ 我の邪魔をするな、今の我是機嫌が良い。即座に我的前から消え失せよ、雑種」

「嫌よ、貴方はここで終わらせるから」

そう言つてエクスカリバー・モルガンと銃剣の干将莫耶の片方を投影して構える

「その剣、何故貴様のような雑種が……」

エクスカリバー・モルガンを見るとギルガメツシユが何か呟く

私は大きく認識阻害の結界を張ると銃剣干将莫耶をギルガメッシュへと向ける  
これ以上、姉さんと兄さんにてを出させない

二人の幸せのためにも、壊す

この運命を、英雄を、物語を

私は駆け出すと、ギルガメッシュの背後に先ほどと同様に波紋が現れ様々な武具が射出されてくる

私は干将莫耶の引き金を引き、剣へと銃弾を打ち込み私への軌道をずらし、転移して斧を避け魔力を放出させたエクスカリバー・モルガンで他の武具達を薙ぎ払う

その様子にまるで新たなおもちゃを見つけたような顔をするギルガメッシュに私は嫌な予感がした

先ほどの倍の数の波紋が現れる

私は即座に両手の剣から手を離し魔術回路を起動する

「フリーズアウト  
ソードバレルフルオーブン  
停止解凍、全投影連続層写！」

空中に浮かんだいくつもの投影された剣がギルガメッシュの射出する宝具へと向かっていく

やはり、英雄王はそう簡単に殺せない

そう思いながら、私は腰に着けたジャッチメントを外し、戦闘形態である剣の状態へ

となる

今、私のリミッターは全てを解放されている

「行くわよ、英雄王さん。私の全力限界突破の力で貴方を英靈の座に送つてあげるわ」「ほう、雑種が思い上がったようだな……しかも我的知らぬ宝具を使用するとは」

そう言うギルガメッシュが私を見る眼は、先ほどまでの遊具を見ていた眼から威圧感のある今にも私を殺さんとする眼になつていて

私はジヤツチメントに埋め込まれた宝玉に手を翳す  
『生命を司りし神ノ劍』封印、解除

魔力が魔術回路を通つて私の背中へと伝つていく

ジヤツチメントに封印されている四つの魂の封印を解く

主神の封印が解かれた今、この封印は私の意思のみで成り立つてゐる

真つ赤に染まつた刀身のジヤツチメントの宝玉へと手を翳し続ける

「神威靈装、解放！」

その宣言と共に、宝玉が発光を始めた

「第四章、知恵の天使！」

『私の知恵を貴方に……』

私の背後に片眼が隠れており、片手を胸に当ててゐる背後に三対の翼を生やした少

女、ケルビムが現れる

「第三章、制裁の天使」

『我らの敵に裁きを』

『貴方の全てを護りましょう』  
現れたのは金髪を横で少し纏め帽子を被つた三対の翼を持つた少女、サリエルが現れる

「第二章守護の天使」

『お前の信じる正義の為に』

「第一章正義の天使」

現れたのは赤髪でサムズアップする少女、メリヒム

私は一度息を吐き、詠唱を開始する

「この力は良き結果、良き世界のために」  
体が変化していく

「我が身は人にして、人に非ず」

髪が少し伸び私の右目を隠すようになり、着ていた服は背後に佇む天使達の服のように一部が変化し光の線が走っている

「解き放たれし四大天使よ、我の呼び声に答えその力を私へと宿せ！」

すると背後に佇む天使達が光の粒子となり私の背中に入つてくる  
頭には天使の証である神々しい光輪が現れ、背中からバサツと音を立てて4対の翼が  
広がる

父より受け継いだ漆黒の翼

眷族となり天へと至つたモノの純白の翼

主神の眷族の証、輝く黄金色の翼

そして偉大なる四人の天使の力を受け継いだ証である七色に輝く虹色の翼

「熾天使」<sup>アーヴ・セラフ・フォース</sup> IV、神劍『制裁』<sup>ジャッジメント</sup>『起動』<sup>スタート</sup>

私は空中に滯空したまま手に持つた赤い刀身のジャッジメントをギルガメッシュュへ  
と構える

「貴様……」

「降臨さあ、はじめましょう」

「よくもその姿で、我的前に現れられたな……雑種、いや神の使いか？覺悟は良いか？」

そう、ギルガメッシュは過去に神の呪いにより唯一無二の友を失つた

ならば、私の事を睨み付けてくるのも

殺そうとしてくるのも頷ける

「……ケルビム」

『……時よ』

即座に脳内にギルガメッシュが私へと王の財宝で武器を射出して羽が切り裂かれる  
未来が見えた

知恵の天使ケルビム、受け継いだのは未来予知と遠隔での光の爆発を起こす力  
「エクシスアイ」

『護りなさい、我が盾よ』

私は左手を目の前に翳す

すると、翳した指の先に薄く光を放つ光の盾が現れ、ギルガメッシュの放った伝説の  
武具の元となつた物を弾く

「エクシスアイ」

『穿ちなさい、我が剣よ』

左手を天へと掲げる

すると、先ほどと同じように薄く光を放つ透明な剣が四つほど現れる

その掲げた剣をギルガメッシュへと向けると中へと浮かぶ剣はその剣先をギルガ  
メッシュへと向けて放つ

守護の天使エクシスアイ、受け継いだのは天使の羽の装飾を持つ盾と剣  
「ツチイ！」

ギルガメツシユは舌打ちし王の財宝より武具を射出してその剣を弾く  
その瞬間に私は羽を使い高速にギルガメツシユへと向かう

「サリエル」

『狙い撃つ、我的早撃ちに付いてこれるかな?』

私の回りに次々に薄く光を放つ光の矢が現れる

一方、ギルガメツシユも次々と武具を射出してくる

.....ケルビム

『予測、サリエルの矢で全てを弾く。問題ない』

「サリエルの矢よ」

すると、此方へと射出されてくる武具へとサリエルの矢が飛んで行き武具を打ち碎く

制裁の天使サリエル、受け継いだのはサリエルの使っていた光の矢を放つ

「本当なら優しき王ギルガメツシユよ、貴方を聖杯の汚染より解放します」

メリヒム

『おう、任せな。お前はお前の信じる正義を貫けば良い、オレが全力でサポートしてやる』

魔術回路が発行し、私のからだが強化される

私は左手を目の前に翳す

すると私の背中に生えた虹色の翼が発光する

私の左手へと集まり、その光を形に変えて行く、そこに現れたのは虹色の剣  
正義の天使メリヒム、受け継いだのは彼女の力を収束させた一つの剣と自信の信じる  
正義への戦いに対して発生する強化魔術

私は虹色の剣を握りしめ、ギルガメツシユへと向かっていく

「天の鎖よ！」

此方へと黄金の鎖が向かつてくる、私はそれを一度急上昇して避けるが、まだ天の鎖  
は追つてくる

私は逆に鎖へと反転して向かい、ジャツチメントと虹色の剣をクロスして構え向かつ  
ていく

そのまま剣をXに振るうとクロスした斬撃が天の鎖を切り離す

そして再びギルガメツシユへと高速で飛行し、ギルガメツシユへと迫る

早く、早く

ギルガメツシユへと羽を羽ばたかせる

「おのれ、おのれおのれおのれええええええええええ！」

ギルガメツシユが王の財宝より沢山の武具を射出してくるが、ケルビムの見せてくれ  
る未来のおかげで的確に避け続け、たまに剣で弾く

出来るだけ早く、早く

己の信じる正義の為に、この世界の姉さんや兄さん達の為に私はひとつ物語を破壊する

「これで、終わりよ！」

ギルガメッシュは私が接近してくる中、背後の波紋から一振の剣を取り出す  
私はジャッジメントを袈裟懸けに振り下ろす

ギルガメッシュはそれを弾こうと剣を真上へとあげることになる

私はその瞬間に虹色の剣を手放し、右手に持ったジャッジメントを横風に振るう

「ガツッ！」

それは武装もせずに戦闘を挑んできたギルガメッシュの腹を容赦なく切り付ける  
そして落ちてくる虹色の剣を逆手で掴んでギルガメッシュへと振り下ろす

虹色の剣は容赦なくギルガメッシュを切り裂いた

致命傷の傷、ギルガメッシュからは粒子が溢れ出す

『一制裁 正義の執行 《ジャッジメント・サンクション ジャスティス》』

「神の使いに、我が……」

そうギルガメッシュが口を紡ぎ、全てが粒子となつて消えた

終わつた、おれで姉さんと兄さんはもつと幸せに暮らせる

両手に武器を持つたまま、空に浮かぶ月を眺める

同時に私の結界に複数の何者かの侵入が確認された

『ツ！ エクシスアイ！ 盾を!!』

『わ、我が盾よ！』

その時だ、私へと高速で飛んできた何かをエクシスアイが展開した盾が弾いた  
私は即座に空中へと飛び上がり、攻撃してきた人物を探す

そこには此方へと弓を向けた英霊エミヤ、兄さんの姿があつた

何故？ そう思つていると一つの考えにたどり着く

英霊エミヤはアラヤと契約し世界の守護者となつた

つまり、今のこの世界にとつてのイレギュラーであり、この世界を少し崩壊する可能性を作つた危険な存在である私を殺せと命じられたのだろう

私は英霊エミヤが放つて来る剣達を空を飛んで避け続ける

『クロエちゃん、聞こえますか？』

「マイロード、聞こえます！」

『今から貴方の真上に私たちの世界へと帰れるワープゲートを開きますので少しだけ耐えてください！』

「イエス、マイロード」

『時よ！』

すると頭の中に私の羽が何枚も撃ち抜かれ地面へと落ちていく姿が浮かび上がった  
そう、あくまでもケルビムの未来視は私を含めその光景を映し出す

例えるならガンダムWのゼロシステムのような物だ

つまりは罪悪感自分の死ぬ光景や友人が死ぬ光景も見える

だからこそ、心をしつかりと持たなければならないのだ

私は持っていた虹色の剣とジャッチメントで飛んでくる剣を壊れた幻想をされる前ブローケンファンタズム  
に切り裂いては羽ばたき、切り裂いては羽ばたき高速で動き回る

魔力はまだ4割は残っている、戦闘に問題はない

「おい遠坂！どうなってるんだよ！早くアーチャーを」

「やつてるわよ！でも念話は通じないし、令呪も反応しないのよ！」

「私がアーチャーを止めても良いけど、バーサーカーじゃ殺しちゃうわ」

その会話が聞こえ、そちらを見ると少し先に衛宮士郎だつたときの兄さんと姉さん、  
そして遠坂凜が話し合っていた

『クロエ！前!!』

「ツ！」

兄さんと姉さんに気を取られ、気付けば直ぐそこまで大量の剣が飛んできていた  
背後には姉さん達がいる、どうにか防がないと！

「アクシスアイ！・サリエル!!」

『サリエルにお任せを！』

『我が武具達よ！』

すると私を護るように二つの盾が現れ私を囲むように大量の剣と矢が浮かんでいた  
私は早速剣を兄さんに向けると剣と矢が飛んで行きすぐ近くまで来ていて間に合わ  
なそうな物は盾が剣を弾く

そして私の後ろへと向かう剣は声即で向かい叩き斬る  
が、一つ盾を抜けて此方へと飛んでくる剣が見える

私は虹色の剣を振るいその剣を破壊

「ツ!？」

しようとした瞬間にブローケンファンタズムが発動し私の体を、翼を剣の破片が傷付  
け

爆風が遅い後ろへと吹き飛ばす

私はどうにか吹き飛ばされながらもサリエルの矢を放ち飛んでくる剣を相殺しつつ、  
どうにか地面に落ちる寸前で浮かび上がる

「綺麗…………」

そんな呟きが聞こえ、振り向くとそこには青い服を来た姉さんや兄さん、凜さんが立っていた

思わず頭が真っ白になる

「…………大丈夫、アーチャーは直ぐに元に戻るから」

安心させるように軽く姉さん達に笑いかけると姉さん達に被害が行かないよう 英霊エミヤへと羽ばたき、高速で向かっていく

飛んでくる剣を必要最低限の動きで避け続ける

追つてくる効果のある剣は斬り碎く

それをひたすら続けていると、マイロードからの念我が届いた

『クロエちゃん！準備が出来たわ！』

その声と共に私の真上に車が通れ そうな程のワームホールが現れる

この世界から消えればエミヤは元に戻るだろう

どうか、姉さんに兄さんにエミヤ

幸せに暮らして下さい

そう思いながら私はワームホールへと羽ばたき、この世界から消えた